

名護市文化財調査報告書第 28 集

ナングシク遺跡群

—市内遺跡詳細分布調査報告書—

令和 3（2021）年 3 月
名護市教育委員会

序 文

本書は、名護市教育委員会が平成 25 年度～ 26 年度にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査のうち、ナングシク遺跡群の調査成果をまとめたものです。名護市にとって重要な史跡である名護城^{なんぐすく}の発掘調査成果を公表できることをたいへんうれしく思います。

現在、名護市のさくらの名所として有名になっております名護城は、14 世紀の初め頃に、北山の世の主・湧川王子の一族である名護按司により築かれたグスクであると伝えられています。16 世紀末から 17 世紀初めに琉球王府により編さんされた「おもろさうし」の「第十七 恩納より上のおもろ御さうし」には、「名護^{なご}の小照^{こて}る曲^は ゑけ 見物^{みもん}小照^{こて}る曲^わ ゑけ」（名護の小照る曲の立派なことよ。ゑけ。勝れて立派な小照る曲の見事なことよ。ゑけ）と謡われています。「名護の小照る曲」は名護城のことで、見事な「曲（曲輪）」だと謡われています。

名護城には世界遺産に登録されているグスクに見られるような石垣はありませんが、斜面を削平した曲輪や尾根を断ち切った堀切などの防御施設を見ることができ、日本の中世の山城を思わせる特徴的なグスクとして注目を集めています。

今回の発掘調査では、主に 14 世紀から 17 世紀の陶磁器が出土しており、伝承されている時代とほぼ一致していることがわかってきました。さらに建物の柱や炉の跡も見つかっており、少しずつではありますが名護城の姿が明らかになっています。引き続き、丁寧な発掘調査を行い、名護城に、いつの時代どのような建物があり、どんな暮らしをしていたのかということなどを明らかにしていきたいと思います。

また、名護城には今も城区の拝所が残っており、毎年旧暦の 9 月 9 日に行われる村踊りの際には、名護城の頂上で踊りが奉納され、今でも地域の方々に大切にされている場所であることがうかがえます。名護城は、名護市の歴史を明らかにする上で欠かせない史跡です。これからも地域のみなさま方とともに名護城の姿を明らかにしていきたいと思います。

結びに、本書を作成するにあたり、ご協力ご指導を賜りました関係者のみなさまに深く感謝を申し上げ、刊行のあいさつといたします。

令和 3（2021）年 3 月

名護市教育委員会

教育長 岸本 敏孝



巻頭図版 1 名護町時代の名護城遠景（1950 年代）



巻頭図版 2 現在の名護城遠景（2021 年 2 月現在）



巻頭図版 3 堀切 1



巻頭図版 4 堀切 2

例 言

1. 本報告書は、平成 25（2013）～ 26（2014）年度に文化庁国庫補助を受けて名護市教育委員会が事業主体となり実施した市内遺跡詳細分布調査のうち、ナングシク遺跡群発掘調査の成果を収録したものである。
2. 対象であるナングシク遺跡群は、沖縄県名護市字名護城原及び以上原に所在する。
3. 発掘調査並びに資料整理に際しては、諸氏・機関に協力及び指導助言を頂いた（第Ⅰ章第2節）。
4. 本書掲載の地形図は、名護市役所発行の地形図を使用した。
5. 本事業における体制は、第Ⅰ章第2節に記す。
6. 本書の編集は、真栄田義人が行った。
7. 本書の作成にあたり、執筆は下記のように分担した。
宮城智浩（第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章）
真栄田義人（第Ⅳ章、第Ⅵ章）
パリノ・サーヴェイ株式会社（第Ⅴ章）
8. 調査で得られた記録類（各種図面・写真等）及び出土遺物はすべて名護市教育委員会（文化課文化財係）にて保管している。

凡 例

1. 本書掲載図（遺構図等）における座標軸は、平面直角座標第ⅩⅤ系（世界測地系）を使用している。なお、基準方位は座標北である。
2. 基準高は、海拔高（那覇）を使用している。
3. 土層観察・遺物観察等における土色判定は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に準じている。
4. 本書における先史時代の時代区分名称については、『新沖縄県史 各論編第二巻 考古』における「沖縄県史考古年表（沖縄諸島）」に準拠した。
5. 壁面実測図・遺構実測図・遺物実測図の縮尺は、適宜設定している。
6. 図版内の番号は、遺物実測図内の番号と一致する。

本文目次

序文

巻頭図版

例言・凡例

本文目次

挿図目次

挿表目次・写真目次

図版目次

第Ⅰ章 調査経過	1
第1節 調査の目的及び経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	6
第1節 名護市の位置と地勢	6
第2節 ナングシク遺跡群の地理的環境	7
第3節 名護城の歴史・文化的環境	8
第Ⅲ章 調査の方法	11
第1節 調査区の設定	11
第2節 調査の方法	11
第Ⅳ章 調査結果	13
第1節 試掘調査	13
1. T.P. 1	13
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
2. T.P. 2	17
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
3. T.P. 4	22
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
4. T.P. 5	25
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
5. T.P. 6	27
(1). 層序	
6. T.P. 7	28
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
7. T.P. 8	31
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	

8. T.P. 10	35
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
9. T.P. 11	37
(1). 層序 (2). 遺構 (3). 出土遺物	
10. T.P. 16	41
(1). 層序 (2). 出土遺物	
11. T.P. 17	43
(1). 層序 (2). 出土遺物	
第2節 桜施肥箇所出土遺物	47
第3節 表採資料	50
第V章 自然科学分析	60
第VI章 総括	71
引用・参考文献	73
図版	75
報告書抄録	103

挿 図 目 次

第 1 図	名護市の主な遺跡年表…………… 4	第 36 図	T. P. 16 南壁及び西壁面図…………… 41
第 2 図	名護市の遺跡分布図…………… 5	第 37 図	T. P. 16 出土遺物…………… 42
第 3 図	沖縄本島及び名護市の位置図…………… 6	第 38 図	T. P. 17 南壁面図…………… 43
第 4 図	ナングシク遺跡群及び 周辺遺跡分布図…………… 7	第 39 図	T. P. 17 西壁面図…………… 44
第 5 図	ナングシク遺跡群周辺の 地質分布図…………… 8	第 40 図	T. P. 17 出土遺物…………… 44
第 6 図	三山時代の主要グスク分布略図…………… 8	第 41 図	桜施肥箇所的位置図…………… 48
第 7 図	琉球国之図にみる名護城…………… 9	第 42 図	桜施肥箇所出土遺物…………… 49
第 8 図	名護城からの移動経路…………… 9	第 43 図	表採（青磁）…………… 52
第 9 図	試掘グリッド位置略図…………… 12	第 44 図	表採（白磁・翡翠釉陶器・ 黒釉陶器・備前陶器）…………… 54
第 10 図	T. P. 1 北壁及び南壁面図…………… 13	第 45 図	表採（カムイヤキ・瓦・土器）…………… 55
第 11 図	T. P. 1 東壁面図…………… 14	第 46 図	表採（石製品）…………… 57
第 12 図	T. P. 1 遺構検出状況…………… 15	第 47 図	表採（石器 1）…………… 58
第 13 図	T. P. 1 出土遺物…………… 16	第 48 図	表採（石器 2）…………… 59
第 14 図	T. P. 2 東壁及び南壁面図…………… 17	第 49 図	焼土および焼土対比資料の X 線回析チャート…………… 66
第 15 図	T. P. 2 遺構検出状況…………… 18	第 50 図	名護城の縄張り図…………… 74
第 16 図	T. P. 2 炉跡平面及び断面図…………… 19		
第 17 図	T. P. 2 ピット No. 13 平面及び断面図…………… 19		
第 18 図	T. P. 2 出土遺物…………… 21		
第 19 図	T. P. 4 南壁及び西壁面図…………… 23		
第 20 図	T. P. 4 遺構検出状況…………… 24		
第 21 図	T. P. 4 出土遺物…………… 25		
第 22 図	T. P. 5 北壁及び東壁面図…………… 26		
第 23 図	T. P. 5 遺構検出状況…………… 26		
第 24 図	T. P. 5 出土遺物…………… 27		
第 25 図	T. P. 6 東壁及び南壁面図…………… 28		
第 26 図	T. P. 7 北壁及び東壁面図…………… 29		
第 27 図	T. P. 7 遺構検出状況…………… 29		
第 28 図	T. P. 7 出土遺物…………… 30		
第 29 図	T. P. 8 北壁及び東壁面図…………… 31		
第 30 図	T. P. 8 遺構検出状況及び ピット No. 1 断面図…………… 32		
第 31 図	T. P. 8 出土遺物…………… 34		
第 32 図	T. P. 10 北壁及び西壁面図…………… 35		
第 33 図	T. P. 10 出土遺物…………… 37		
第 34 図	T. P. 11 遺構検出状況…………… 38		
第 35 図	T. P. 11 出土遺物…………… 40		

挿 表 目 次

第1表	ナングシク遺跡群周辺略歴 及び調査略歴……………10
第2表	T.P. 1 出土遺物一覧……………16
第3表	T.P. 1 出土遺物観察一覧……………17
第4表	T.P. 2 出土遺物一覧……………20
第5表	T.P. 2 出土遺物観察一覧……………22
第6表	T.P. 4 出土遺物一覧……………24
第7表	T.P. 4 出土遺物観察一覧……………25
第8表	T.P. 5 出土遺物一覧……………27
第9表	T.P. 5 出土遺物観察一覧……………27
第10表	T.P. 7 出土遺物一覧……………30
第11表	T.P. 7 出土遺物観察一覧……………30
第12表	T.P. 8 出土遺物一覧……………33
第13表	T.P. 8 出土遺物観察一覧……………34
第14表	T.P. 10 出土遺物一覧……………36
第15表	T.P. 10 出土遺物観察一覧……………37
第16表	T.P. 11 出土遺物一覧……………39
第17表	T.P. 11 出土遺物観察一覧……………40
第18表	T.P. 16 出土遺物一覧……………42
第19表	T.P. 16 出土遺物観察一覧……………43
第20表	T.P. 17 出土遺物観察一覧……………44
第21表	試掘抗所見一覧……………45
第22表	遺構計測表……………46
第23表	桜施肥箇所出土遺物一覧……………47
第24表	桜施肥箇所出土遺物観察一覧……………50
第25表	表採（青磁）観察一覧……………53
第26表	表採（白磁・翡翠釉陶器・ 黒釉陶器・備前陶器）観察一覧…56
第27表	表採（カムイヤキ・瓦・土器） 観察一覧……………57
第28表	表採（石製品・石器）観察一覧…59
第29表	放射性炭素年代測定結果……………62
第30表	暦年較正結果……………63
第31表	微細物分析結果……………63
第32表	樹種同定結果……………63
第33表	灰像分析結果（植物珪酸体分析）…64
第34表	X線回析分析による検出鉱物……………65

写 真 目 次

写真1	……………3
1	調査風景
2	埋戻し作業風景
3	文化庁調査官による調査指導風景
4	資料整理風景
写真2	……………14
1	T.P. 1 作業風景
2	T.P. 1 作業風景
写真3	……………47
	桜施肥箇所掘削状況
写真4	……………69
	炭化材・植物珪酸体・葉遺体
写真5	……………70
	焼土薄片

図 版 目 次

図版1	……………75
T.P. 1	北壁面
T.P. 1	南壁面
T.P. 1	東壁面
T.P. 2	東壁面
図版2	……………76
T.P. 2	南壁面
T.P. 4	南壁面
T.P. 4	拡張部西壁面
図版3	……………77
T.P. 5	北壁面
T.P. 5	東壁面
T.P. 6	東壁面
T.P. 6	南壁面
図版4	……………78
T.P. 7	北壁面
T.P. 7	東壁面
T.P. 8	北壁面
T.P. 8	東壁面

図版 5	79	T. P. 7 出土遺物	
T. P. 10 北壁面			
T. P. 10 西壁面			
T. P. 11 北壁面			
T. P. 11 東壁面			
図版 6	80	図版 17	91
T. P. 16 南壁面		T. P. 8 出土遺物	
T. P. 16 西壁面		図版 18	92
図版 7	81	T. P. 10 出土遺物	
T. P. 17 南壁面 1		図版 19	93
T. P. 17 南壁面 2		T. P. 11 出土遺物	
T. P. 17 西壁面 1		図版 20	94
T. P. 17 西壁面 2		T. P. 16 出土遺物	
図版 8	82	T. P. 17 出土遺物	
T. P. 1 遺構検出状況		図版 21	95
T. P. 1 ピットNo. 9 半截状況		桜施肥箇所出土遺物	
図版 9	83	図版 22	96
T. P. 2 遺構検出状況		高麗期青磁	
T. P. 2 炉跡半截状況		青磁碗・皿	
図版 10	84	図版 23	97
T. P. 2 ピットNo. 13 検出状況		青磁酒会壺	
T. P. 4 遺構検出状況		青磁盤	
図版 11	85	青磁碗	
T. P. 5 遺構検出状況		図版 24	98
T. P. 7 遺構検出状況		白磁	
図版 12	86	翡翠釉陶器	
T. P. 8 遺構検出状況		黒釉陶器	
T. P. 8 ピットNo. 1 半截状況		図版 25	99
図版 13	87	備前陶器	
T. P. 10 遺構完掘状況		カムイヤキ	
T. P. 11 遺構検出状況		高麗系瓦	
図版 14	88	図版 26	100
T. P. 1 出土遺物		土器	
図版 15	89	石製品・硯	
T. P. 2 出土遺物		図版 27	101
図版 16	90	石器・錘	
T. P. 4 出土遺物		石器・くぼみ石	
T. P. 5 出土遺物		図版 28	102
		石器・くぼみ石	

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査の目的及び経緯

調査の契機 ナングシク遺跡群における考古学的調査は、昭和 54（1979）～56（1981）年度に名護市教育委員会が主体となり実施した遺跡分布調査が契機となり、測量調査や工事立会調査等がこれまでに行われてきた。しかし、それらの調査は発掘を伴わない調査が主体であったため、遺跡の性格等を把握するまでには至らなかった。そのため、名護市教育委員会は、ナングシク遺跡群の安定的保存と活用を図る目的から、平成 21（2009）年度より文化庁の補助を得てナングシク遺跡群の範囲確認調査に着手した。

地形測量調査 まずは、グスクの全体の広がりや規模を明らかにし、その実態を把握するための地形測量調査を平成 21～24（2012）年度にかけて実施し、その後「市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ」において成果を報告した。

範囲確認調査 平成 25（2013）年度からは、それまでの調査で蓄積された情報を基に調査区の選定を行い、地下遺構の存在確認及び文化層の有無、さらには時代及び性格等の内容を明らかにする観点で範囲確認調査を開始し、平成 26（2014）年度まで継続して実施した。また、平成 25 年度には、名護市が実施した土壌改良事業に伴う立会調査を範囲確認調査と並行して実施した。

第 2 節 調査体制

平成 25～令和 2（2020）年度における調査及び報告書作成は、以下の体制で実施した。

平成 25（2013）年度

事業者	名護市長 稲嶺進
事業主体	名護市教育委員会
事業所管	名護市教育委員会文化課
事業責任者	教 育 長 座間味法子 教 育 次 長 石川達義
調査総括	文化課長 島福善弘
調査事務	文化財係長 友寄凡子
調査担当	文化財係 学芸員 宮城智浩
調査員	文化財係 学芸員 宮城弘樹、松原彰子
調査補助	文化財調査員（嘱託） 真栄田義人、千田寛之、宮里牧、神谷祐子
資料整理	資料整理員（臨時） 岸本美枝子、島袋章子、仲村裕子、比嘉紗恵里、 牧山美緒、奥原彰太
作業員	石川博利、上地厚行、大城正治、大宮哲夫、荻堂盛春、佐々木政春、下地省三、 新谷壽一、玉木健二、田港朝孟、仲井間宗孝、仲程源信、中村啓孝、山城重次、 山城正則

平成 26 (2014) 年度

事業 者	名護市長	稲嶺進
事業 主体	名護市教育委員会	
事業 所管	名護市教育委員会文化課	
事業責任者	教 育 長	座間味法子
	教 育 次 長	石川達義
調 査 総 括	文 化 課 長	比嘉久
調 査 事 務	文化財係長	友寄凡子
調 査 担 当	文化財係	学芸員 宮城智浩
調 査 員	文化財係	学芸員 宮城弘樹
調 査 補 助	文化財調査員 (嘱託)	真栄田義人、千田寛之、宮里牧、神谷祐子
資 料 整 理	資料整理員 (臨時)	岸本美枝子、島袋章子、仲村裕子、比嘉紗恵里、牧山美緒、奥原彰太
作 業 員	新谷壽一、下地省三、比嘉成男	

令和 2 (2020) 年度

事業 者	名護市長	渡具知武豊
事業 主体	名護市教育委員会	
事業 所管	名護市教育委員会文化課	
事業責任者	教 育 長	岸本敏孝
	教 育 次 長	荻堂盛邦
調 査 総 括	文 化 課 長	比嘉久
調 査 事 務	文化財係長	仲宗根禎
調 査 担 当	文化財係	学芸員 真栄田義人
調 査 員	文化財係	学芸員 宮城智浩
資 料 整 理	資料整理員 (会計年度任用職員)	岸本美枝子

調査指導助言及び調査協力

発掘調査及び資料整理・報告書作成の過程において、下記の諸氏や機関に指導助言や協力を頂いた (順不同・敬称略。所属は当時)。

指導助言 千田嘉博 (奈良大学学長・文学部教授)、宮城弘樹 (沖縄国際大学総合文化学部准教授)、安里進 (沖縄県立博物館・美術館館長)、家田淳一 (佐賀県立九州陶磁文化館)、禰冨田佳男 (文化庁文化財部埋蔵文化財部門)、近江俊秀 (文化庁文化財部埋蔵文化財部門)、川畑純 (文化庁文化財部埋蔵文化財部門)、山下信一郎 (文化庁第二課史跡部門 (併) 文化資源活用課)、仲座久宜 (沖縄県教育庁文化財課記念物班)、上地博 (沖縄県教育庁文化財課記念物班)、知念隆博 (沖縄県教育庁文化財課記念物班)、羽方誠 (沖縄県教育庁文化財課記念物班)、宮城淳一 (沖縄県教育庁文化財課記念物班)、金城貴子 (沖縄県立埋蔵文化財センター)

調査協力 沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課

第3節 調査経過

調査実施年度における調査経過を以下に整理する。

平成25年度 平成25年7月4日～平成26年3月26日にかけて断続的に発掘調査を実施した。まず、平成25年7月4日～19日にかけてT.P.1の調査を実施した。続いて、同年11月11日～21日にかけてT.P.2及びT.P.5、同年12月2日～24日にかけてT.P.4、平成26年1月4日～27日にかけてT.P.6～8及びT.P.11の調査を実施した。その後、同年3月19日～26日にかけて実施したT.P.10の調査をもって平成25年度の発掘調査を完了した。なお、調査と並行する形で資料整理作業を実施した。

平成26年度 平成26年10月28日～12月5日にかけてT.P.13～18の発掘調査を実施し、平成26年度の発掘調査を完了した。なお、年度を通して資料整理作業を実施した。

令和2年度 平成25～26年度に実施した発掘調査の成果をまとめた原稿等を基に、報告書の編集作業を行い、本調査報告書を刊行した。



1 調査風景



2 埋戻し作業風景

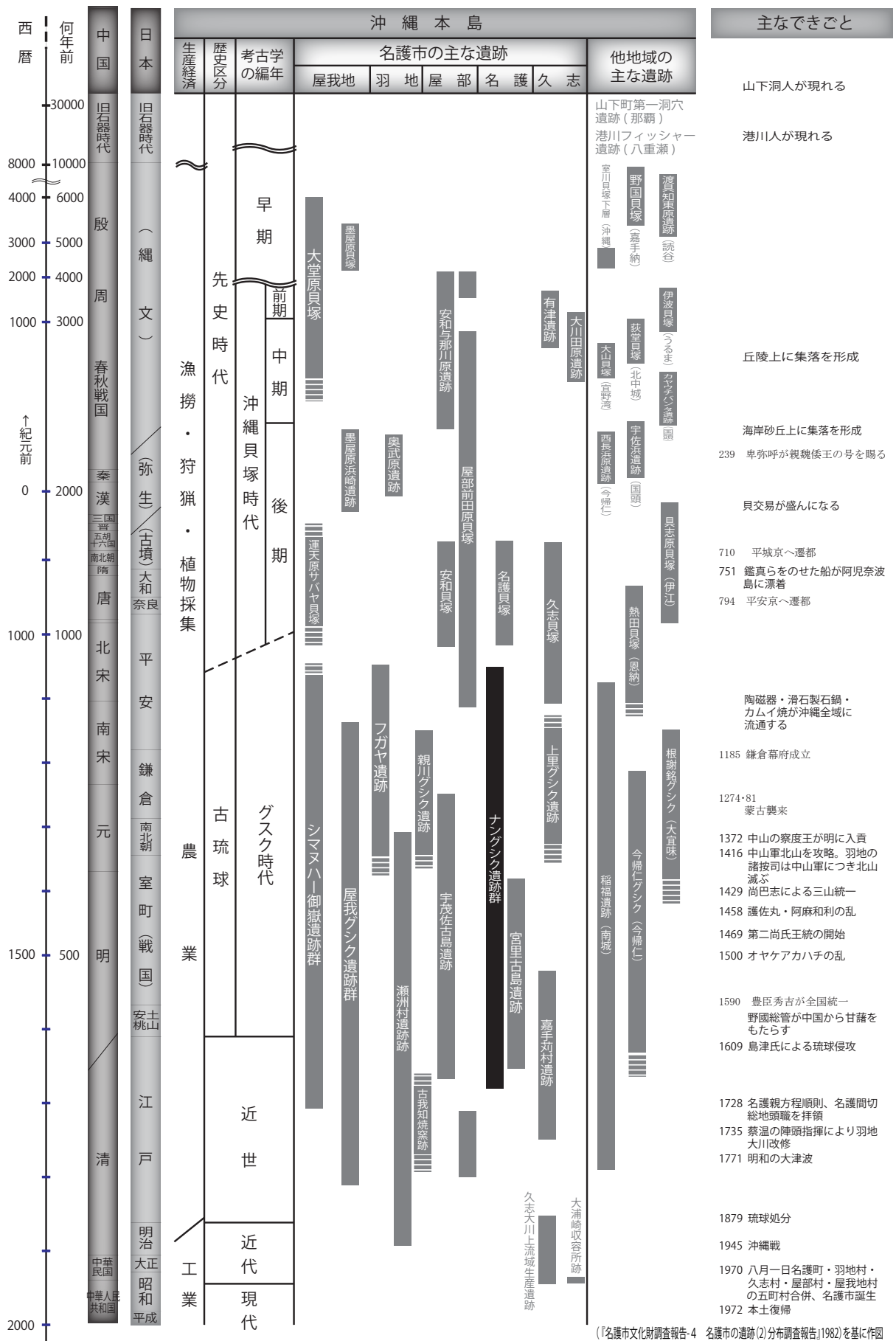


3 文化庁調査官による調査指導風景

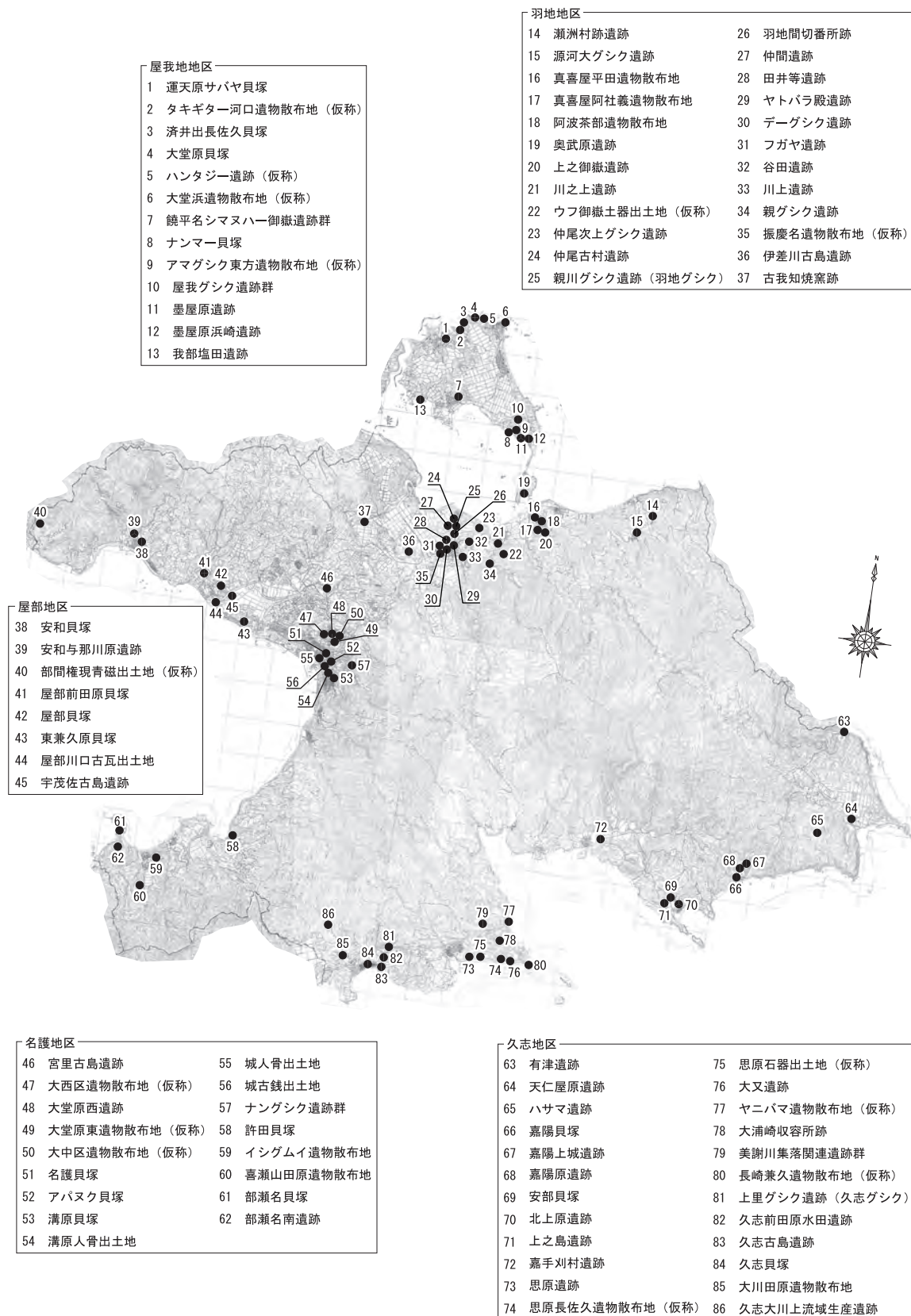


4 資料整理風景

写真1



(『名護市文化財調査報告-4 名護市の遺跡(2)分布調査報告』1982)を基に作図



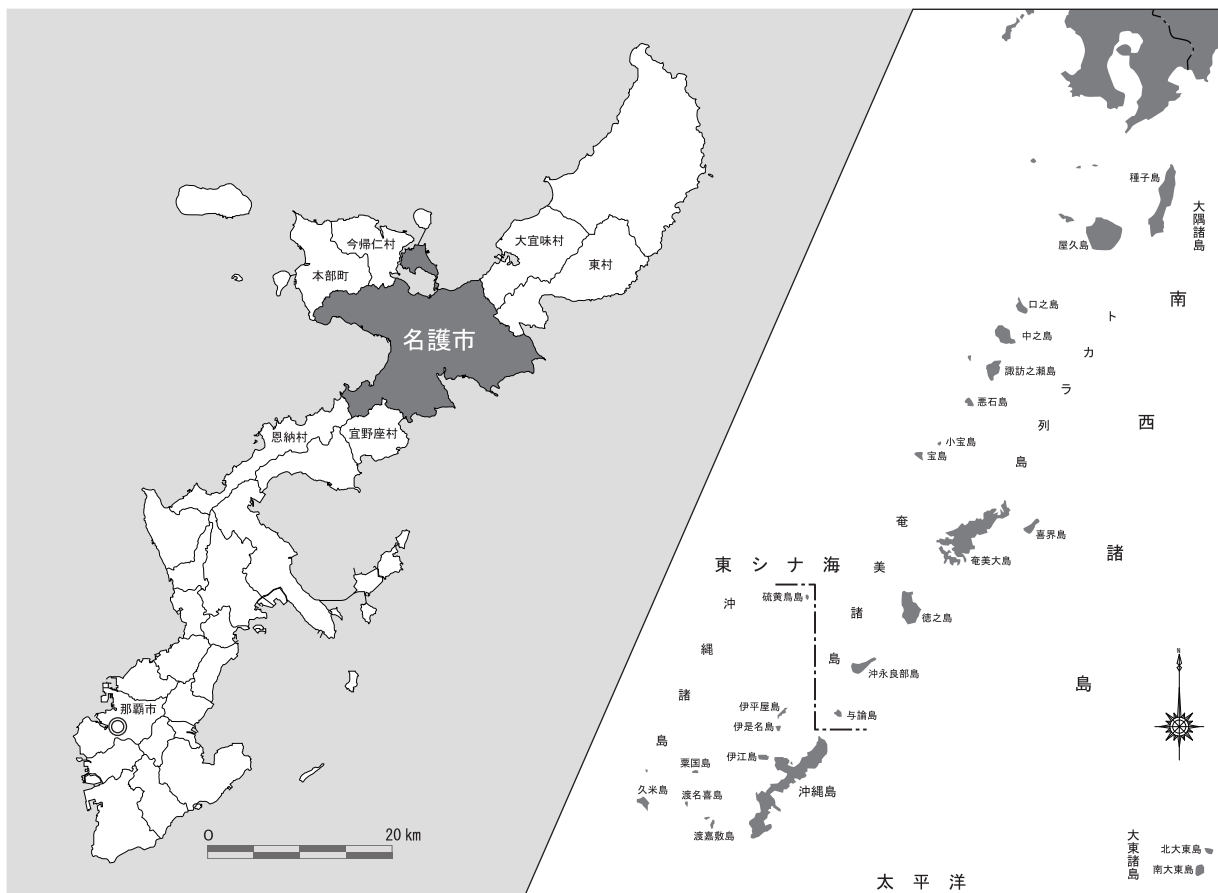
第2図 名護市の遺跡分布図

第Ⅱ章 位置と環境

第 1 節 名護市の位置と地勢

名護市の位置 名護市は、沖縄本島北部に位置し（第 3 図）、昭和 45（1970）年 8 月 1 日に旧名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村の 1 町 4 村が合併し誕生した。市域の北東部は大宜味村と東村、西部は今帰仁村と本部町、南部は恩納村と宜野座村の 1 町 5 村と隣接している（第 3 図）。県都那覇市から北に約 64 km の距離にあり、国道 58 号、国道 329 号及び沖縄自動車道によって結ばれている。沖縄の空の玄関口である那覇空港からは、沖縄自動車道を使用して車で約 1 時間を要する。

名護市の地形と土地利用 市域の総面積は 210.9 ㎢（平成 30 年 3 月現在）で沖縄県の約 9 % を締め、竹富町（334.39 ㎢）、石垣市（229.15 ㎢）に次いで広大な面積を誇り、その約 60 % を山林が占める。市域の西部は険しい山々を有する屋部地区、北部は稲作で知られた羽地地区や塩田で知られた屋我地地区、東部は山間部が美しい久志地区、中央部には平野と丘陵が広がる名護地区と変化に富んだ景観を有する自然豊かな市である。市域の中央には名護岳（345.2 m）を中心に標高 300 m 級の山々が連なり起伏の大きい丘陵地を形成し、そこに降った雨を集めて源河川、羽地大川、我部祖河川、汀間川、大浦川などの中小の多くの川が流れる。山間部から流れてきた川の河口付近には沖積平野が形成され、そこに集落が形成される。この集落の後背湿地は近世以降水田として利用され、山、海ともに個性豊かな山原型の土地利用が形作られてきた。



第 3 図 沖縄本島及び名護市の位置図

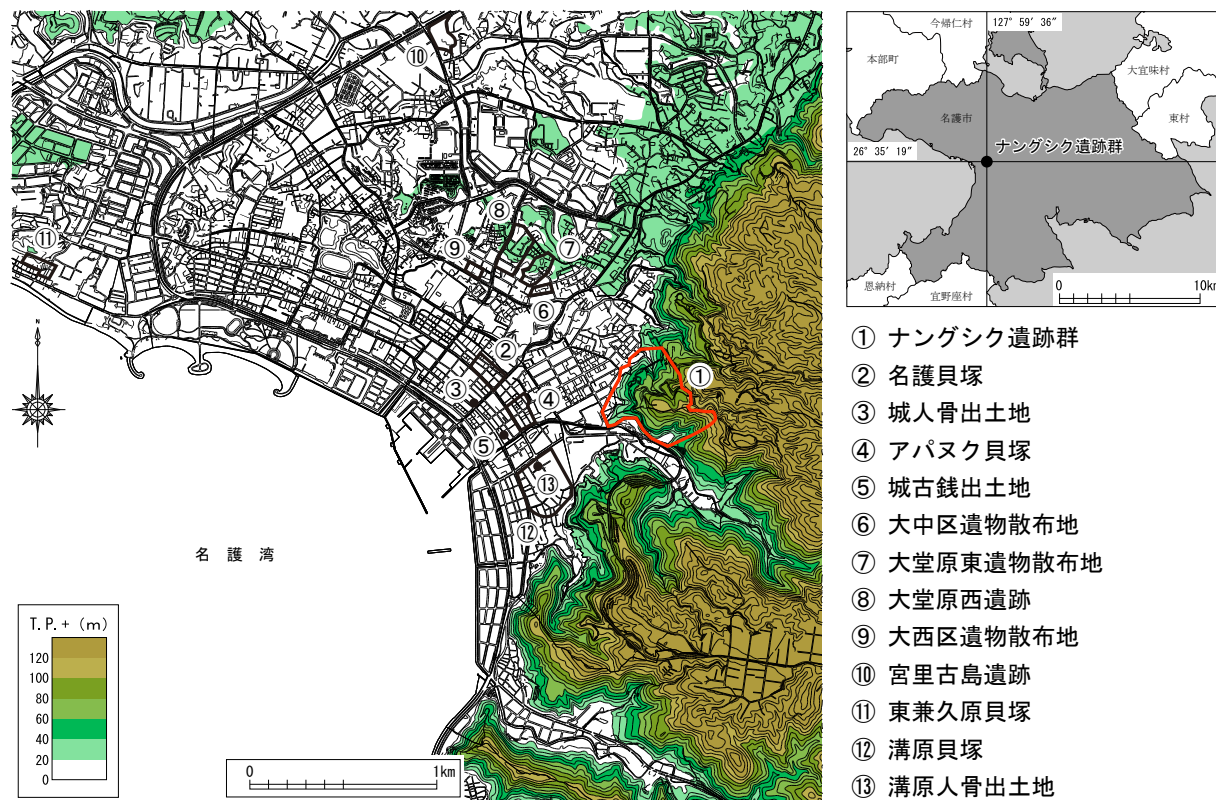
名護市の人口・世帯・行政区 人口は 63,389 人、世帯数は 30,260 世帯を数え（令和元年 12 月 31 日現在）、55 の行政区から構成される。

名護市の遺跡 市内には、現在までに約 80 箇所の遺跡が確認されていて（第 2 図）、その特徴として沖縄貝塚時代早期～中期に属する遺跡のほとんどが屋我地島に集中することと、グスク時代～近世に属する遺跡が羽地地区に集中することがあげられる。これまでの考古学上の調査成果から、本市の歴史は沖縄貝塚時代早期前葉（約 7,000 ～ 5,000 年前）までさかのぼることができ、大堂原貝塚（沖縄貝塚時代早期～前期、後期）をはじめ、屋部前田原貝塚（沖縄貝塚時代前期～近世）、安和与那川原遺跡（沖縄貝塚時代前期～後期）では、長期にわたり遺跡が形成されたと考えられる。また、グスク時代に属する遺跡は近世まで続き、その上に現在の集落が形成されている例が多くみられる。

第 2 節 ナングシク遺跡群の地理的環境

遺跡の位置 ナングシク遺跡群は、名護市街地の東方、名護岳麓の標高約 108 m の丘陵地に立地する。地籍上は名護市名護小字城原及び以上原に属し、現在は県営名護城公園の一部として沖縄県土木建築部が管理している。

遺跡及び周辺地域の地形環境 本市の地形は、大きく①本部半島部、②脊梁山地部、③両者に挟まれた丘陵地域及び屋我地地区の 3 つに分けることができる。ナングシク遺跡群は脊梁山地部の西側に位置し、その背後にそびえる名護岳（345.2 m）は、多野岳（385.2 m）、辺野古岳（332 m）、久志岳（335 m）に続く低山性山地の一角をなす。ナングシク遺跡群は、丘陵頂部を主郭とし、その中腹あたりを削平して築かれた山城型式のグスクで、名護岳から西側に延びる舌状台

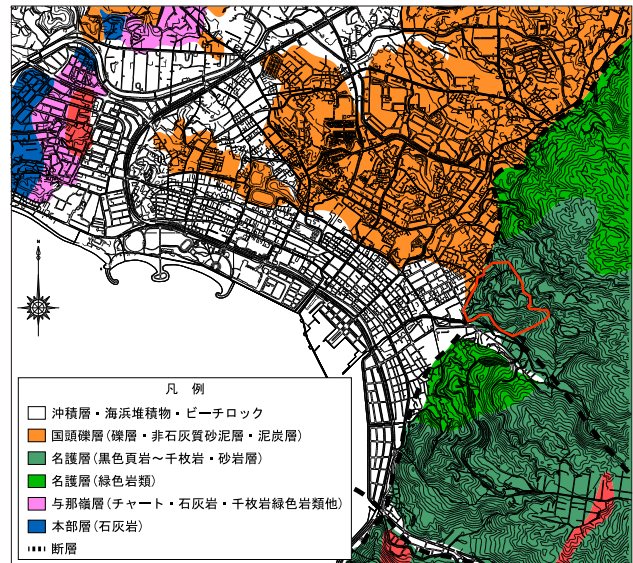


第 4 図 ナングシク遺跡群及び周辺遺跡分布図

地を利用して築かれている。台地の北側は深い谷間となり、その底を川（グシクガー）が流れている。西と南は急な斜面に囲まれており、その裾野には幸地川が流れ、平地にはかつて水田が広がっていたが、現在は宅地化が進んでいる。

名護岳に連なる東側の尾根筋は、平坦な土地が広がりグスクにとって最大の弱点となっている。そのため、尾根筋を遮断する形で大小の堀切を二重に設けることでグスクの独立性を高めている。

地質・植生 遺跡の所在する丘陵地から名護岳一帯は黒色千枚岩や緑色岩類を主体とする国頭層群名護累層が分布する。名護岳周辺にはイタジイ山地林が分布するが、遺跡周辺ではリュウキュウマツ二次林及びホルトノキ低地林が分布する。また、丘陵裾に広がる平地には河川及び海浜堆積物からなる沖積層が分布している。



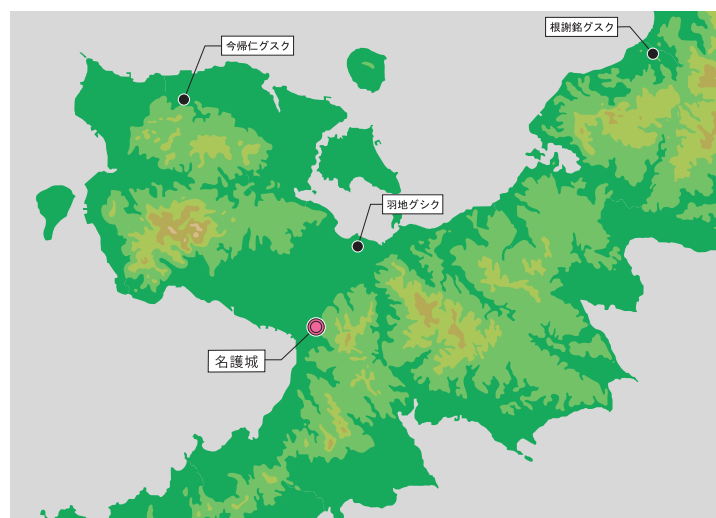
第5図 ナングシク遺跡群周辺の地質分布図

第3節 名護城の歴史・文化的環境

名護按司の登場 比嘉宇太郎は『名護六百年史』の中で、「英祖王の子で北山世の主になった湧川王子の孫（今帰仁城主の弟）が正史に出て来る最初の名護按司」であると述べ、その年代を1314年頃と推察している。北山世の主とは国頭地方の諸按司を支配する最高権力者を指す尊称で、その嫡流が今帰仁城主となり、その一族が名護、羽地、国頭の按司となって諸郡を治めていたという。

怕尼芝の台頭 ところが、湧川王子の孫にあたる三世の代に至り、一族である怕尼芝が、宗家を討ち、自ら北山王を名乗った。今帰仁城主の弟にあたる名護、羽地、国頭の諸按司は、その謀反を嫌い、名護按司は、今帰仁城を逐われた城主の弟とその家族らを保護して、暗に敵対行為を示して、巻き返しの機会を待ったが、怕尼芝の武力は強大で戦いを起こすことはできなかった。以後、怕尼芝の統は、珉、攀安知と三代にわたり北山を支配し、明との交易も三代で18回行い、力をつけていった。

尚巴志の北山攻略 力をつけた北山王・攀安知は、家臣の平原とともに中山を攻める準備をしていた。その計画を知った羽地按司は、中山王の尚思紹に「今、北山を攻めなければ悔いを残すことになる」と告げた。羽地按司に続き名護按司や国頭按司も同じことを



第6図 三山時代の主要グスク分布略図

告げてきたので、尚思紹王は尚巴志に命じて兵を起こして北山を攻め滅ぼした。難攻不落の北山を滅ぼした経過については、『球陽』や『蔡温本中山世譜』に記されている。その年1416年である。そして1422年に尚巴志の子・尚忠を北山監守に置いた。

その頃書かれた『海東諸国記』（1471年）の中にある「琉球国之図」に、「國頭城」、「伊麻奇時利城（今帰仁城）」、「那五城」と記されており（第7図）、この「那五城」が名護城と思われる。

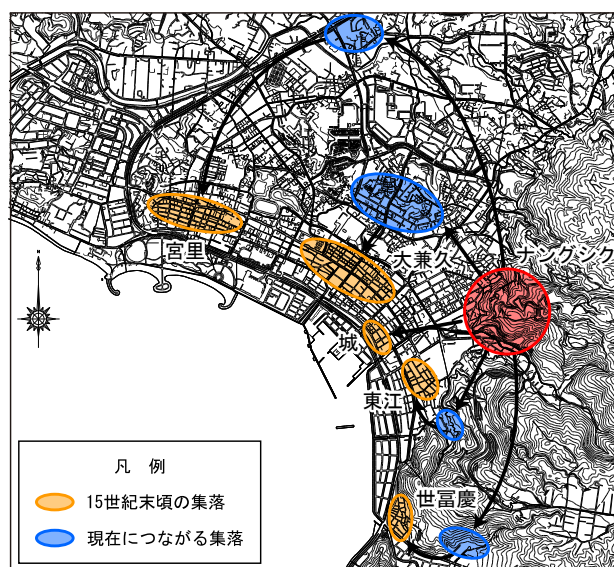
按司の移住と集落の移動 時代下って、第二尚氏三代尚真王の時代（1477～1526年）になると、中央集権的な支配体制を整えるため、各地の按司を首里に住まわせ、地方には按司掟（あじうち）という役人を置いた。そのとき、名護按司とその一統も首里へ移り住んだことになる。なお、北山の按司達は「北の平等（にしのひら）」が居住地域であったという。名護按司が去った後、名護城に居住していた領民達は、間もなくして平地へと分散していったと伝えられている。最初に降りたのが宮里で、その後、東江・大兼久・数久田・幸喜・世富慶の順に下向分散して村落を形成し、最後に名護城を下りたのが城の先人達であるという。

拝所と祀り その後、名護城は名護村の御嶽、あるいは名護間切の拝所として存在することになる。『琉球国由来記』（1713年）にある「テンツギノ嶽」「名護巫火神」「名護城神アサギ」がその御嶽と拝所であると思われる。現在、名護城には、ノロ殿内・根神屋・ウチ神屋・フスミ屋・イジグチ屋などの拝所

があり、それはかつて名護城で祭祀を行った神役を祀る拝所である。神役の中でもノロと根神は、終戦直前まで名護城で生活していたという。現在は、城区が中心となり年中祭祀を執り行っており、旧暦の9月9日に行われる城区の豊年祭では、頂上部にある神アサギの前で踊りが奉納されている。



第7図 琉球国之図にみる名護城
※国立国会図書館ウェブサイトより転載（一部加工）



第8図 名護城からの移動経路

表 1 ナングシク遺跡群周辺略歴及び調査略歴

時代区分		西暦	中国 / 和	略 歴
先史	貝塚時代			大兼久や東江に名護貝塚や溝原貝塚などの貝塚時代の集落が営まれる。
古 琉 球	グ ス ク 時 代	14 世紀頃		今帰仁城主の弟が名護按司として名護城城主となる。
		1416 年		中山の北山攻略の際に名護按司は中山に与して武勲をあげる。
		1471 年		『海東諸国記』の「琉球国之図」に「那五城」と記される。
		15 世紀末頃		按司の首里集居を期に、名護城城下の集落は、宮里、東江、大兼久、数久田、幸喜、世富慶、城の順に移住したと口碑伝承に伝わる。
近 世 琉 球	名 護 間 切	1609 年	万暦 37 年	薩摩軍の琉球侵攻。
		16 世紀末頃～ 17 世紀初頭頃		名護間切惣地頭馬良弼名護豊は、幸地川の治水事業を実施。
		1623 年頃		『おもろさうし』第 17 巻「恩納より上のおもろ」の中に「名護の小照る曲」と謳われる。
		1713 年		『琉球国由来記』には名護村（現在の大兼久、城、東江）の御嶽として「テンツギノ嶽」（現在の名護城に相当）が記されている。
		1673 年	康熙 12 年	東江原のジンガムイ（神ヶ森）の南麓に名護間切番所が置かれる。
		1695 年	康熙 30 年	名護間切番所が名護博物館のある場所へ移転。
		1728 年	雍正 6 年	程順則が名護間切総地頭職に任じられる。
		1872 年	明治 5 年	琉球藩設置される。同年、名護間切に指揮司を置く。
近代 沖縄	沖縄 県	1879 年	明治 12 年	琉球藩を廃し沖縄県とする。
		1928 年	昭和 3 年	神殿と拝殿を改築。桜植樹。
戦 後 沖 縄	名 護 町	1944 年	昭和 19 年	大兼久が大東・大西・大中・大南・大北の 5 区に分かれる。
		終戦直後		ノロと根神の人々が平地へ下りる。
		1953 年	昭和 28 年	神殿と拝殿が復旧落成。町立公園に指定。
	米 統 治	1959 年	昭和 34 年	白い煙と黒い煙石碑建立（除幕式）。
		1962 年	昭和 37 年	第 1 回名護桜まつりが開催される。
		1968 年	昭和 43 年	灯籠寄進。
	沖 縄 県	1970 年	昭和 45 年	名護町・屋部村・羽地村・屋我地村・久志村が合併し名護市となる。
		1971 年	昭和 46 年	オリオンビール社が大鳥居寄進。
		1972 年	昭和 47 年	本土復帰。
		1976 年	昭和 51 年	名護城社殿改修。
		1979-81 年	昭和 54-56 年	名護市内の遺跡分布調査が実施される。
		1980 年	昭和 55 年	名護城の由来碑建立。
		1982 年	昭和 57 年	名護市教育委員会『名護市の遺跡（2）』にてナングシク遺跡群を紹介。 また、新城徳祐『沖縄の城跡』にて名護城が紹介される。
		1983 年	昭和 58 年	沖縄県『沖縄グスク分布調査報告書』にて名護城が紹介される。
		1984 年	昭和 59 年	名幸記伝の碑建立（除幕式）。
		1987 年	昭和 61 年	ナングシク遺跡群測量調査の実施。名護市史考古班による平板測量が行われる。
		1989 年	平成元年	工事立会調査において遺物採集。
		1991 年	平成 3 年	當間嗣一「グスクとその構造」『中世の城と考古学』において名護城縄張り図が掲載される。
		2008 年	平成 20 年	せせらぎ公園試掘調査。
		2009-2012 年	平成 21-24 年	名護城地形測量調査（国庫補助事業）。
		2013 年	平成 25 年	名護城試掘調査（国庫補助事業）及び土壌改良に伴う工事立会調査。
		2014 年	平成 26 年	名護城試掘調査（国庫補助事業）。

第Ⅲ章 調査の方法

第 1 節 調査区の設定

試掘調査 名護市教育委員会が昭和 54 ～ 56 年度にかけて実施した遺跡分布調査では、遺跡の頂上から中腹付近にかけて中国産青磁や染付、沖縄産陶器等が採取され、遺物の分布する範囲を A ～ D の 4 地点に分けられた。本調査では、その地区分けと平成 21 ～ 24 年度に実施した地形測量調査の成果を基に調査区を選定した。なお、調査グリッドについては 2 m 四方を基準として設定したが、調査の状況等によってその規模を随時設定した。

表面踏査 試掘調査と並行して試掘調査区周辺や A ～ D 地点及び試掘調査までの経路等の清掃作業を行った際に、その範囲を表面踏査の対象地区として調査を実施した。

立会調査 遺跡内に植樹されている寒緋桜の管理の一環として桜への施肥事業が平成 25 年度に計画されていたことから、施肥実施箇所を立会調査の対象とした。

第 2 節 調査の方法

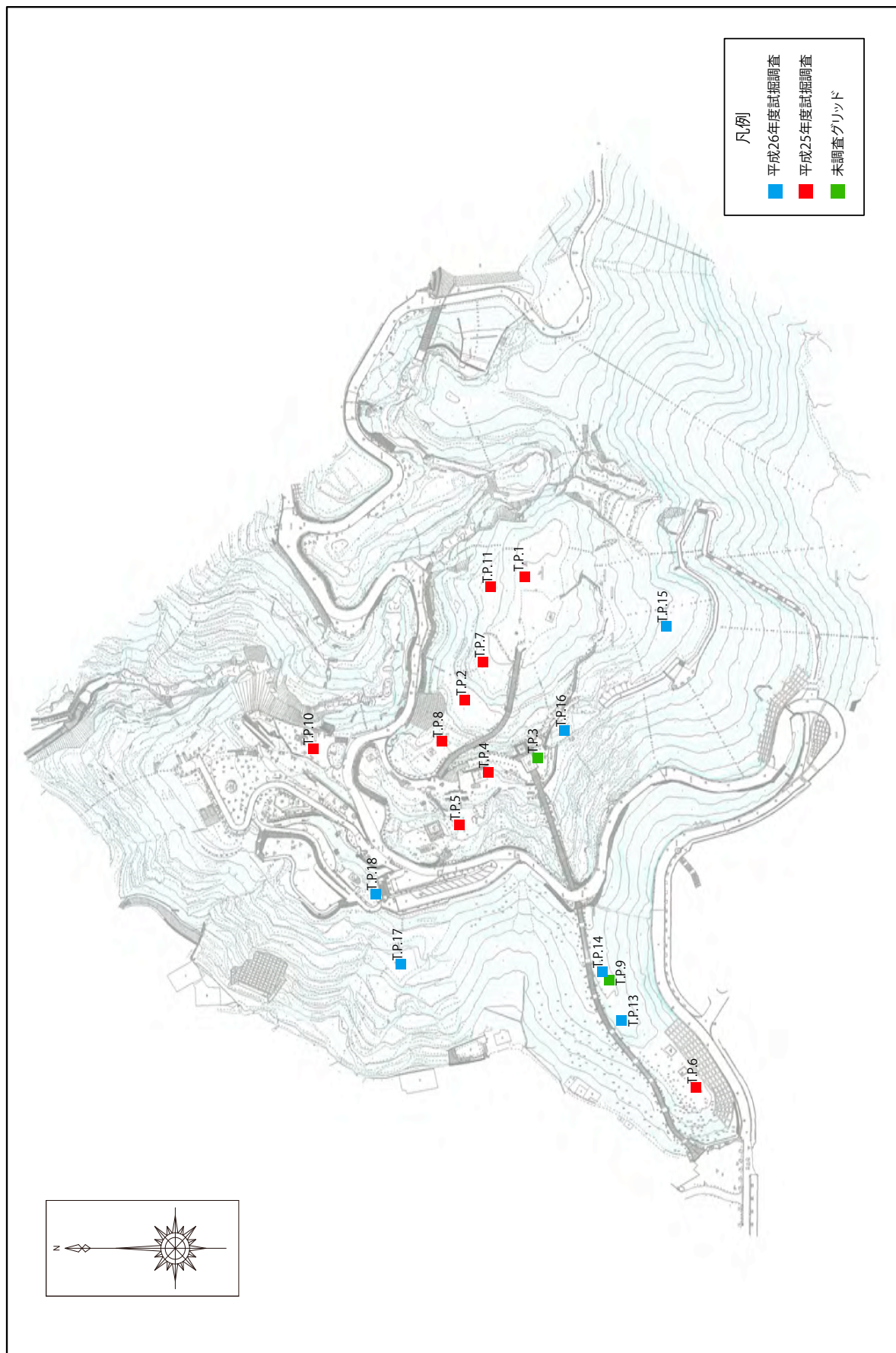
包含層掘削 調査区において調査区グリッドを設定した後、人力作業により包含層の掘削を実施した。掘削は、最初の遺構検出面までにとどめ、必要に応じてグリッドの一部で下層確認のための掘削を行った。なお、本調査では、表土及び客土掘削を含めすべての掘削を人力作業で行った。また、埋め戻し作業も人力で行った。

遺構検出及び遺構掘削 遺構が確認されたグリッドにおいては、グリッド全体の遺構の分布状況や切り合い関係を把握するにとどめ、必要に応じて一部遺構について半截または完掘を行った。

記録作業 遺構の検出及び半截状況や土層堆積状況等の図面作成作業は全て手書きで行った。写真撮影については、デジタル一眼レフカメラによる記録を行った。

自然科学分析 検出された炉跡において C14 炭素年代測定等を専門機関に委託した。分析結果は、第 V 章を参照。

整理作業 洗浄済み遺物に注記後、分類を行い、実測を行った。また、現地調査で作成した図面類の清書作業も併せて行った。報告書へ掲載する実測図については、全て adobe 社 Illustrator でデジタルトレースを行った。デジタルトレースの一部については、外部委託を行った。遺物写真はデジタルカメラで撮影したものを adobe 社 Photoshop で編集、文字原稿は Microsoft 社 Word、表は Microsoft 社 Excel で作成した。作成した原稿データは adobe 社 InDesign で編集し、印刷業者へデータ入稿した。



第Ⅳ章 調査結果

調査の結果、遺物包含層が未攪乱もしくは、遺物包含層は攪乱されているが遺構が確認された試掘抗について、試掘抗別に概要を述べる。なお、第1節末に試掘抗所見一覧表と遺構計測表を示した。

第1節 試掘調査

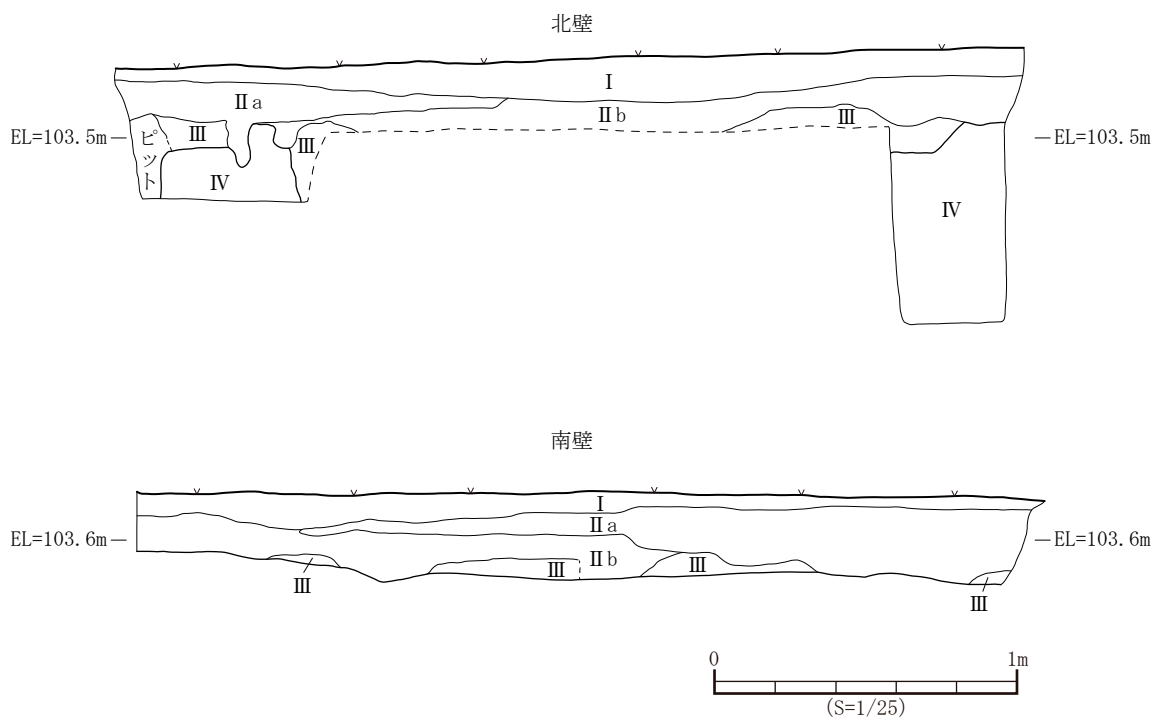
1. T.P.1

T.P.1は神アサギがある頂上の主郭にあたる箇所で、標高約103 mに位置する。遺物包含層は未攪乱でグスク時代の遺構が検出される。

(1). 層序

北壁・南壁

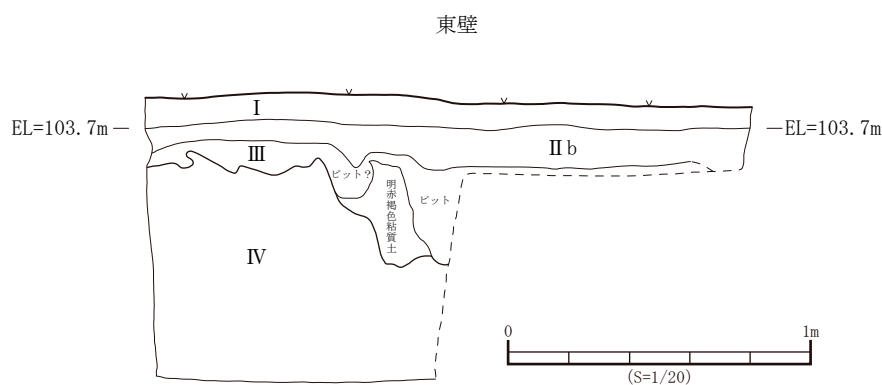
- I 層 表土。3 cmほどの礫を含む土壌。黒褐色（10YR3/2）。
- II a 層 3 cmほどの礫と枝サンゴが混じる土壌。枝サンゴは人為的に敷かれている。グスク時代の遺物包含層である。灰黄褐色（10YR4/2）。
- II b 層 0.5 cmほどの礫を含む土壌。グスク時代の遺物包含層である。灰黄褐色（10YR4/2）。
- III 層 礫混じりの粘質土壌で、礫は基盤の粘板岩が風化したものである。上層のII b 層と下層のIV層が混ざりあうような層である。グスク時代の遺物包含層で、ピットが検出される。にぶい黄褐色（10YR4/3）。
- IV 層 地山。礫混じりの粘質土壌で、基盤の粘板岩を含む。赤褐色（5YR4/8）。



第10図 T.P.1 北壁及び南壁面図

東壁

- I 層 表土。1 cmほどの礫を含む土壌。黒褐色（10YR3/2）。
- II a 層 東壁では確認できない。
- II b 層 礫を含む土壌。枝サンゴは混入せず、1～2 cmほどの礫と0.5 cmほどの細かい礫を含む。グスク時代の遺物包含層で、ピットが検出される。暗褐色（10YR3/3）。
- III 層 礫混じりの粘質土壌で、礫は基盤の粘板岩が風化したものと0.5 cmほどの細かい礫である。基質は上層のII b層に近いが、下層のIV層が混入している。グスク時代の遺物包含層で、ピットが検出される。暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）。
- IV 層 地山。礫混じりの粘質土壌で、基盤の粘板岩を含む。明褐色（7.5YR5/8）。



第 11 図 T.P.1 東壁面図



1 T.P.1 作業風景



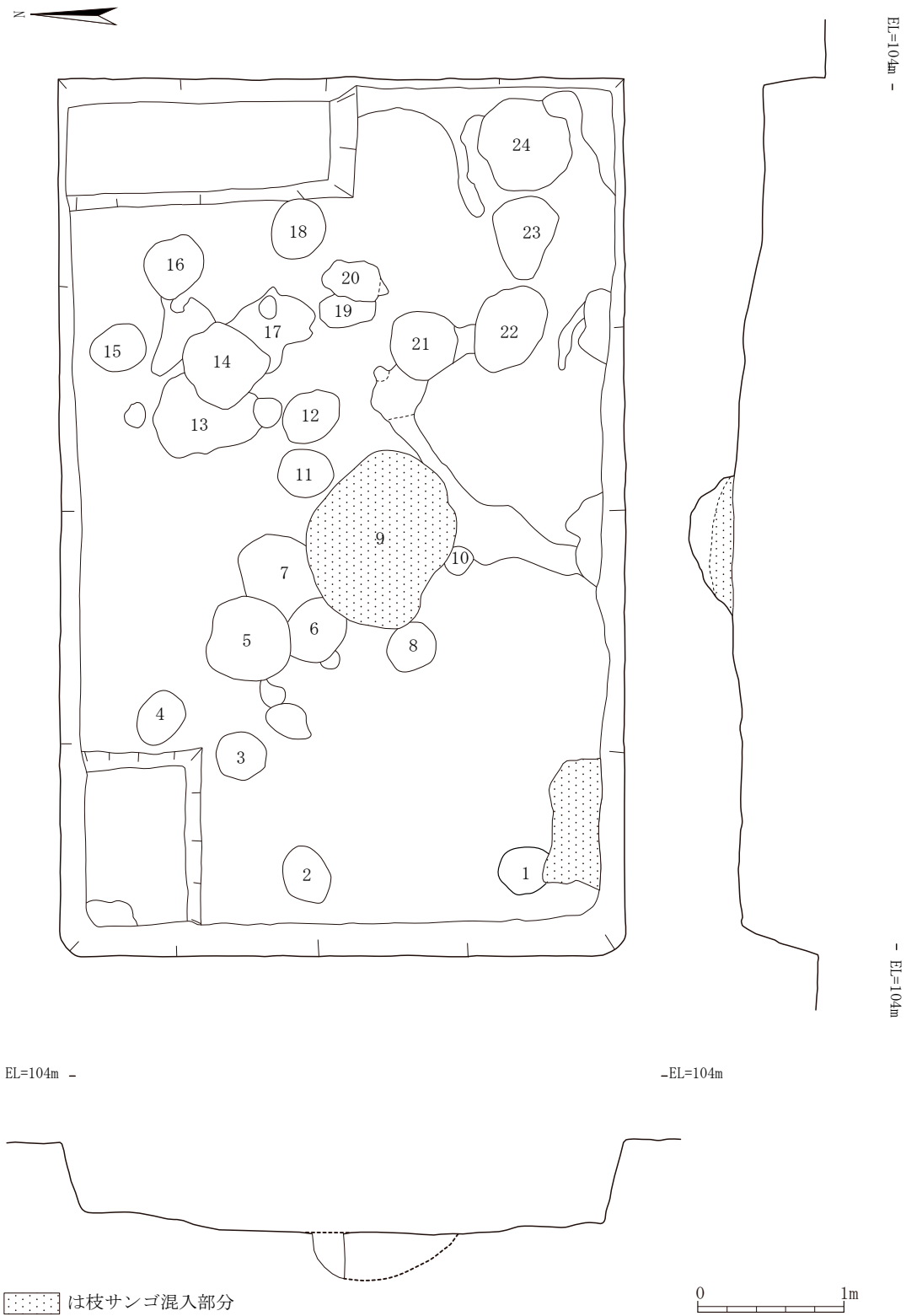
2 T.P.1 作業風景

写真 2

(2). 遺構

ピットが 24 基検出されたが、時間的制約のため調査地点中央で検出された径の大きいピット No. 9 の半截のみ行い、残りのピットは平面分布の測量のみ行った。

ピット No. 9 は III 層で検出され、長径 60.4 cm、短径 54.1 cm を測り、半截断面でみると深度は 16 cm であった。覆土は粘土質シルトで、土色は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。覆土上位では枝サンゴを含み、下位では枝サンゴの混入はみられない。



第 12 図 T.P. 1 遺構検出状況

(3). 出土遺物

T.P.1 出土遺物は、人工遺物では青磁が大半を占める。その他、青花が2点、褐釉陶器が10点得られた。なお、獣骨や貝類は分類を割愛し、表の数値は個体数ではなく破片数である（以下、他の調査地点も同様）。内訳は第2表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第3表に示す。

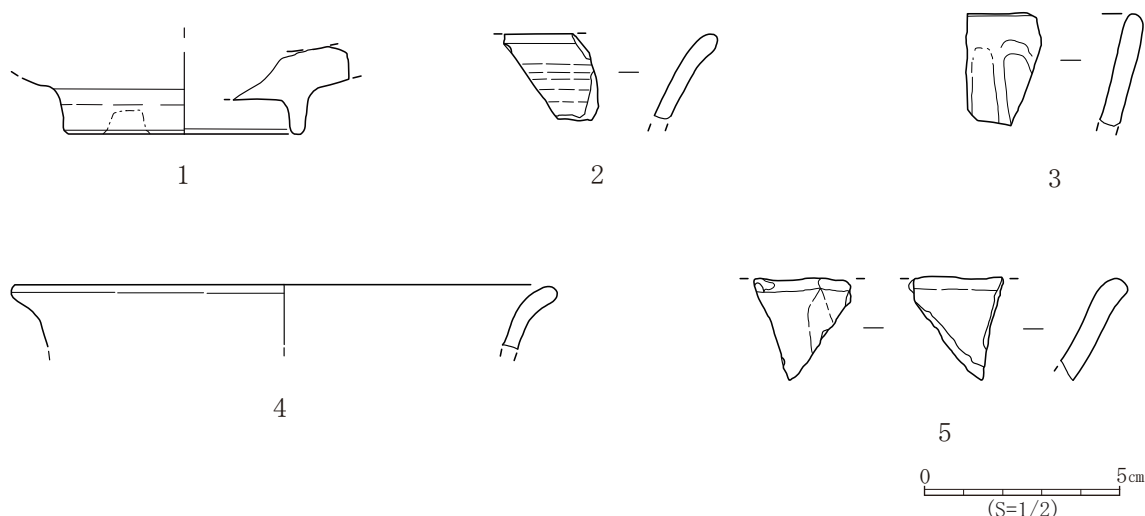
①陶磁器

青磁

第13図1は碗の底部で、畳付けと高台内のみ露胎となる。龍泉窯系IV類に該当する。底径は6cmで、II a - II b層出土。同図2は無文外反碗の口縁部である。口縁部の下に僅かな段を有する。龍泉窯系IV類に該当すると考えられる。II b層出土。同図3は直口碗の口縁部で、外体面に蓮弁文が施される。龍泉窯系VI類に該当する。II a - II b層出土。同図4は無文外反皿の口縁部で龍泉窯系IV～V類に該当すると考えられる。口径は14cmで、II a - II b層出土。同図5は無文外反皿の口縁部で、陵花皿になると思われる。厚めの釉が施される。龍泉窯系V類に該当する。II a - II b層出土。

第2表 T.P.1 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	I層	I～II a層	II a～II b層
中国	青磁	龍泉系IV類	碗	口縁部			1
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系IV～V類 無文外反	碗	口縁部			1
				胴部		1	1
				底部			
中国	青磁	龍泉系VI類 細蓮弁文	碗	口縁部			1
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系IV～V類 無文	碗・皿	口縁部			
				胴部		3	16
				底部			
中国	青磁	龍泉系IV～V類 外反	皿	口縁部		1	7
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系V類 腰折?	皿	口縁部			1
				胴部			
				底部			
中国(明代)	青花	不明	碗	口縁部			1
				胴部			1
				底部			
中国(明代)	黒釉陶器(天目)	不明	碗	口縁部			
				胴部		1	
				底部			
タイ	褐釉陶器	不明	壺	口縁部			
				胴部	1	2	6
				底部	1		
沖縄	近世-近代 壺屋焼	無釉陶器	壺?	口縁部			
				胴部	1		
				底部			
沖縄	赤瓦	平瓦 丸瓦	平瓦 丸瓦	体部			
				体部			2
沖縄	焼土	—	—	—			1
沖縄	獣骨	—	—	—			6
沖縄	貝	—	—	—			26
合計					3	8	71



第13図 T.P.1 出土遺物

第3表 T.P.1 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第13図 1	青磁	Ⅳ類	碗	底部	— 6	高台脇から高台にかけて篋削りがなされ、畳付は細くなる。釉薬は見込みまでで、畳付と高台は露胎となる。	T.P.1 Ⅱ a- Ⅱ b
第13図 2	青磁	Ⅳ類	碗	口縁部	— —	口縁部は外反し、口縁部の下に僅かな段を有する。釉薬は内外ともに施釉される。	T.P.1 Ⅱ b
第13図 3	青磁	Ⅵ類	碗	口縁部	— —	口縁部は直口で、外体面に篋削りによる蓮弁文を施す。釉薬は内外ともに施釉される。	T.P.1 Ⅱ a- Ⅱ b
第13図 4	青磁	Ⅳ - Ⅴ類	皿	口縁部	14 —	口縁部は外反し、内外体面ともに無文である。内体面に僅かに貫入がみられる。	T.P.1 Ⅱ a- Ⅱ b
第13図 5	青磁	Ⅴ類	皿	口縁部	— —	口縁部は外反し、内外体面ともに無文である。釉薬は厚めである。	T.P.1 Ⅱ a- Ⅱ b

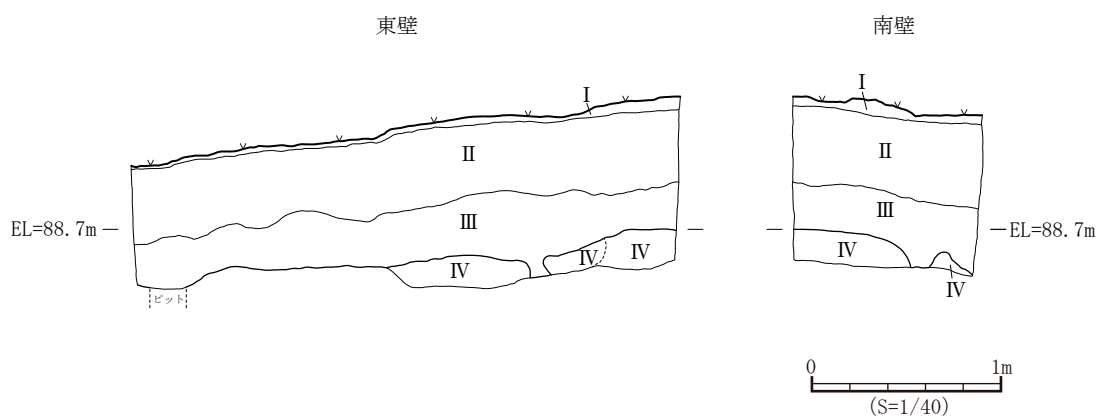
2. T.P.2

T.P.2は、主郭から北西に約14m下った箇所、標高は約89mである。面積の広い削平地である。遺物包含層は攪乱されているが、グスク時代の遺構が検出される。現在、削平地内に構造物はみられない。

(1). 層序

東壁・南壁

- Ⅰ層 表土。1cmほどの礫を含む砂混じりの土壌。黒褐色（10YR3/2）。
- Ⅱ層 3～5cmほどの礫をまばらに含む砂混じりの土壌。やや粘性をもつ。焼土と炭化物を含む。本来、グスク時代の遺物包含層と考えられるが、攪乱を受けている。オリーブ褐色（2.5 Y 4/3）。
- Ⅲ層 砂混じりの土壌で、Ⅱ層と比較すると土壌の締まりは良い。本来、グスク時代の遺物包含層と考えられるが、攪乱を受けている。オリーブ褐色（2.5 Y 4/3）。
- Ⅳ層 地山。5cmほどの礫混じりの粘質土壌で、基盤の粘板岩を含む。ピットと炉跡が検出される。赤褐色（5 Y R 4/6）。

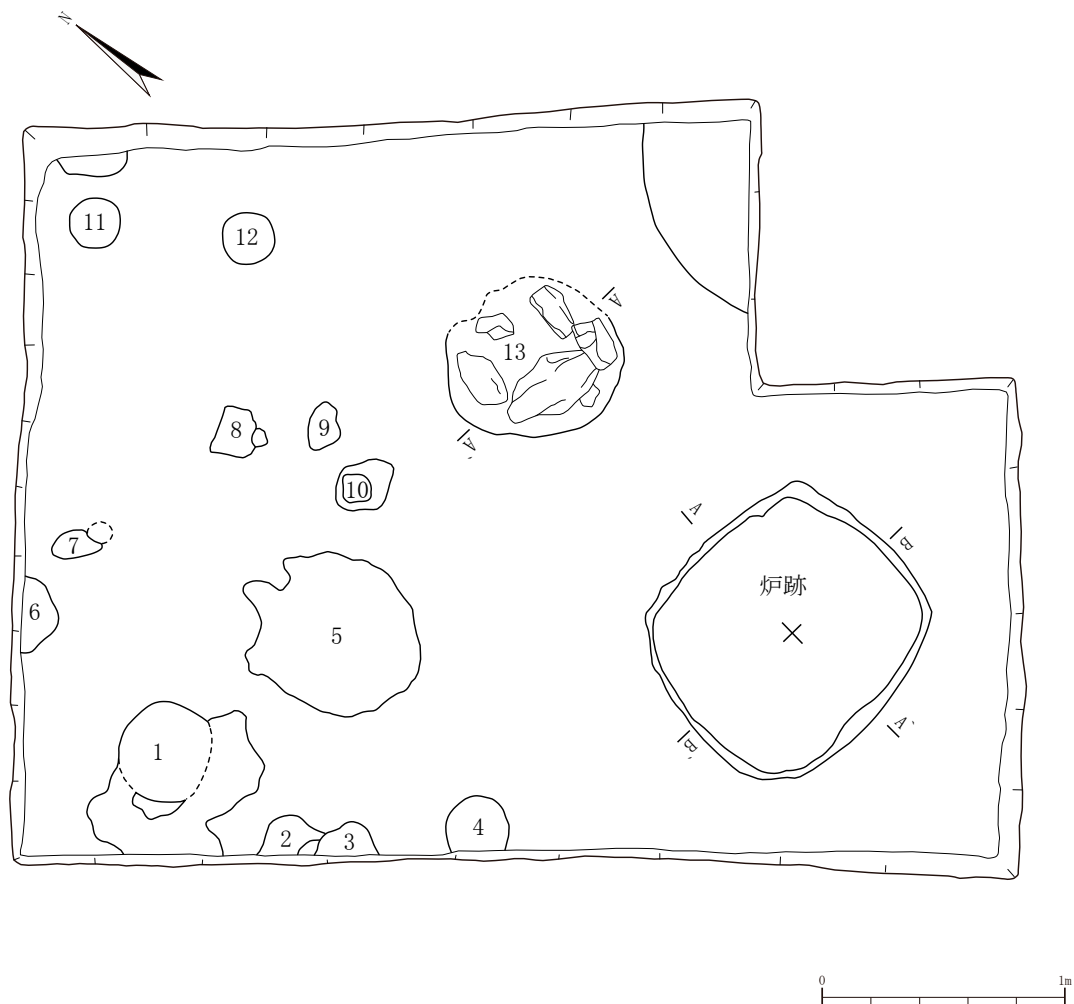


第14図 T.P.2 東壁及び南壁面図

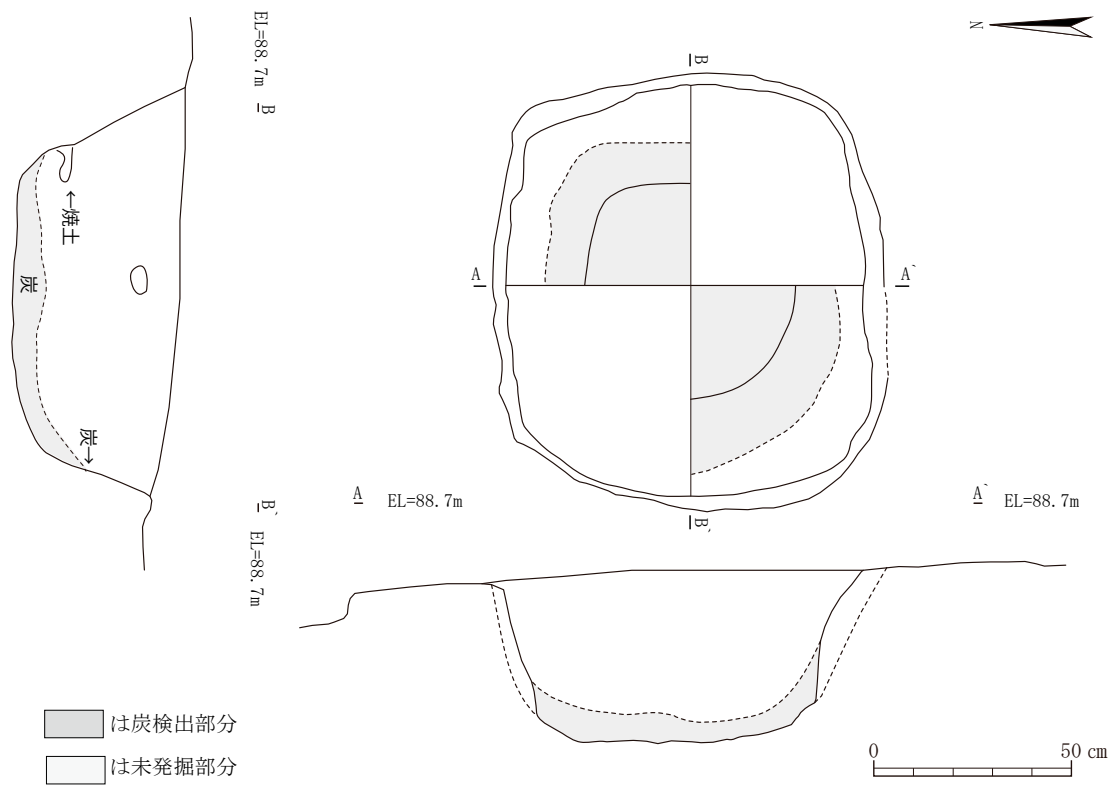
(2). 遺構

T.P.2 ではピットが 13 基、炉跡が 1 基検出された。そのうち調査地点南東側で検出されたピット No. 13 は、上面に集石を含み、覆土内から炭化物や青磁が確認された。長径は 72 cm、短径は 71.5 cm、深度は 29 cm を測る。

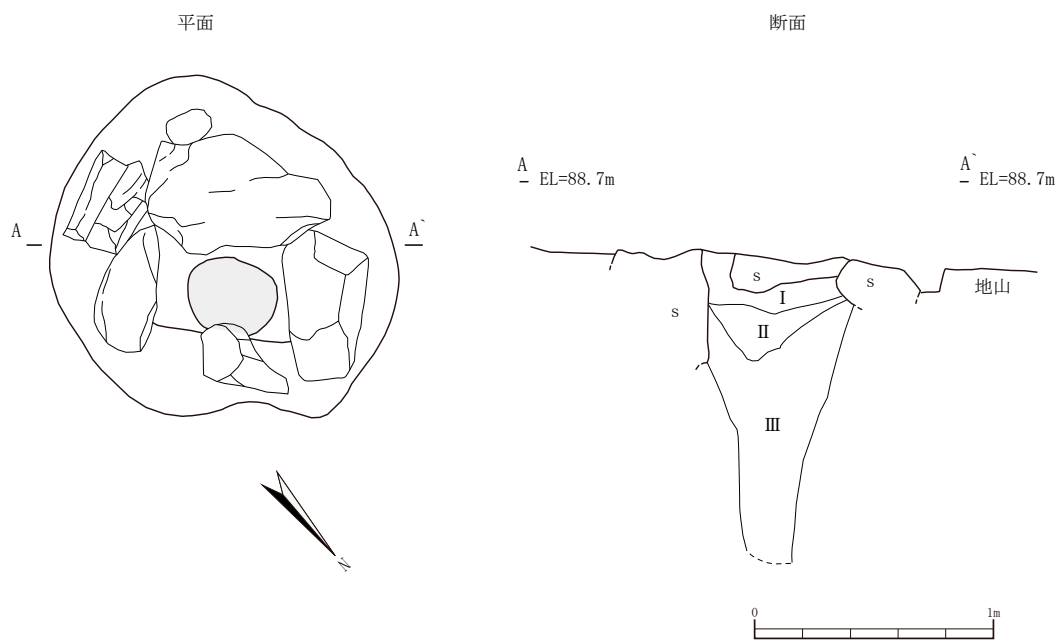
炉跡は調査地点南西側で検出され、長径 111 cm、短径 99 cm、深度 45 cm を測る。上面では焼土が円形に沿うように帯状に確認され、側面と底面は炭化物で黒色を呈している。覆土内からは青磁、青花、中国産及びタイ産褐釉陶器などが出土した。覆土内から採取した炭化材を用いて放射性炭素年代測定と樹種同定を行った結果、測定年代（補正年代）が $190 \pm 20\text{BP}$ で近世の値を示した。炭化材の樹種はリュウキュウマツに同定された（第 V 章参照）。



第 15 図 T.P.2 遺構検出状況



第 16 図 T.P. 2 炉跡平面及び断面図



第 17 図 T.P. 2 ピットNo. 13 平面及び断面図

(3) 出土遺物

T.P.2 出土遺物は、人工遺物では青磁が大半を占める。その他、白磁6点、青花7点、褐釉陶器が10点、グスク土器が9点得られており、肥前陶磁器類も少数であるが出土した。自然遺物として貝が10点出土した。内訳は第4表に示すとおりである。以下、図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第5表に示す。

①陶磁器

青磁

第18図1は碗の口縁部で、口縁部は直口で、外体面に篋削りによる蓮弁文が施される。口径は17.2cmで、龍泉窯系Ⅱ類に該当する。同図2は碗の底部で、見込みから高台脇まで施釉がなされ、畳付から高台内は露胎となる。龍泉窯系Ⅳ類に該当する。底径は4.9cm。同図3は無文外反の碗の口縁部で、外体面に貫入がみられる。龍泉窯系Ⅳ～Ⅴ類に該当すると考えられる。口径は18cm。

同図4～6は皿の資料である。同図4と5は口折皿の口縁部である。同図4は口縁部が鐔を有し、鐔上面は平坦となる。外体面に篋描きによる蓮弁文の一部が確認される。口径は8.8cm。同図5は口縁部が鐔を有し、鐔上面はくぼむ。外体面に篋描きによる蓮弁文が施される。龍泉窯系Ⅲ類に該当する。口径は14cm。同図4と同図5はいずれも、龍泉窯系Ⅲ類に該当する。

同図6は同安窯系皿の口縁部と考えられる。内体部と見込みの境界に段を有する。外体面の残存部下位には、施釉がなされない部分がみられる。16世紀以降の資料と推測される。Ⅰ層出土。

第4表 T.P.2 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	Ⅰ層	Ⅱ層	炉跡
沖縄	グスク土器	第3段階	不明	口縁部			
				胴部		8	
				底部	1		
中国	青磁	龍泉系Ⅱ類	碗	口縁部		2	
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系Ⅳ類	碗	口縁部			
				胴部			
				底部		1	
中国	青磁	同安窯系Ⅲ類	皿	口縁部	1	1	
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系Ⅳ～Ⅴ類 無文外反	碗	口縁部		8	
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系Ⅳ～Ⅴ類 有文胴	碗・皿	口縁部			
				胴部		4	1
				底部			
中国	青磁	龍泉系Ⅳ～Ⅴ類 無文	碗・皿	口縁部			
				胴部		16	
				底部			
中国	青磁	龍泉系Ⅲ類 口折蓮弁	皿	口縁部		2	
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系蓮弁（櫛）	盤	口縁部			
				胴部		2	
				底部			
中国（明代）	白磁	A群 口禿皿	皿	口縁部		1	
				胴部			
				底部			
中国（明代）	白磁	C3群 無文外反	碗	口縁部		1	
				胴部			
				底部			
中国（明代）	白磁	不明	碗	口縁部			
				胴部		3	
				底部		1	
中国	褐釉陶器	不明	壺？	口縁部			
				胴部		6	1
				底部			
タイ	褐釉陶器	不明	壺	口縁部			
				胴部		1	2
				底部			
中国（清代）	青花	不明	碗	口縁部			2
				胴部		2	1
				底部		2	
日本	関西色絵	不明	不明	口縁部			
				胴部		1	
				底部			
日本	肥前銅緑釉	不明	碗	口縁部		1	
				胴部			
				底部			
日本	肥前染付	不明	瓶	口縁部			
				胴部		1	
				底部			
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部		3	
				胴部	2		
				底部		2	
日本	銭	寛永通宝	一	完形		1	
				口縁部			
				胴部	1	2	
沖縄	近世～近代 壺屋焼	無釉陶器	壺？	底部			
				口縁部			
				胴部		1	
沖縄	陶質土器	不明	不明	底部			
				口縁部			
				胴部			
沖縄	赤瓦	平瓦 丸瓦	平瓦 丸瓦	体部	1		
				体部		1	
				体部			
沖縄	焼土	—	—	—	1	4	10
不明	ガラス玉	—	—	—			1
沖縄	貝	—	—	—		10	
合計					7	88	18

白磁

第 18 図 7 は無文外反碗の口縁部で、灰白色の釉が施釉される。白磁分類 C3 群に該当する。Ⅱ層出土。同図 8 は高台が低い碗の底部である。見込みに段を有し、くぼみがみられる。内体面の見込み外周にのみ灰白色の釉が施釉され、見込み中央は無釉である。外体面は露胎となる。底径は 5.8 cm で、Ⅱ層出土。

青花

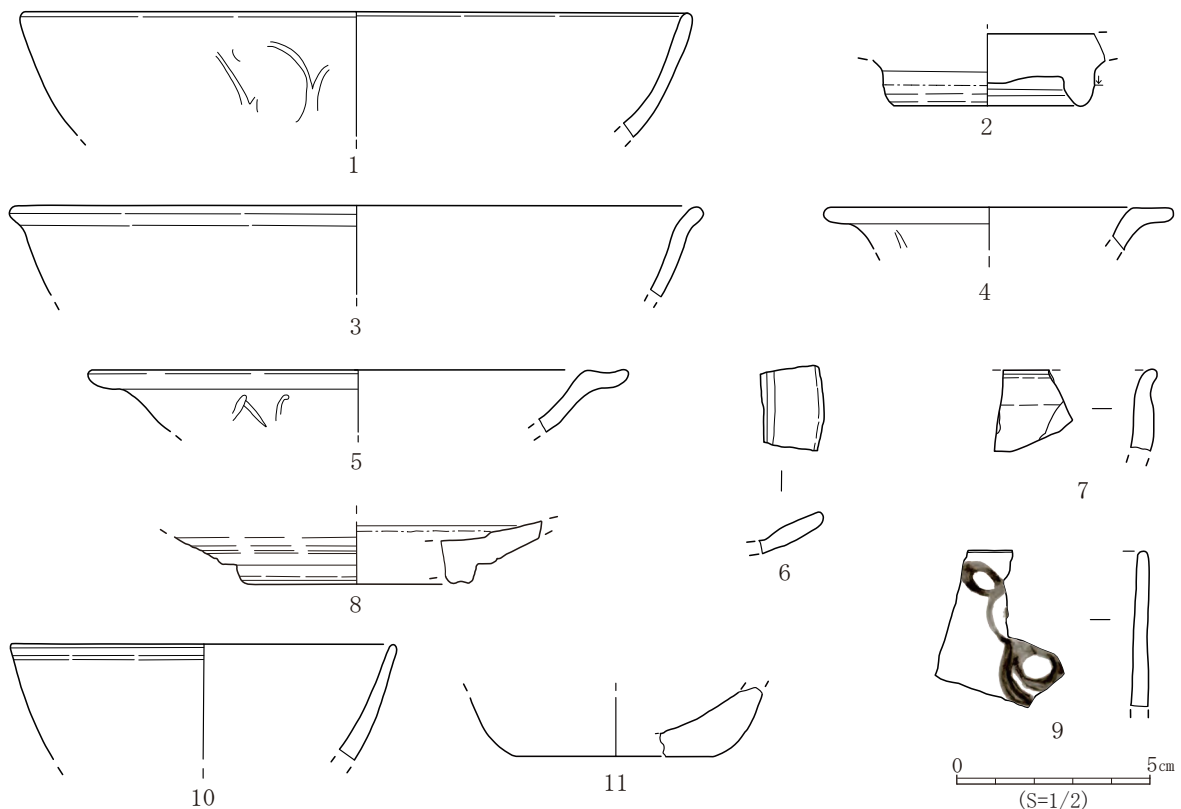
同図 9 は清代の福建・広東系碗の口縁部である。口縁部は直口で、外体面に唐草文？が施される。素地は灰色を帯びており、呉須の発色も鈍い。炉跡覆土内より出土。

肥前陶器

同図 10 は銅緑釉碗の口縁部である。口縁部は直口で、外体面に銅緑釉が施され、内体面は透明釉が施釉される。口径は 10 cm で、Ⅱ層出土。

②土器

T.P.2 出土の土器は 9 点であるが、1 点のみⅠ層出土の底部、残り 8 点がⅡ層出土で全て胴部資料である。同図 11 はグスク土器の底部である。器種は不明。器面調整は外面に工具調整痕が僅かに残るが、内面は丁寧なナデ調整が施される。グスク土器分類第 3 段階に該当する。底径は 5.2 cm で、Ⅰ層出土。



第 18 図 T.P.2 出土遺物

第5表 T.P.2 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第18図 1	青磁	Ⅱ類	碗	口縁部	17.2 —	口縁部は直口で、外体面に蓮弁文を施す。内外面ともに施釉。	T.P.2 Ⅱ
第18図 2	青磁	Ⅳ類	碗	底部	— 4.9	見込みから高台脇までは施釉がなされ、畳付から高台内は無釉。	T.P.2 Ⅱ
第18図 3	青磁	Ⅳ - Ⅴ類	碗	口縁部	18 —	口縁部は外反し、内外体面ともに無文である。外体面に貫入がみられる。内外面ともに施釉。	T.P.2 Ⅱ
第18図 4	青磁	Ⅲ類	皿	口縁部	8.8 —	口縁部は鐙を有し、鐙上面は平坦。外体面に篋削りによる蓮弁文の一部が確認できる。	T.P.2 Ⅱ
第18図 5	青磁	Ⅲ類	皿	口縁部	14 —	口縁部は鐙を有し、鐙上面はくぼむ。外体面に篋描きによる蓮弁文を施す。	T.P.2 Ⅱ
第18図 6	青磁	同安窯系	皿	口縁部	— —	内体部と見込みの境に段を有する。外体面残存部下位に一部、無釉箇所が確認できる。16世紀以降の資料か。	T.P.2 Ⅰ
第18図 7	白磁	C3群	碗	口縁部	— —	無文外反の碗の口縁部で、灰白色の釉を施釉。	T.P.2 Ⅱ
第18図 8	白磁	不明	碗	底部	— 5.8	高台は低く、見込みに段が有り、くぼむ。見込み外周のみに施釉され、中央は無釉。外体面は露胎となる。	T.P.2 Ⅱ
第18図 9	青花	福建・ 広東系碗	碗	口縁部	— —	口縁部が直口する清代の粗製碗。素地は灰色で、呉須の発色は鈍い。	T.P.2 炉跡
第18図 10	肥前陶器	銅緑釉陶器	碗	口縁部	10 —	外体面に銅緑釉、内体面に透明釉が施される。内野山窯とみられる。	T.P.2 Ⅱ
第18図 11	土器	第3段階	不明	底部	— 5.2	グスク土器の器種不明の平底。外面は工具調整痕が僅かに残り、内面は丁寧なナデ調整が施される。	T.P.2 Ⅰ

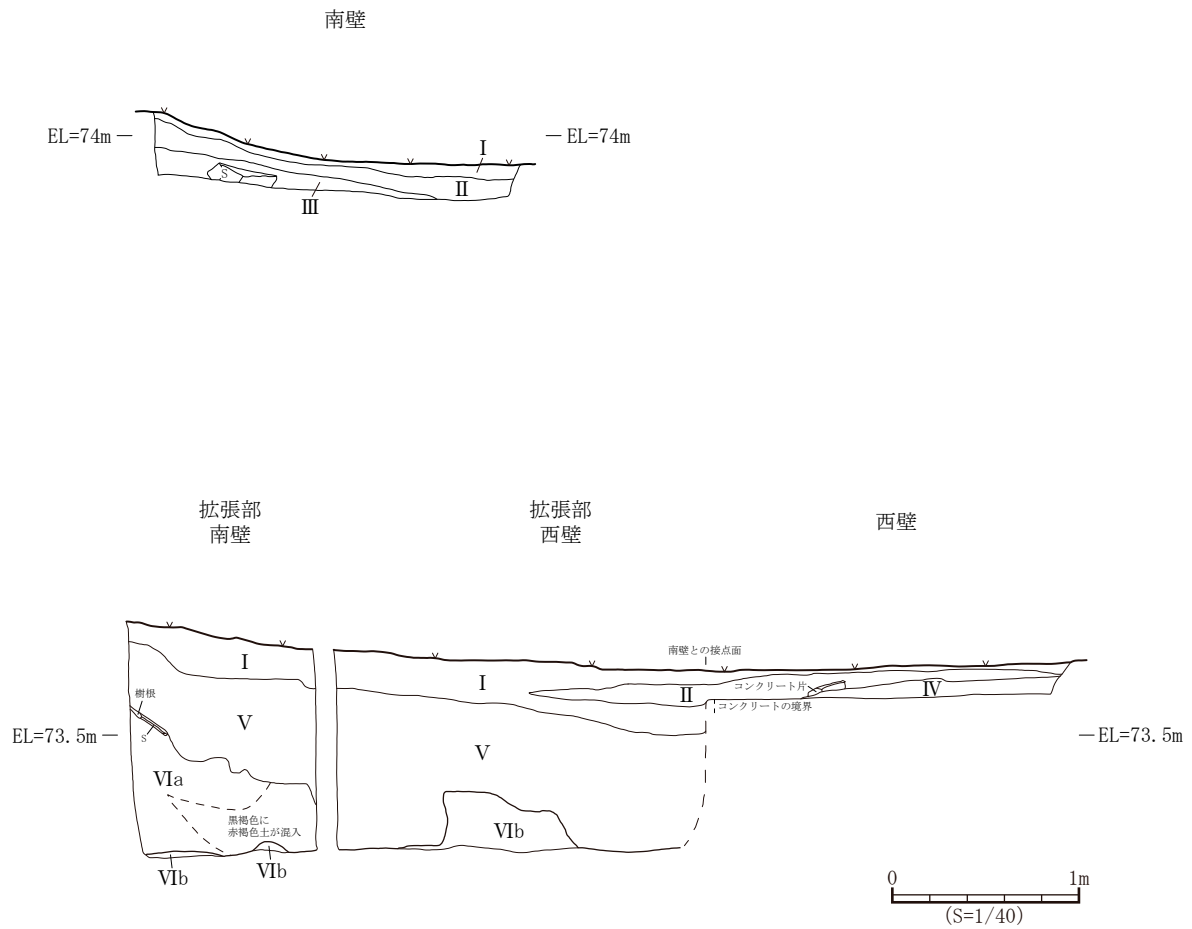
3. T.P.4

T.P.4は、奉納殿に上がるコンクリート製階段の頂上付近から北側に数10mほど進んだところのノロ殿内敷地に位置する。標高は約73mである。遺物包含層は、攪乱を受けていた。

(1). 層序

南壁・西壁

- I 層 表土。1～2cmほどの礫を含む土壌。黒褐色（10YR3/2）。
- II 層 造成土。3～5cmほどの礫を含む粘質土壌。明赤褐色（5YR5/6）。
- III 層 造成土。枝サンゴ混じりの混砂土。黒褐色（2.5Y3/1）。
- IV 層 造成土。0.3～0.5cmほどの礫を含む砂。黄褐色（2.5Y5/3）。
- V 層 造成土。3～5cmほどの礫を含む粘質土壌。赤瓦が多く混入する。暗灰黄褐色（2.5Y4/2）を基本に明赤褐色（5YR5/6）が混入する。
- VI a 層 造成土。1～2cm程の礫を含む粘質土壌。赤瓦が多く混入する。明赤褐色（5YR5/6）。
- VI b 層 地山。礫混じりの粘質土壌。基盤の粘板岩を含み、土の締まりは良い。褐色（10YR4/4）。

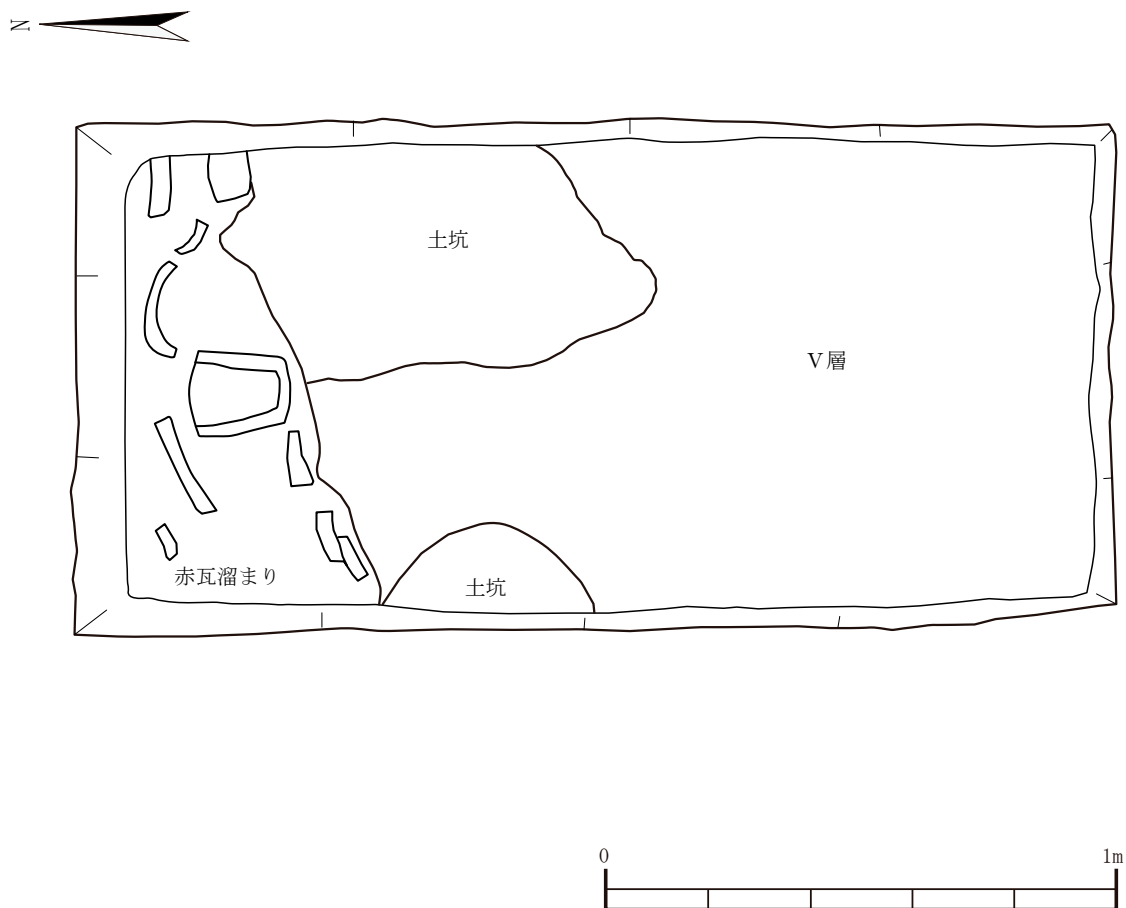


第 19 図 T.P.4 南壁及び西壁面図

(2) 遺構

調査地点の北側のV層において、赤瓦溜まりが確認された。赤瓦溜まりの南側に不明瞭ではあるがやや暗い色調の部分が2箇所みられ、土坑の可能性を考慮して図化を行った。

土坑小は調査地点西壁で遮断され長径不明だが、短径は42cmである。土坑大は調査地点東壁面で遮断されかつ、赤瓦溜まりに切られているため、土坑の径は不明である。いずれの土坑も土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)で粘質土が堆積している。なお、赤瓦溜まりは調査地点内での長径が86cm、短径50cmで、土色は明赤褐色(5YR5/6)の粘質土が堆積している。



第 20 図 T.P.4 遺構検出状況

(3). 出土遺物

T.P.4 から出土した遺物は少量だが、人工遺物では青磁が 2 点、褐釉陶器が 1 点、近代陶磁器が 2 点、赤瓦が 7 点、ガラス片が 1 点である。

自然遺物では貝が 2 点出土した。内訳は第 6 表に示すとおりである。以下、図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第 7 表に示す。

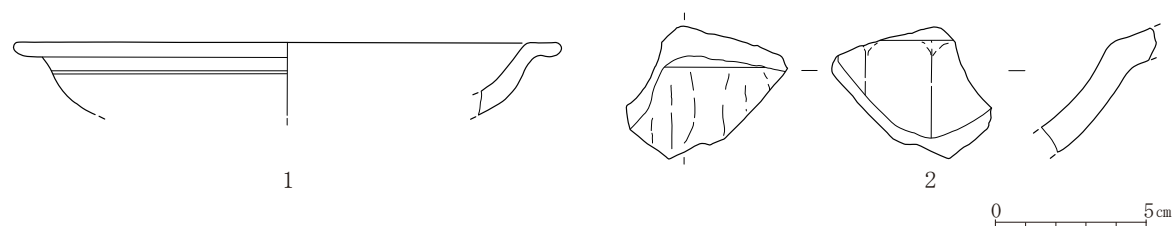
第 6 表 T.P.4 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	I 層	II 層	III 層
中国	青磁	龍泉系 皿類 口折無文	皿	口縁部		1	
				胴部			
				底部			
中国	青磁	龍泉系 鐏縁 蓮弁	盤	口縁部			
				胴部			1
				底部			
タイ	褐釉陶器	不明	壺	口縁部			
				胴部		1	
				底部			
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部	1		
				胴部	1		
				底部			
不明	ガラス片	—	—	—	1		
沖縄	赤瓦	平瓦	平瓦	体部			
		丸瓦	丸瓦	体部		7	
沖縄	貝	—	—	—	2		
合計					5	9	1

①陶磁器

青磁

第 21 図 1 は口折無文皿の口縁部である。口縁部は鐔を有し、鐔上面は僅かにくぼむ器形となる。龍泉窯系Ⅲ類に該当する。口径は 14 cm で、Ⅱ層出土。同図 2 は盤の胴部である。口縁部を僅かに欠くが、口縁部は鐔を有する鐔縁盤になると思われる。内外体面に幅広の蓮弁文が施される。Ⅲ層出土。



第 21 図 T.P.4 出土遺物

第 7 表 T.P.4 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 21 図 1	青磁	Ⅲ類	皿	口縁部	18 —	口折の無文皿の口縁部。口縁部は鐔を有し、鐔上面は若干くぼむ。内外面ともに施釉される。	T.P.4 Ⅱ
第 21 図 2	青磁	鐔縁盤	盤	胴部	— —	口縁部は欠けているが、鐔をもつと思われる。内外体面に幅広の蓮弁文が施され、釉は濃い深緑を帯びる。	T.P.4 Ⅱ

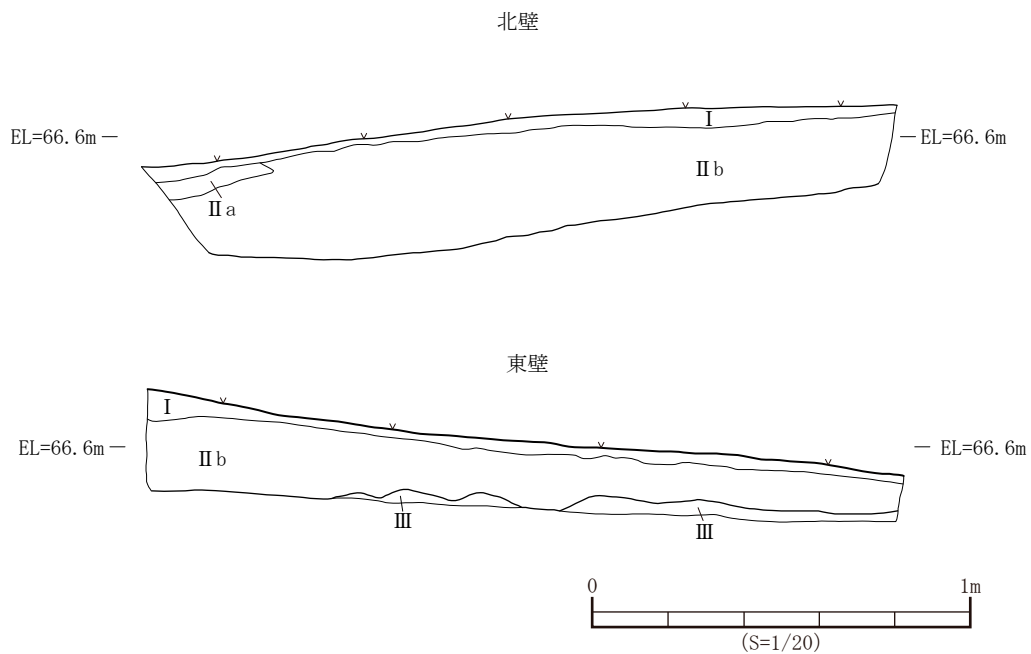
4. T.P.5

T.P.5 は、根神屋に隣接し、現在は使用されていない井戸跡の前庭部にあたる箇所である。標高は約 66 m である。遺物包含層は未攪乱であった。

(1). 層序

北壁・東壁

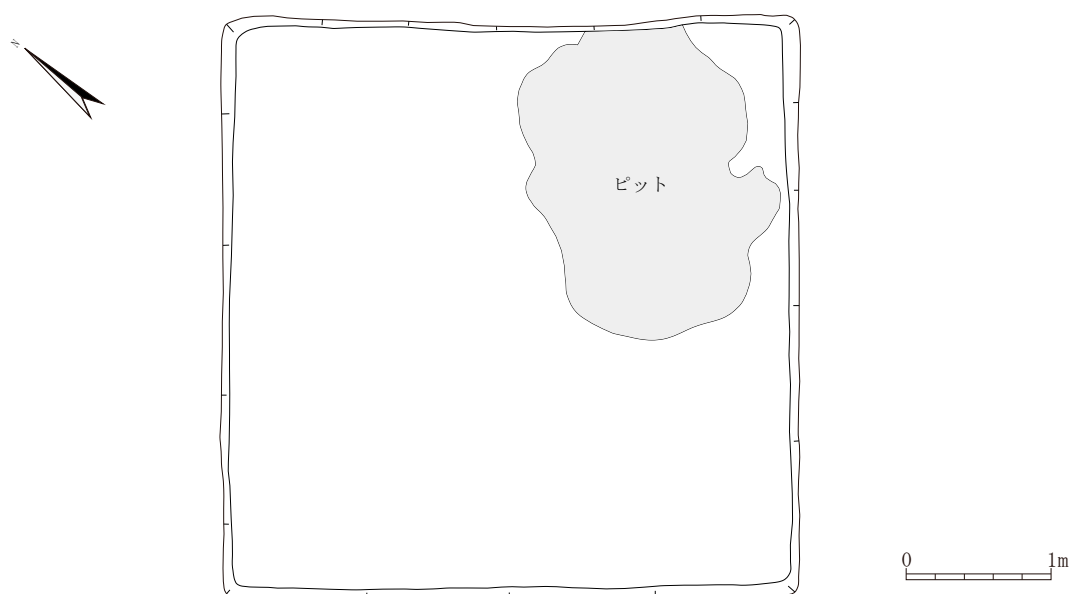
- I 層 表土。2 ～ 3 cm ほどの礫を含む土壌。黒褐色（10YR3/2）。
- Ⅱ a 層 造成土。枝サンゴ混じりの土壌。枝サンゴ混じりは人為的に敷かれている。褐色（10YR4/4）。
- Ⅱ b 層 1 ～ 3 cm ほどの礫を含む粘質土壌。礫は基盤の岩が風化したものである。グスク時代の遺物包含層で、青磁、白磁などを含む。にぶい黄褐色（10YR4/3）。
- Ⅲ 層 地山。礫混じりの粘質土壌。礫は基盤の粘板岩が風化したものである。土坑の可能性がある遺構が検出される。赤褐色（5YR4/8）。



第 22 図 T.P. 5 北壁及び東壁面図

(2). 遺構

T.P. 5 を 25 cm ほど掘り下げると、赤褐色の粘質土壌である地山（Ⅲ層）が露出する。調査地点北東側において、地山を掘りこんだ遺構が検出された。土坑の可能性を考慮して図化を行った。遺構は長径 107 cm、短径 87 cm を測る。土色は暗褐色（10YR3/3）を呈する。



第 23 図 T.P. 5 遺構検出状況

(3) 出土遺物

T.P.5 から出土した遺物は 19 点と少量であるが、人工遺物では青磁が 2 点、タイ産褐釉陶器が 2 点、近代陶磁器が 4 点、陶質土器が 2 点である。Ⅱ層において焼土が 2 点と、Ⅰ層及びⅡ層で貝が 5 点出土した。

内訳は第 8 表に示すとおりである。

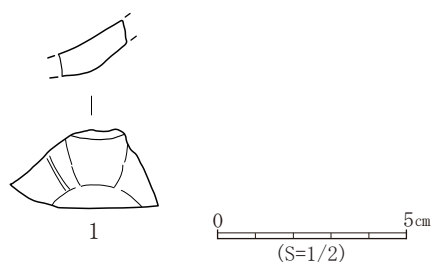
第 8 表 T.P.5 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	Ⅰ層	Ⅱ層
中国	青磁	龍泉系Ⅱ類	碗	口縁部		
				胴部		2
				底部		
タイ	褐釉陶器	不明	壺	口縁部		
				胴部		2
				底部		
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部	1	
				胴部	1	3
				底部		
沖縄	近世 - 近代 壺屋焼	無釉陶器	壺?	口縁部		
				胴部	1	
				底部		
沖縄	陶質土器	不明	不明	口縁部	1	
				胴部	1	
				底部		
沖縄	焼土	—	—	—		2
沖縄	貝	—	—	—	3	2
合計					8	11

①陶磁器

青磁

第 24 図は底部に近い青磁碗の胴部である。外体面にやや幅の広い蓮弁文が施される。Ⅱ類に該当する。Ⅰ層出土。



第 24 図 T.P.5 出土遺物

第 9 表 T.P.5 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 24 図	青磁	Ⅱ類	碗	胴部	— —	底部に近い胴部資料。外体面に幅の広い蓮弁文を施す。内外面ともに施釉される。	T.P.5 Ⅰ

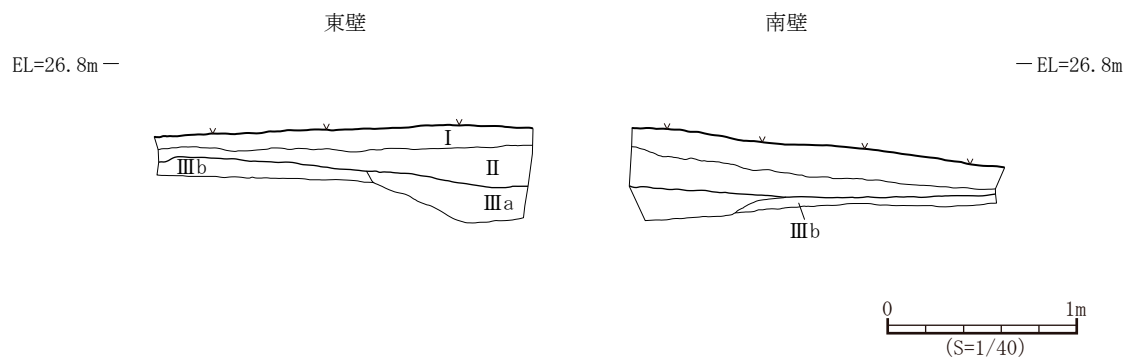
5. T.P.6

T.P.6 は、東江中学校に隣接する名護城公園南口から奉納殿にかけて設置されているコンクリート製階段を数 10 段ほど登った南側の箇所である。現在はポンプ小屋が設置されている削平地である。標高は約 26 m で、本報告で掲載する試掘箇所では最も標高の低い地点となる。遺物や遺構は確認されていない。

(1). 層序

東壁・南壁

- I 層 表土。バラスを含む土壌。にぶい黄褐色 (10YR4/3)。
II 層 客土。礫混じりの土壌。粘板岩の小片が密に混じる。明赤褐色 (2.5YR3/4)。
III a 層 地山? 石灰岩の風化が著しいもので、シルト状を呈する。橙色 (7.5YR6/8)。
III b 層 地山。粘板岩が風化したものである。オリーブ黒色 (7.5YR3/1)～暗赤褐色 (2.5YR3/4)。



第 25 図 T.P. 6 東壁及び南壁面図

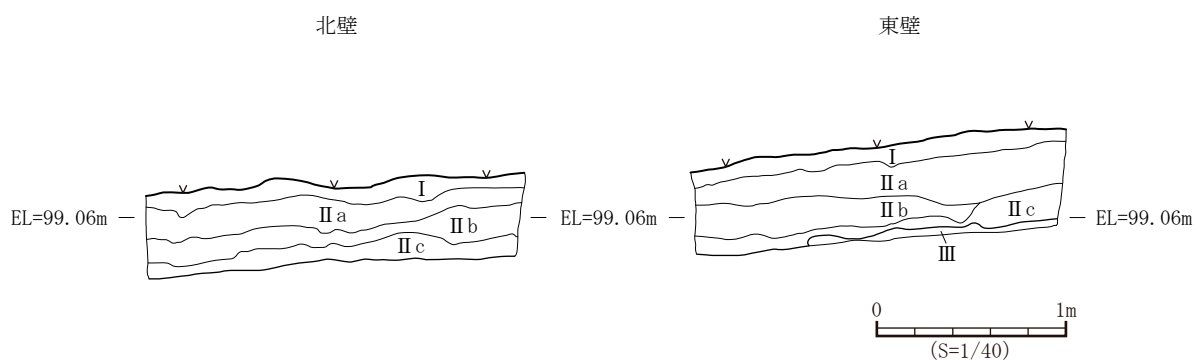
6. T.P. 7

T.P. 7 は、神アサギのある頂上から西側に一段下がった箇所である。標高は約 100 m である。グスク土器、白磁、沖縄産陶器、獣骨などが出土し、ピットが検出される。

(1). 層序

北壁・東壁

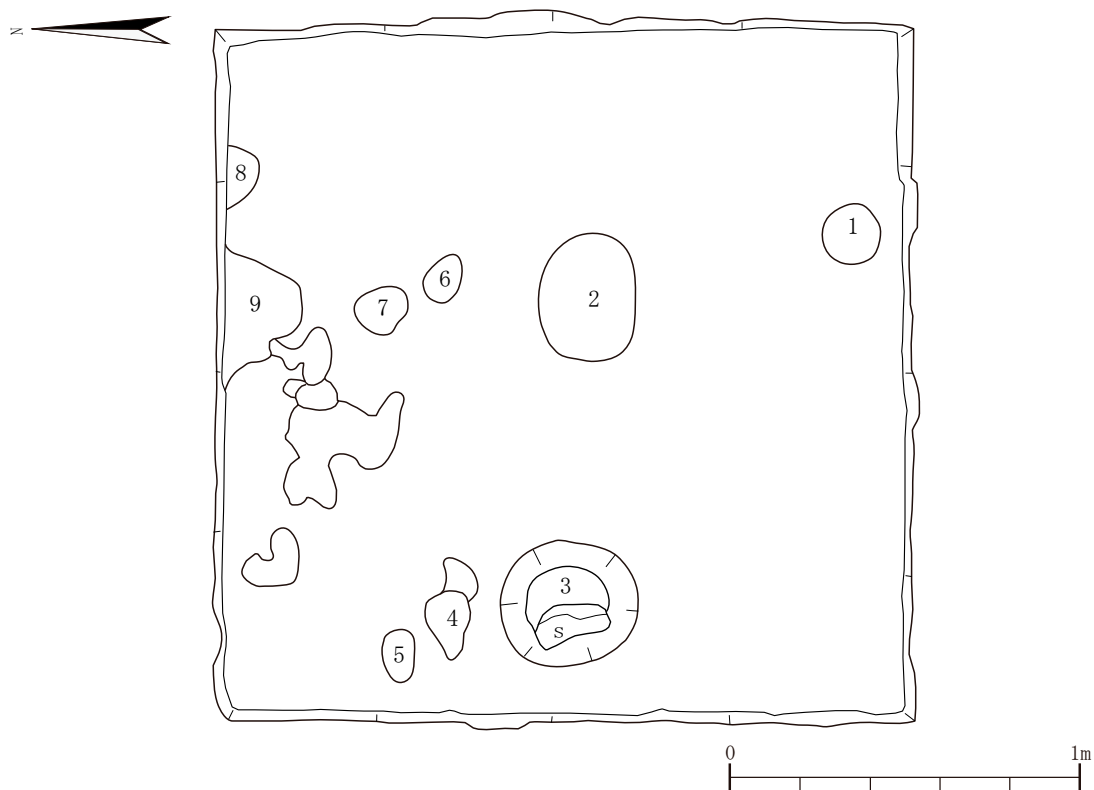
- I 層 表土。砂混じりの粘質土壌。黒褐色 (10YR3/1)。
II a 層 包含層。砂混じりの粘質土壌。暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)。
II b 層 包含層。砂利混じりの粘質土壌。地山の明褐色土壌がまばらに混入する。オリーブ褐色 (2.5Y4/3)。
II c 層 包含層。砂利混じりの粘質土壌。地山の明褐色土壌がまばらに混入し、炭化物と焼土を多く含む。白磁の口禿皿が出土する。にぶい黄褐色 (10YR4/3)。
III 層 地山。礫混じりの粘質土壌。1 cm ほどの細礫を多く含む。ピットが検出される。明褐色 (7.5YR5/8)。



第 26 図 T.P. 7 北壁及び東壁面図

(2). 遺構

地表から 40 cm ほど掘り下げると、明褐色の粘質土である地山（Ⅲ層）が露出する。その地山を掘りこんだピットが 9 基検出された。そのうち調査地点西側で確認されたピット No. 3 は、検出面に巨礫を含み、明瞭な線がみられるピットである。長径は 39 cm、短径 36 cm を測る。



第 27 図 T.P. 7 遺構検出状況

(3) 出土遺物

T.P.7 から出土した遺物は 8 点で数量は少ない。人工遺物ではグスク土器が 3 点、白磁が 1 点、近代陶磁器が 1 点、沖縄産無釉陶器が 2 点である。自然遺物として獣骨が 1 点出土した。

内訳は第 10 表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第 11 表に示す。

第 10 表 T.P.7 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	I 層	II 層
沖縄	グスク土器	第3段階	不明	口縁部	1	1
				胴部		1
				底部		
中国 (明代)	白磁	A 口禿皿	皿	口縁部		1
				胴部		
				底部		
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部	1	
				胴部		
				底部		
沖縄	近世・近代 壺屋焼	無釉陶器	壺?	口縁部		
				胴部		2
				底部		
沖縄	獣骨	—	—	—		1
合計					2	6

①陶磁器

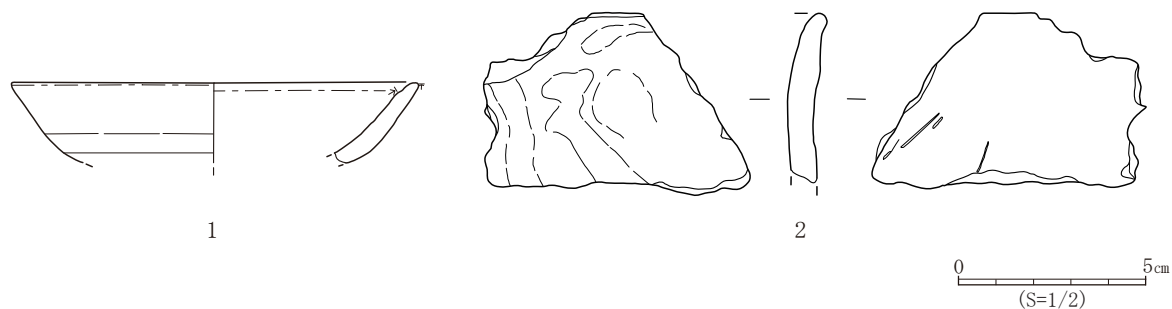
白磁

第 28 図 1 は口禿となる皿の口縁部である。灰白色の釉が施釉され、口唇部から口縁部内面に掛けて釉が剥ぎ取られている。白磁分類 A 群に該当する。口径は 10.9 cm で、II 層出土。

②土器

グスク土器

第 28 図 2 は甕形か鉢形の口縁部と推測される。口縁部は僅かに外反する。外面に指頭圧痕が残り、内面には工具調整痕が部分的にみられる。器面は多孔質である。グスク土器第 3 段階に該当し、T.P.7 表採。



第 28 図 T.P.7 出土遺物

第 11 表 T.P.7 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 28 図 1	白磁	A 群	皿	口縁部	10.9 —	口禿皿の口縁部。灰白色の釉を施釉したあと、口唇部から口縁内面に掛けて釉剥ぎをする。	T.P.7 II
第 28 図 2	土器	第 3 段階	甕か鉢	口縁部	— —	甕形か鉢形の口縁部。口縁部は僅かに外反する。外面指頭圧痕が残り、内面は縦方向の工具調整痕が残る。	T.P.7 表採

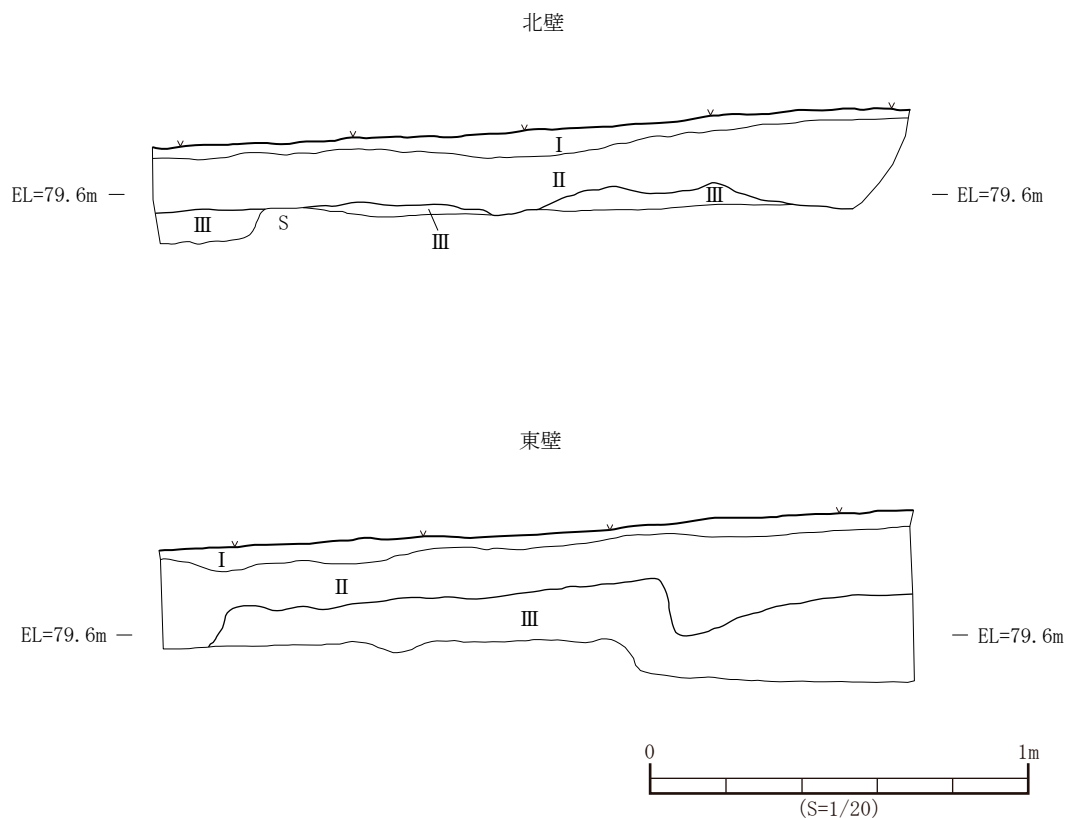
7. T.P.8

T.P.8は、名護城中腹の北側にある神アサギにかけて設置されたコンクリート製の階段を数10段登り、北側にあるウチ神屋の敷地内の箇所である。標高は約79 mである。過去の調査でのA地点の東側斜面下部にあたる削平地となっている。遺物包含層は攪乱されているが、地山からグスク時代の遺構が検出される。

(1). 層序

北壁・東壁

- I 層 表土。粘質土壌。土の締まりはやや悪い。黒褐色 (10YR2/3)。
- II 層 礫混じりの粘質土壌。近現代の遺物の他、瓦質土器などが出土する。にぶい黄褐色 (10YR4/3)。
- III 層 地山。礫混じりの粘質土壌。粘板岩片を多く含む。ピットが検出される。赤褐色 (5YR4/8)。

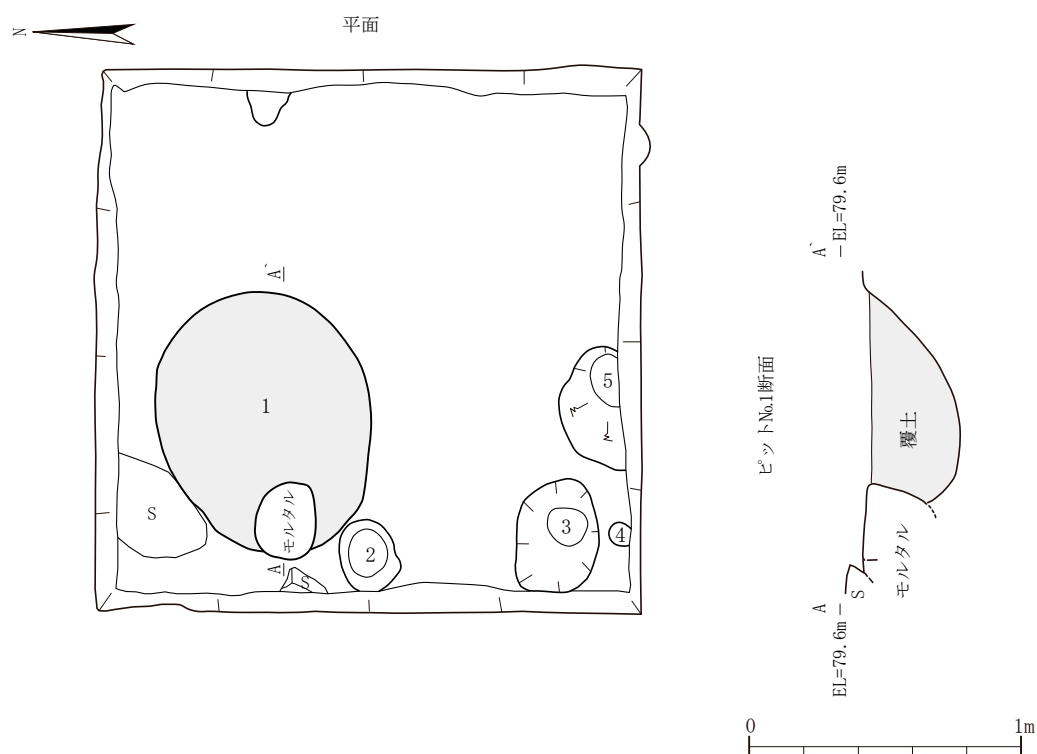


第29図 T.P.8 北壁及び東壁面図

(2). 遺構

地表から 60 cm ほど掘り下げると、地山を掘りこんだピットが検出された。特に、調査地点西側にピットが集中している。

ピット No. 1 は、径が大きく長径 94 cm、短径 78 cm を測る。半断面でみると、深さは約 35 cm である。但し、ピット No. 1 上面にはモルタルのようなものが混入しており、後代にピットが攪乱された可能性も否定できない。ピット No. 1 の覆土は、粘質土壌で 1 ～ 5 cm 前後の礫が多量に混入する。土の締まりは良く、炭化物が少量含まれる。土色は褐色 (7.5YR4/3)。



第 30 図 T.P. 8 遺構検出状況及びピット No. 1 断面図

(3). 出土遺物

T.P. 8 からはグスク時代に属する遺物は少なく、近世から近代にかけての遺物が多い。人工遺物では近代陶磁器が最も多く、次いで近世から近代の沖縄産陶器が多く得られた。また、Ⅱ層より玉が 2 点と、瓦質土器が 7 点出土している。

内訳は第 12 表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第 13 表に示す。

①陶磁器

青花

第31図1は碗の口縁部で、口縁部は直口する器形となる。外体面に界線と文様が施文され、口縁部内体面には界線が描かれる。清代の青花である。口径は13 cmで、Ⅰ層出土。

肥前陶器

第31図2は鉢の口縁部で、口縁部が外に強く折れる器形となる。口唇部から外体面にかけて黒釉が施釉され、口唇部の一部に濃紺色の釉が確認できる。口径は13.5 cmで、Ⅰ層出土。

②カムイヤキ

第31図3はカムイヤキの胴部で、器種は不明。内面に横位の工具調整痕と格子状の工具調整痕がみられる。Ⅱ層出土。

③瓦質土器

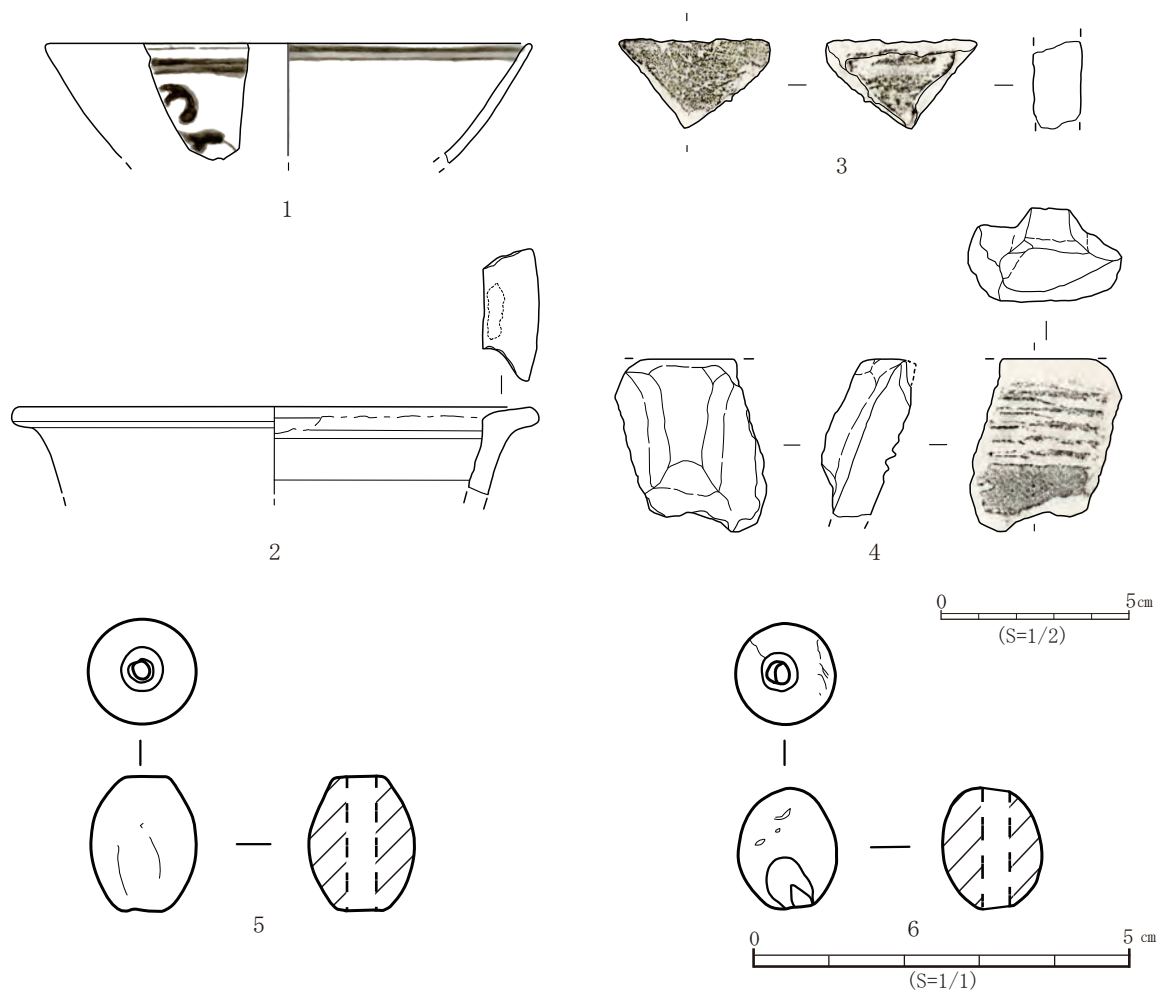
第31図4は瓦質土器の口縁部と思われ、器種は火炉に類似する。口唇部は平坦に成形され、口縁部内面に方形の突帯が貼り付けられる。外面には10条の深い沈線が施される。Ⅱ層出土。

④玉

第31図5及び6は玉の完形品である。いずれも材質は水晶と考えられ、色調は透明である。同図5は長さ1.8 cm、幅1.4 cm、孔径0.4 cm、重量5.4 gを測る。同図6は長さ1.6 cm、幅1.35 cm、孔径0.4 cm、重量4.14 gを測り、同図5に比べてやや小さい。いずれもⅡ層出土。

第12表 T.P.8 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	Ⅰ層	Ⅱ層
不明	カムイヤキ	不明	不明	胴部		1
中国 (清代)	青花	不明	碗	口縁部	1	
				胴部		1
				底部		
日本	肥前 陶器	不明	鉢	口縁部	1	
				胴部		
				底部		
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部	8	17
				胴部	11	24
				底部	9	4
沖縄?	瓦質土器	不明	火炉?	口縁部		2
				胴部		5
				底部		
沖縄	近世-近代 壺屋焼	無釉陶器	壺?	口縁部		
				胴部	1	17
				底部		
沖縄	近世-近代 壺屋焼	施釉陶器	碗・壺ほか	口縁部	1	
				胴部	6	4
				底部	1	2
不明	玉	—	—	完形		2
不明	石器	—	砥石?	—		1
沖縄	骨	—	—	—	1	
合計					40	80



第 31 図 T.P.8 出土遺物

第 13 表 T.P.8 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 31 図 1	青花	清代	碗	口縁部	13 —	口縁部が直口口縁の碗。外体面に界線と文様有り。口縁部内体面にも界線が施される。呉須の発色は良い。	T.P.8 I
第 31 図 2	肥前陶器	不明	鉢	口縁部	13.5 —	口縁部は外に折れる。口唇部から外体面に黒釉が施釉される。内体面は無釉でロクロの回転調整痕がみられる。	T.P.8 I
第 31 図 3	カムイヤキ	不明	不明	胴部	— —	器種不明の胴部資料。内面に横位の工具調整痕と格子状の工具調整痕がみられる。	T.P.8 II
第 31 図 4	瓦質土器	不明	火炉?	口縁部	14 —	瓦質土器の口縁部。器種は火炉と推測される。口唇部は平坦で内面に方形の突帯を有する。外面に 10 条の沈線がみられる。	T.P.8 II
第 31 図 5	玉	水晶	—	完形	— —	色調は透明。法量は長さ 1.8 cm、幅 1.4 cm、孔径 0.4 cm、重量 5.4 g。	T.P.8 II
第 31 図 6	玉	水晶	—	完形	— —	色調は透明。法量は長さ 1.6 cm、幅 1.35 cm、孔径 0.4 cm、重量 4.14 g。同図 5 と比べて法量は若干小さい。	T.P.8 II

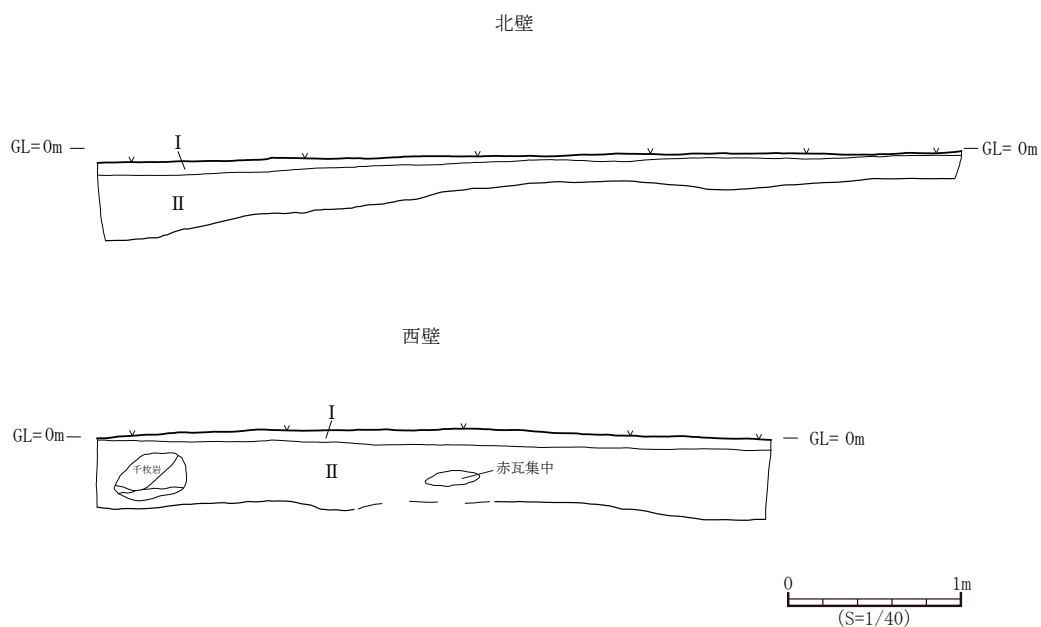
8. T. P. 10

T. P. 10 は、名護按司の弟で「名幸」といわれる人物が祀られている名幸祠の前庭部にあたる箇所である。標高は約 65 m である。ここから北西側に下がると、城集落の移動前の旧集落跡とされる箇所がある。遺物包含層は攪乱されているが、地山からグスク時代の遺構が検出される。

(1). 層序

北壁・西壁

- I 層 表土。客土でコーラルを主体とする造成土。近代陶磁器、レンガ、ガラス片が出土。にぶい黄褐色 (10YR6/4) ～黒褐色 (10YR2/2)。
- II 層 礫混じりの土壌。砂利や 2 cm ほどの細礫を含み、土は固く締まっている。青磁、白磁などが出土するが、赤瓦やガラス片などの近現代の遺物が混入するなど攪乱を受けている。灰黄褐色 (10YR4/2)。
- III 層 地山。基盤の粘板岩を含む。特に、東側から西側に傾斜するように粘板岩巨礫が露出する。東側の粘板岩を含む土壌 (赤褐色 5YR4/2) においてピットが検出される。



第 32 図 T. P. 10 北壁及び西壁面図

(2). 遺構

調査地点北壁付近の東側にてピットが1基検出された。ピットの長径は30 cm、短径25 cm、深さ40 cmを測る。覆土に炭化物と焼土を含み、覆土内から青磁、白磁が出土した。時間的制約のため、図化は行っていない。写真のみ掲載した。

(3). 出土遺物

T.P. 10からはグスク時代に属する遺物が出土したが、近世から現代にかけての遺物も多い。人工遺物では赤瓦が最も多く、陶磁器で出土の多いものには青磁と白磁が挙げられる。なお、前述したようにピット覆土から青磁と白磁が得られているが、白磁は全てピット覆土からの出土である。

内訳は第14表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第15表に示す。

①陶磁器

青磁

第33図1は鏝縁盤の口縁部である。口縁部を外に折り曲げ、先端を摘まみ上げている。内体面に幅の細い蓮弁文が施される。口径は21 cmで、ピット覆土出土。同図2は鏝を持たない盤の口縁部である。直口口縁で、無文となる。Ⅱ層出土。

白磁

第33図3は八角杯の口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は平坦である。胴部下半は無釉で、釉は黄色みを帯びている。口径は8 cmを測る。

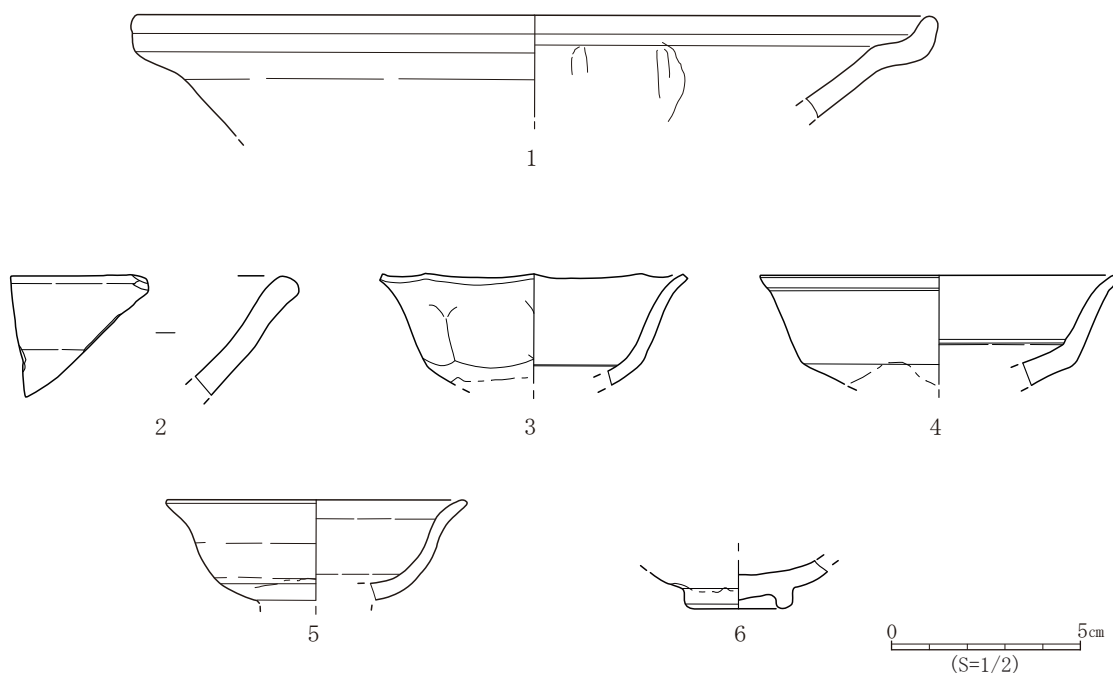
同図4は腰折杯の口縁部である。胴部から口縁部にかけて直線的に開く器形となる。胴部下半は無釉で、釉は黄色みを帯びている。口径は9.4 cmを測る。

同図5は外反杯の口縁部である。胴部は丸みを帯び、そこから口縁部にかけて緩やかに外反する。胴部下半は無釉で、釉は黄色みを帯びている。口径は8 cmを測る。

同図6は杯の底部である。高台が低く、高台脇から高台内にかけて無釉となる。釉は白色である。底径は2.4 cmを測る。同図3～6はピット覆土からの出土で、白磁分類D群に該当する。

第14表 T.P. 10 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	Ⅱ層	pit
中国	青磁	龍泉系 V-VI類 無文直口	碗	口縁部	1	
				胴部		
				底部		
中国	青磁	龍泉系 IV-V類 無文	碗・皿	口縁部		
				胴部		
				底部	4	2
中国	青磁	龍泉系	盤	口縁部	1	
中国	青磁	龍泉系 鏝縁 蓮弁(櫛)	盤	口縁部		1
				胴部		1
				底部		
中国	白磁	D群 八角、外反 腰折	杯	口縁部		4
				胴部		1
				底部		1
中国 (清代)	青花	不明	碗	口縁部	1	
				胴部	1	
				底部		
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部		
				胴部		
				底部	1	
沖縄	近世-近代 壺屋焼	無釉陶器	壺?	口縁部		
				胴部	4	
				底部		
沖縄	近世-近代 壺屋焼	施釉陶器	碗・壺ほか	口縁部		
				胴部	1	
				底部	1	
沖縄	陶質土器	不明	不明	口縁部		
				胴部	3	
				底部		
日本	瀬戸美濃 現代陶磁 昭和～	—	湯呑 碗 瓶 皿 ふた 香炉			
					4	
沖縄	赤瓦	平瓦 丸瓦	平瓦 丸瓦	体部	105	
沖縄	焼土	—	—	体部		
合計					127	11



第 33 図 T.P. 10 出土遺物

第 15 表 T.P. 10 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 33 図 1	青磁	鐏縁盤	盤	口縁部	21 —	口縁部を外へ折り曲げたあと、先端を摘まみ上げる。内体面に幅の細い蓮弁文を施す。	T.P.10 ピット覆土
第 33 図 2	青磁	無文直口	盤	口縁部	— —	口縁部は直口口縁となり、鐏を持たない盤。内外体面ともに無文である。	T.P.10 II
第 33 図 3	白磁	D 群	杯	口縁部	8 —	外体面が八面に面取りされる八角杯。口縁部は外反し、口唇部は平坦である。釉は黄色みを帯び、胴下半は露胎。	T.P.10 ピット覆土
第 33 図 4	白磁	D 群	杯	口縁部	9.4 —	腰折れ杯で、胴部から口縁部にかけて直線的に開く器形。釉は黄色みを帯び、胴下半は露胎。	T.P.10 ピット覆土
第 33 図 5	白磁	D 群	杯	口縁部	8 —	胴部は丸みを帯び、口縁部にかけて緩やかに外反する器形。釉は黄色みを帯び、胴下半は露胎。	T.P.10 ピット覆土
第 33 図 6	白磁	D 群	杯	底部	— 2.4	高台が低い杯の底部資料。釉は白色で、高台脇から高台内にかけて露胎。	T.P.10 ピット覆土

9. T.P. 11

T.P. 11 は、神アサギのある頂上部から北側に下がる削平地である。標高は約 99 m で、さらに北側は急斜面となっている。遺物包含層は未攪乱で、青磁やグスク土器などが出土する。地山からグスク時代の遺構が検出される。

(1). 層序

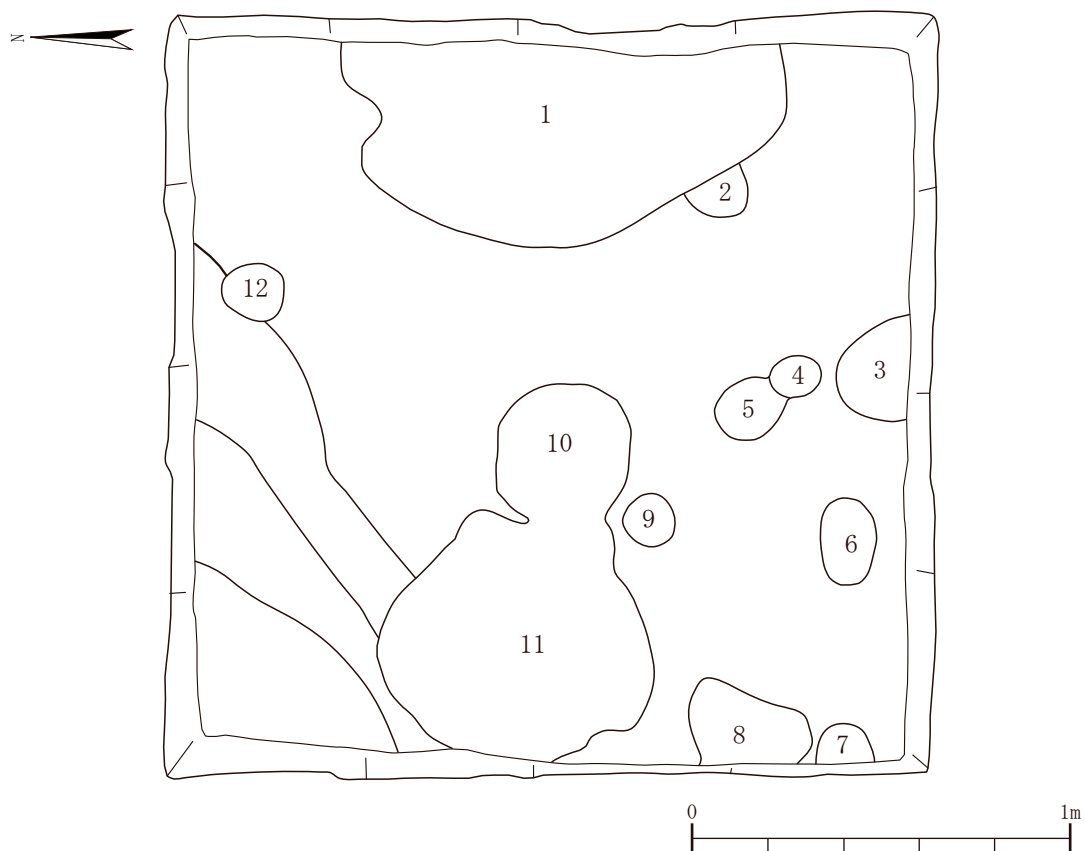
図化は行っていないため、層序所見と写真のみ掲載する。

北壁・東壁

- I 層 表土。粘質土壌。土の締まりはやや悪い。黒褐色 (10YR2/3)。
- II 層 砂混じりの粘質土壌。植物痕が多く、炭化物と焼土を僅かに含む。鎬蓮弁文青磁とグスク土器が出土する。オリーブ褐色 (2.5Y4/4)。
- III 層 地山。礫混じり粘質土。調査地点南側から東側にかけて堆積する。ピットが検出される。赤褐色 (7.5YR5/8)。

(2). 遺構

地表から 20 cm ほど掘り下げると、地山を掘りこんだピットが 12 基検出された。特に、調査地点東側から南側にかけて比較的明瞭なピットが検出され、西側と北側のピットはやや不明瞭であった。



第 34 図 T.P. 11 遺構検出状況

(3). 出土遺物

T.P. 11 から出土した遺物は、グスク土器が多く、次いで青磁である。特に、グスク土器は大半が本トレンチから出土している。また、青磁は本遺跡のなかでは古手になるものが多く出土する傾向にある。

内訳は第 16 表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第 17 表に示す。

①陶磁器

青磁

第 35 図 1 は碗の口縁部である。口縁部は外反し、外体面に鎬蓮弁文が施される。龍泉窯系Ⅱ類に該当する。Ⅱ層出土。同図 2 は碗の口縁部である。口縁部は外反し、外体面に弦文が 3 条施される。龍泉窯系Ⅳ類に該当する。口径は 17.4 cm で、Ⅱ層出土。同図 3 は底に近い胴部である。高台脇付近で破損し、内体面腰部に圈線が施される。龍泉窯系Ⅳ類に該当する。Ⅱ層出土。

青白磁

第 35 図 4 は青白磁の皿底部と推測される。いわゆるベタ底で、型造りによると思われる文様が施される。

②カムイヤキ

第 35 図 5 はカムイヤキの胴部であるが、器種は不明である。器壁が薄く、外体面に明瞭な綾杉文が施文される。Ⅱ層出土。

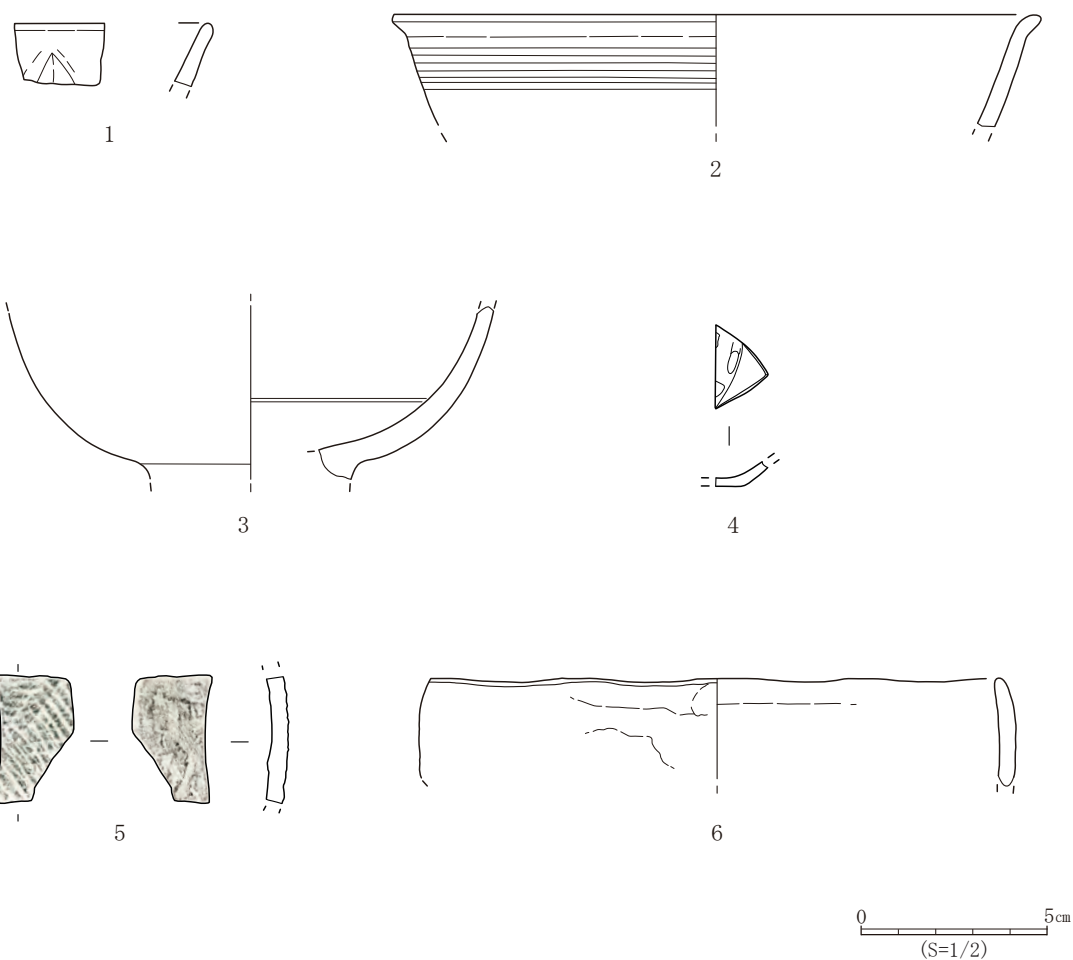
③土器

グスク土器

第 35 図 6 はグスク土器の鍋形に属する口縁部である。器壁は薄く、口縁部が内湾する器形となる。内面はナデ調整により平滑であるが、外面は指頭圧痕が残るためやや粗雑である。グスク土器第 3 段階に該当する。口径は 15.4 cm で、Ⅱ層出土。

第 16 表 T.P. 11 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	I 層	II 層
沖縄	グスク土器	第 3 段階	不明	口縁部	1	1
				胴部	22	26
				底部		
不明	カムイヤキ	不明	不明	胴部	2	5
中国	青磁	龍泉系 Ⅱ 類	碗	口縁部	1	1
				胴部	3	
				底部		
中国	青磁	龍泉系 Ⅳ 類	碗	口縁部		1
				胴部		1
				底部		
中国	青白磁	型造り	皿	底部		1
中国 (明代)	白磁	A 口禿皿	皿	口縁部		1
				胴部	1	
				底部		
中国 (清代)	青花	不明	碗	口縁部		
				胴部		1
				底部		
沖縄	赤瓦	平瓦 丸瓦	平瓦 丸瓦	体部		
				体部		1
合計					30	39



第 35 図 T.P.11 出土遺物

第 17 表 T.P.11 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 35 図 1	青磁	Ⅱ類	碗	口縁部	— —	口縁部は外反し、外体面に鑄蓮弁文を施す。	T.P.11 Ⅱ
第 35 図 2	青磁	Ⅳ類	碗	口縁部	17.4 —	口縁部は外反し、外体面に幅 0.1 ～ 0.15 cm の弦文を 3 条施す。	T.P.11 Ⅱ
第 35 図 3	青磁	Ⅳ類	碗	胴部	— —	高台付近で破損している胴部資料。内体面腰部に圈線を施す。	T.P.11 Ⅱ
第 35 図 4	青白磁	型造り	皿	底部	— —	青白磁の皿の底部資料。型造りによる文様の一部が確認できる。	T.P.11 Ⅱ
第 35 図 5	カムイヤキ	不明	不明	胴部	— —	器種不明の胴部資料。器壁は薄く、外体面に綾杉文を施文する。	T.P.11 Ⅱ b
第 35 図 6	土器	第 3 段階	鍋	口縁部	15.4 —	鍋形の口縁部で、器壁の薄い資料。口縁部は内湾する。外面は指頭圧痕のためか凹凸がみられ、内面はナデ調整により平滑。	T.P.11 Ⅱ

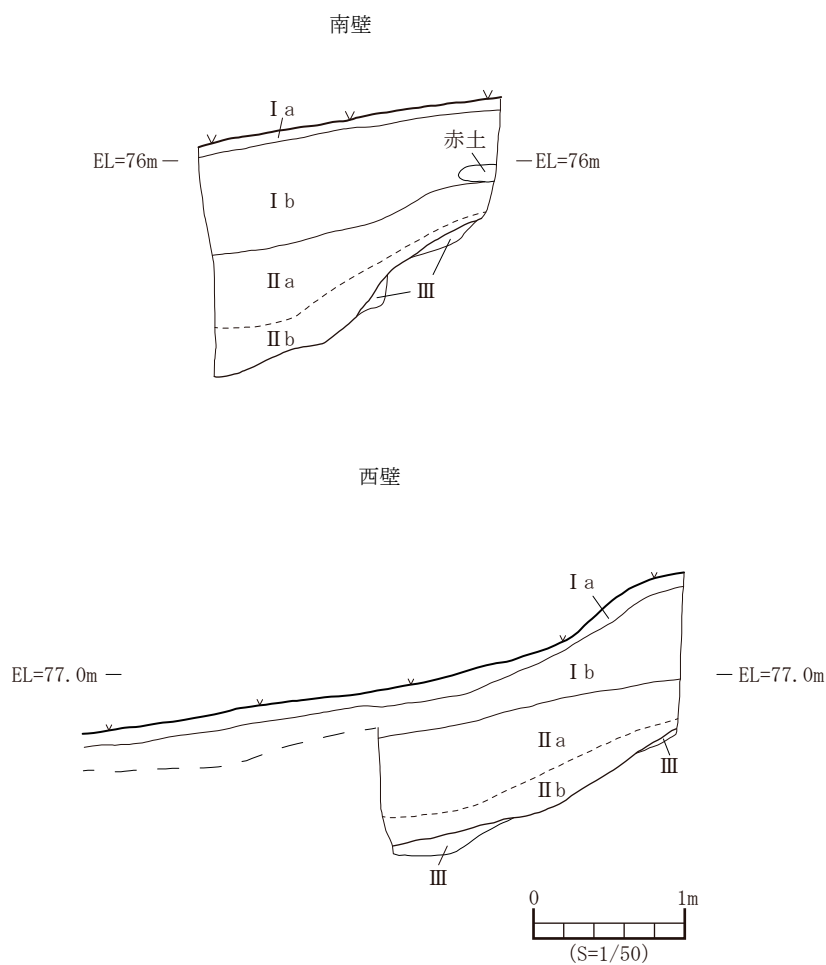
10. T. P. 16

T. P. 16 は、拝殿の南側に位置する削平地で、標高は約 72 m である。遺物包含層は上部で攪乱を受けているが、最下部は未攪乱で、グスク時代の包含層が残存している可能性がある。遺構は検出されていない。

(1). 層序

南壁・西壁

- I a 層 表土。粘質土壌。黒褐色 (10YR2/3)。
- I b 層 造成土。部分的に赤褐色土が混入する。
- II a 層 礫混じりの土壌。1 ～ 1.5 cm ほどの粘板岩を多く含む。ガラス片などの近現代遺物が僅かに混入するが、青磁やグスク土器などのグスク時代の遺物を多く含む。
- II b 層 土壌の基質は II a 層と同様であるが、II a 層と比べて土が固く締まっている。本層の最下部にはグスク時代の遺物のみが出土する。
- III 層 地山。基盤の粘板岩が露出する。



第 36 図 T. P. 16 南壁及び西壁面図

(2). 出土遺物

T.P.16 から出土した遺物は、青磁と青花が主体を占め、グスク土器、近代陶磁器、沖縄産陶器などが少量出土した。遺物は、ほとんどがⅡ層からの出土である。

内訳は第18表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第19表に示す。

①陶磁器

青磁

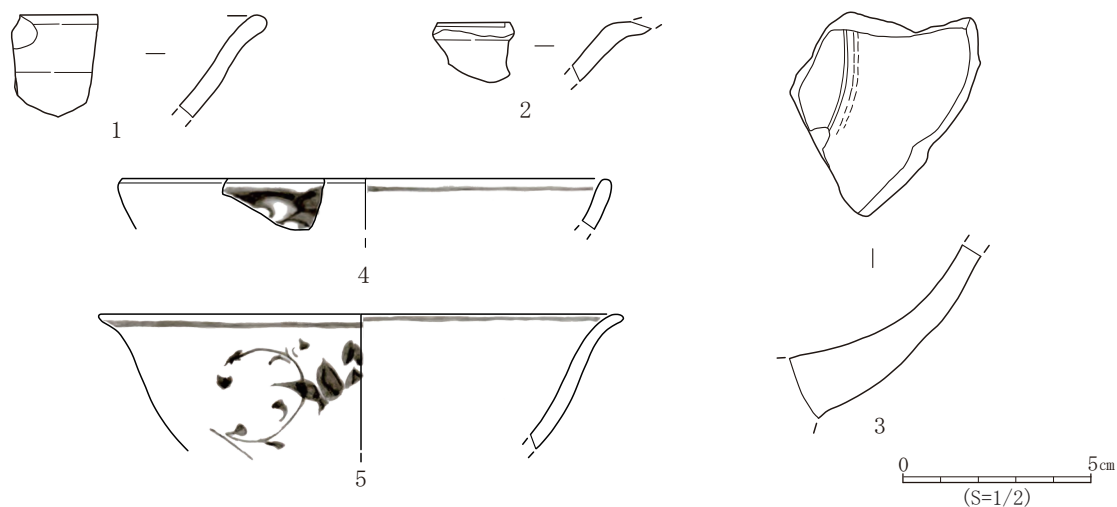
第37図1は碗の口縁部で、口縁部は外反し、無文である。同図2は皿の口縁部である。口縁部は鐔を有し、鐔先端は僅かに摘まみ上げられている。龍泉窯系Ⅲ－Ⅳ類に該当する。同図3は碗の胴部で、高台脇で破損し、内体面腰部にやや不明瞭な圈線が施される。同図1と同図3は龍泉窯系Ⅳ－Ⅴ類に該当する。同図1～3はⅡ層下面出土。

青花

第37図4と5は碗の口縁部で、いずれもⅡ層下面出土である。同図4は口縁部が直口で、外体面に文様が施される。小野分類E群に該当する。口径は13cm。同図5は口縁部が外反し、外体面に界線と唐草文が施され、口縁部内体面には界線が描かれる。小野分類B－C群に該当する。口径は14cm。

第18表 T.P.16 出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	I 層	II 層
沖縄	グスク土器	第3段階	不明	口縁部		
				胴部		2
				底部		
中国	青磁	龍泉系 Ⅳ - Ⅴ類 無文外反	碗	口縁部		2
				胴部	1	1
				底部		
中国	青磁	龍泉系 Ⅴ - Ⅵ類 無文直口	碗	口縁部		
				胴部		6
				底部		
中国	青磁	龍泉系 Ⅲ ～Ⅳ類 口折連弁	皿	口縁部		1
				胴部		
				底部		
中国 (明代)	青花	E 群 B ～ C 群	碗	口縁部		
				胴部		2
				底部		2
中国 (清代)	青花	不明	碗	口縁部		
				胴部		1
				底部		
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿	口縁部		
				胴部		2
				底部		
沖縄	近世 - 近代 壺屋焼	無釉陶器	壺？	口縁部		
				胴部		
				底部		1
沖縄	近世 - 近代 壺屋焼	施釉陶器	碗・壺	口縁部		1
				胴部		
				底部		
沖縄	陶質土器	不明	不明	口縁部		
				胴部		1
				底部		
合計					1	22



第37図 T.P.16 出土遺物

第 19 表 T.P. 16 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 37 図 1	青磁	Ⅳ－Ⅴ類	碗	口縁部	— —	口縁部は外反し、内外体面ともに無文である。外体面に貫入がみられる。	T.P.16 Ⅱ
第 37 図 2	青磁	Ⅲ－Ⅳ類	皿	口縁部	— —	口縁部は鐙を有し、鐙先端を若干摘まみ上げている。内外体面ともに無文である。	T.P.16 Ⅱ
第 37 図 3	青磁	Ⅳ－Ⅴ類	碗	胴部	— —	高台脇で破損している資料。内体面腰部にやや不明瞭な圈線を施す。	T.P.16 Ⅱ
第 37 図 4	青花	E 群	碗	口縁部	13 —	口縁部が直口の碗。外体面に文様が施され、口縁部内体面には界線が描かれる。呉須の発色は良い。	T.P.16 Ⅱ
第 37 図 5	青花	B－C 群	碗	口縁部	14 —	口縁部が外反する碗。外体面に界線と唐草文が施され、口縁部内体面には界線が描かれる。呉須の発色は良い。	T.P.16 Ⅱ

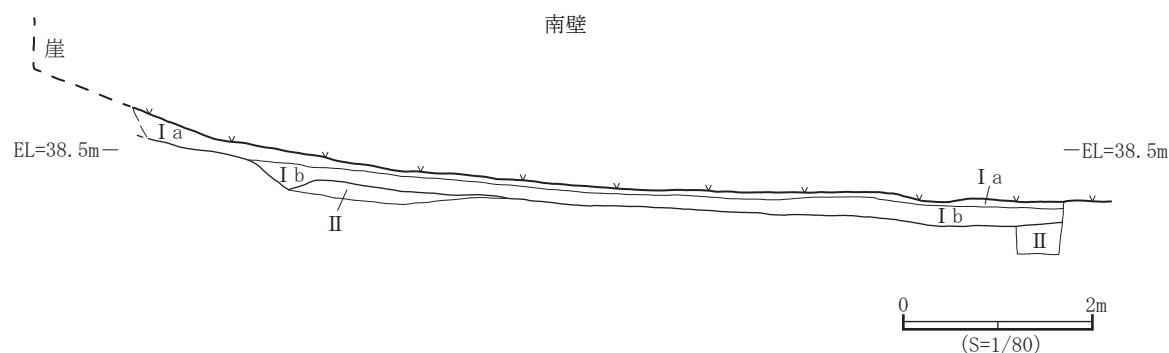
11. T.P. 17

T.P. 17 は、イジグチ屋から、さらに西側に下がる削平地である。現在の大東区住宅地に向かって続くかつての里道沿いに位置する。標高は約 38 m である。遺物包含層は攪乱を受けており、遺構は検出されていない。

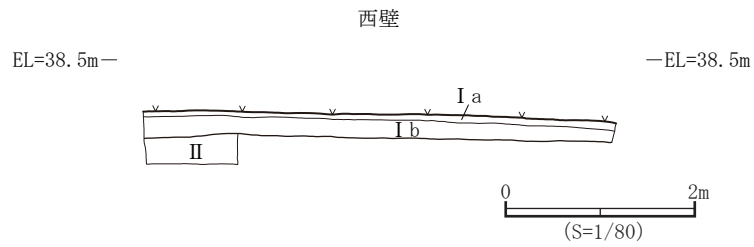
(1). 層序

南壁・西壁

- I a 層 表土。腐葉土で、土の締まりは悪く脆い。暗褐色（10YR3/3）。
- I b 層 客土。礫混じりの粘質土壌。土の締まりは良い。金属のボルトや鉄筋などが混入するが、青磁などを僅かに含む。褐色（7.5YR4/4）。
- Ⅱ 層 地山。礫混じりの粘質土壌。1 ～ 10 cm ほどの礫を多く含む。土の締まりは良い。暗褐色（7.5YR5/6）。



第 38 図 T.P. 17 南壁面図



第 39 図 T.P. 17 西壁面図

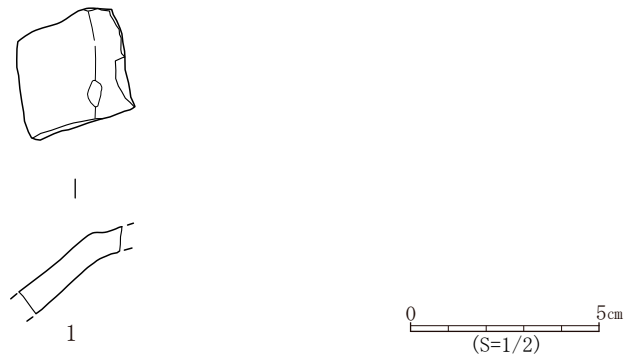
(2). 出土遺物

T.P. 17 から出土した遺物は、青磁盤の胴部 1 点と沖縄産施釉陶器の胴部 3 点のみである。全て I 層からの出土である。青磁 1 点のみ図化を行った。図化した資料の観察は第 20 表に示す。

①陶磁器

青磁

第 40 図は青磁盤の胴部である。口縁部が欠けているが、口縁部は鐳を有する器形になると推測される。鐳上面は若干くぼむ。I b 層出土。



第 40 図 T.P. 17 出土遺物

第 20 表 T.P. 17 出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 40 図	青磁	鐳縁	盤	胴部	— —	口縁部を欠損するが、口縁部は鐳を有すると思われる。 鐳上面は僅かにくぼむ。	T.P.17 I b

第 21 表 試掘抗所見一覧

T.P.	調査 年度	調査 期間	座標	年代	遺物	遺構	所見
1	H25	7/4～7/19	X=65306.000 Y=49158.000	I 層近現代、II 層～III 層グスク時代、地山	青磁、青花、褐釉陶器、ほか	ピット	包含層未撈乱で、グスク時代の遺構が残っている。
2	H25	11/11～11/21	X=65338.000 Y=49092.000	I 層～III 層近現代、地山	土器、青磁、白磁、青花、肥前陶器、ほか	ピット、炉跡	包含層は撈乱されているが、地山にグスク時代の遺構が残っている。
3	H25	未掘	X=65300.000 Y=49062.000	—	—	—	—
4	H25	12/2～12/24	X=65326.000 Y=49054.000	I～VIa層近現代、地山	青磁、褐釉陶器、ほか	土抗？、瓦溜まり	包含層は撈乱されている。
5	H25	11/11～11/14	X=65340.000 Y=49026.000	I～IIa層近現代、IIb層グスク時代、地山	青磁、白磁、青花、陶質土器、ほか	ピット	包含層は未撈乱。
6	H25	1/4～1/6	X=65216.000 Y=48886.000	I～II 層近現代、地山	—	—	遺物、遺構なし。
7	H25	1/15～1/22	X=65328.000 Y=49112.000	I 層近現代、II 層グスク時代？、地山	土器、白磁、ほか	ピット	II 層の出土遺物少ない。
8	H25	1/15～1/16	X=65350.000 Y=49070.000	I～II 層近現代、地山	カムイヤキ、青花、水晶玉、瓦質土器、ほか	ピット	包含層は撈乱されているが、地山にグスク時代の遺構が残っている。
9	H25	未掘	X=65262.000 Y=48944.000	—	—	—	—
10	H25	3/19～3/26	X=65418.000 Y=49066.000	I～II 層近現代、地山	青磁、白磁、ほか	ピット	包含層は撈乱されているが、地山にグスク時代の遺構が残っている。
11	H25	1/21～1/27	X=65324.000 Y=49152.000	I 層近現代、II 層グスク時代、地山	土器、カムイヤキ、青磁、青花、ほか	ピット	包含層は未撈乱で、地山にグスク時代の遺構が残っている。
12	欠番	—	—	—	—	—	—
13	H26	10/28	—	I 層近現代、地山	白磁、染付、ほか	—	包含層は撈乱されている。水道管あり。
14	H26	10/28	—	I 層近現代、地山	白磁、染付、ほか	—	包含層は撈乱されている。水道管あり。
15	H26	10/30～11/11	—	I 層近現代、II 層無遺物層、地山	—	—	遺物、遺構なし。
16	H26	11/11～11/19	—	I 層～IIb層(上部)近現代、IIb層(下部)グスク時代？、地山	青磁、青花、ほか	—	グスク時代の層が残っている可能性がある。
17	H26	11/20～11/28	—	I 層近現代、地山	青磁、沖縄産陶器	—	包含層は撈乱されている。
18	H26	12/1～12/5	—	I 層近現代、地山	—	—	遺物、遺構なし。

第 22 表 遺構計測表

検出地点	ビット番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
T.P.1	No. 1	18 (推定)	16	—
	No. 2	19	16.5	—
	No. 3	18	17	—
	No. 4	18	17	—
	No. 5	30	28	—
	No. 6	22	21.5 (推定)	—
	No. 7	測定不可	測定不可	—
	No. 8	17	16	—
	No. 9	60.4	54.1	16
	No. 10	11 (推定)	10	—
	No. 11	20	16	—
	No. 12	20	17.5	—
	No. 13	39 (推定)	27.5 (推定)	—
	No. 14	30.5	29	—
	No. 15	19	16	—
	No. 16	21	20	—
	No. 17	測定不可	29	—
	No. 18	20	19	—
	No. 19	20	測定不可	—
	No. 20	20.5	18	—
	No. 21	23.5	23	—
	No. 22	26	24.5	—
	No. 23	28	23	—
	No. 24	33	31	—
T.P.2	No. 1	40	38 (推定)	—
	No. 2	測定不可	16 (推定)	—
	No. 3	35	測定不可	—
	No. 4	26	24	—
	No. 5	68	66	—
	No. 6	30	測定不可	—
	No. 7	20	11	—
	No. 8	24	20	—
	No. 9	18	14	—
	No. 10	23	21	—
	No. 11	10	10	—
	No. 12	11	10	—
	No. 13	72	71.5	29
	炉跡	111	99	45

検出地点	ビット番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深度 (cm)
T.P.4	土坑？小	測定不可	42	—
	土坑？大	測定不可	測定不可	—
	瓦溜まり	86	50	—
T.P.5	土坑？	107	87	—
T.P.7	No. 1	17	16	—
	No. 2	36	36	—
	No. 3	39	36	—
	No. 4	20	13	—
	No. 5	15	9	—
	No. 6	14	11	—
	No. 7	15	14	—
	No. 8	測定不可	18	—
	No. 9	測定不可	40	—
T.P.8	No. 1	94	78	—
	No. 2	28 (推定)	22	—
	No. 3	42 (推定)	30	—
	No. 4	9	8 (推定)	—
	No. 5	45	測定不可	—
	No. 6	測定不可	16	—
T.P.10	No. 1	30	25	40
T.P.11	No. 1	116	測定不可	—
	No. 2	18	測定不可	—
	No. 3	測定不可	28	—
	No. 4	13	10	—
	No. 5	18	16	—
	No. 6	23	14	—
	No. 7	16	測定不可	—
	No. 8	32	測定不可	—
	No. 9	14	14	—
	No. 10	38 (推定)	34	—
	No. 11	72	64 (推定)	—
	No. 12	16	16	—

第2節 桜施肥箇所出土遺物

平成25（2013）年度に、土壌改良工事で名護城の桜に施肥を行う事業が持ち上がった。その事業に伴い植樹されている桜の周辺に掘られた直径約30cm、深度約80cmの小穴において遺物の有無確認を行った。その結果、547箇所のうち75箇所の施肥箇所において遺物を回収した。

(1) 出土遺物

施肥箇所から出土した遺物は、ほとんどが近世から現代の遺物である。人工遺物では沖縄産陶器が最も多く得られている。次いで赤瓦片や近代から現代の本土産陶磁器が多く得られている。

青磁や白磁、中国産褐釉陶器などのグスク時代の遺物は少数出土しているが、なかには沖縄産陶器や赤瓦と混在して得られた資料もある。直径30cmの小穴からの遺物回収作業であったため、層位的に遺物を回収することが困難であった。

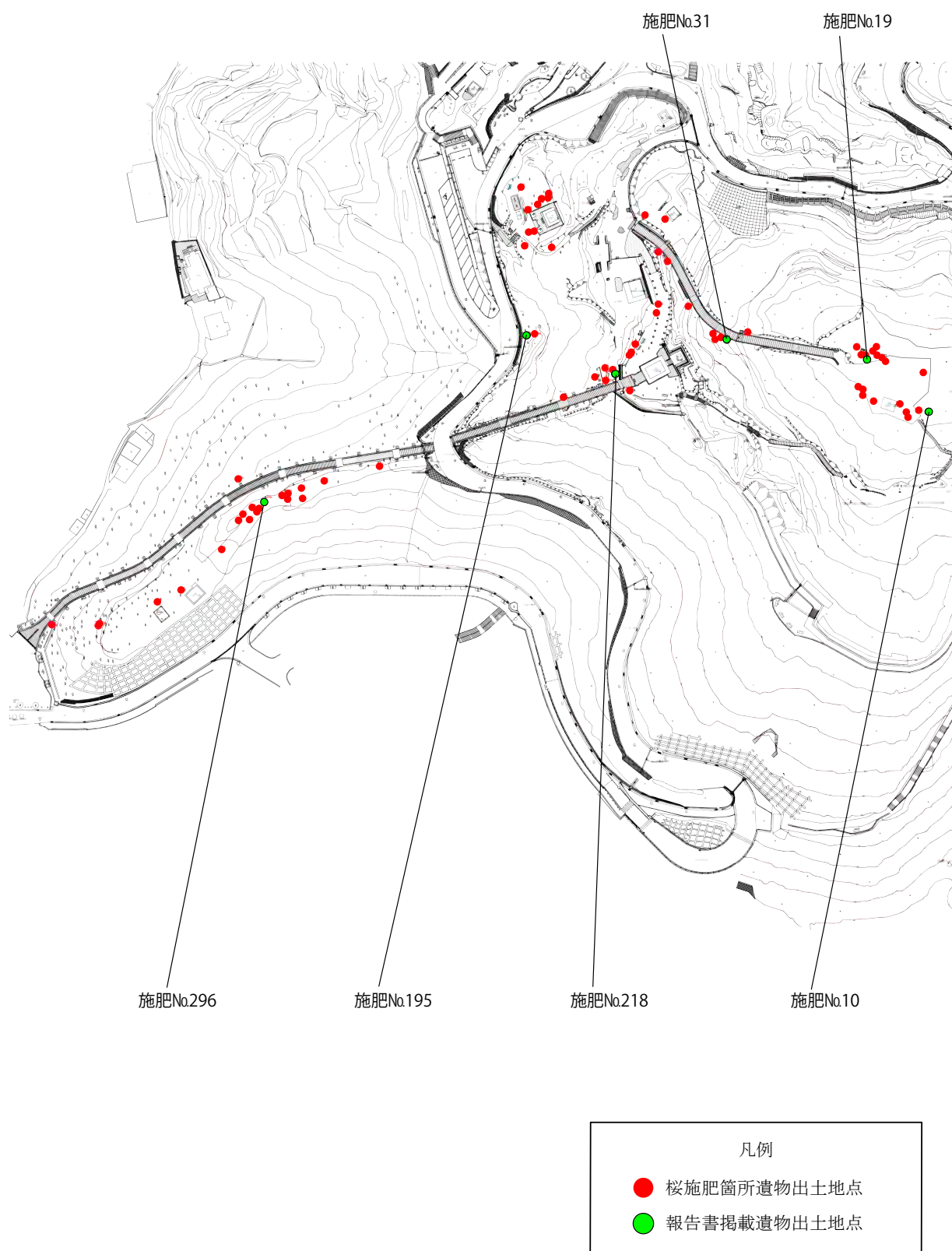
内訳は第23表に示すとおりである。以下に図化した資料の概要を述べる。個々の資料の観察は第24表に示す。



写真3 桜施肥箇所掘削状況

第23表 桜施肥箇所出土遺物一覧

産地	種別	分類	器種	部位	個数
中国	青磁	龍泉系 Ⅵ類 細蓮弁文	碗	口縁部	1
				胴部	
				底部	
中国	青磁	不明	酒会壺	胴部	1
中国	青磁	不明	不明	胴部	6
中国 (明代)	白磁	A 口禿	碗	口縁部	1
				胴部	
				底部	
中国 (明代)	白磁	不明	碗	口縁部	1
				胴部	1
				底部	
中国	褐釉陶器	不明	壺？	口縁部	1
				胴部	2
				底部	
タイ	褐釉陶器	不明	壺	口縁部	
				胴部	1
				底部	
不明	陶器	不明	瓶 不明	底部	1
				胴部	2
				口縁部	
中国 (清代)	青花	不明	碗	胴部	
				底部	1
				口縁部	
日本	肥前 染付	不明	碗	胴部	
				底部	1
				口縁部	
日本	近代陶磁器	不明	碗・皿ほか	口縁部	4
				胴部	2
				底部	2
沖縄	近世－近代 壺屋焼	無釉陶器	壺？	口縁部	
				胴部	1
				底部	
沖縄	近世－近代 壺屋焼	無釉陶器	鉢・甕	口縁部	1
				胴部	6
				底部	
沖縄	近世－近代 壺屋焼	施釉陶器	碗・壺ほか	口縁部	3
				胴部	8
				底部	4
沖縄	陶質土器	不明	不明	口縁部	
				胴部	1
				底部	1
日本	瀬戸美濃 現代陶磁	不明	湯呑 碗 香炉 不明		1
					1
					1
				胴部	1
不明	ベストソーダ その他	ジュース瓶 ジュース瓶	207ml －	底部	1
				胴部	1
沖縄	赤瓦	平瓦 丸瓦	平瓦 丸瓦	体部	13
				玉縁部	1
沖縄	獣骨 貝	不明 不明 不明	－ － －	－	6
				－	71
				合計	150



第 41 図 桜施肥箇所の位置図

①陶磁器

青磁

第 42 図 1 は酒会壺の胴部である。外体面にやや不明瞭な界線とその下部に幅広の蓮弁文が施される。施肥No. 10 出土。同図 2 は碗の口縁部である。外体面に線描きによる細蓮弁文が施される。龍泉窯系 VI 類に該当する。施肥No. 218 出土。

白磁

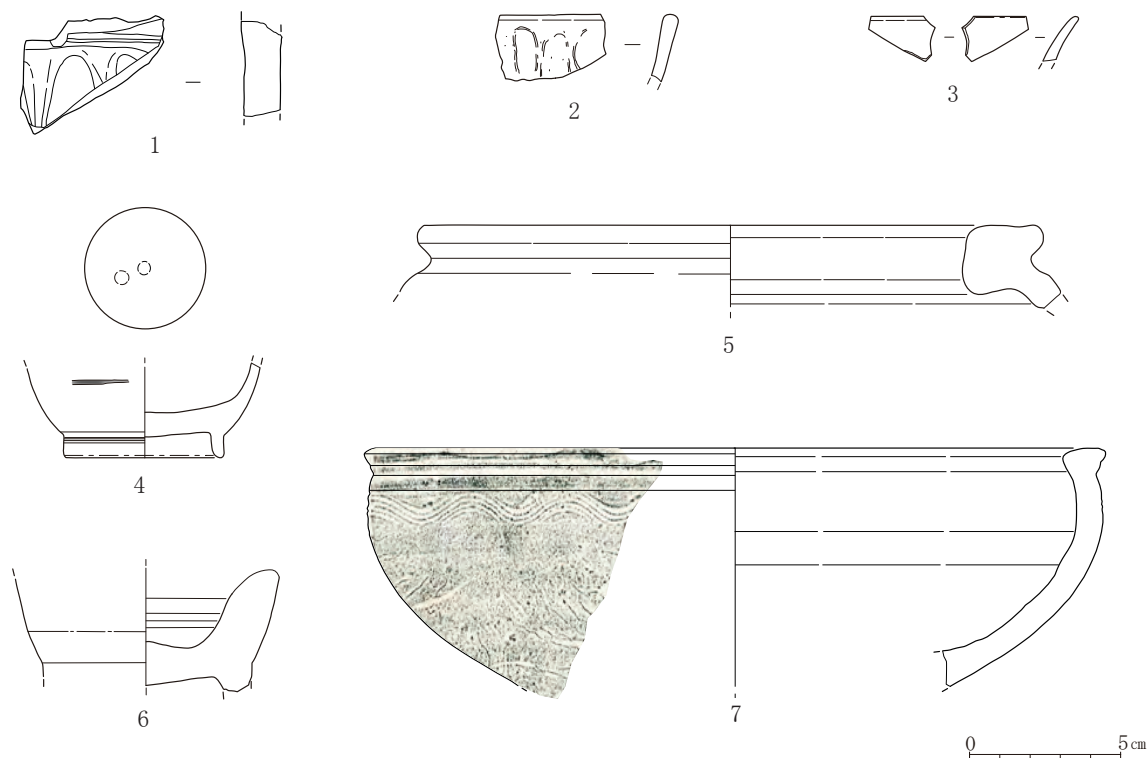
第 42 図 3 は碗の口縁部である。器壁が薄い資料で、口縁部は口禿となる。白磁分類 A 群に該当する。施肥No. 296 出土。

肥前染付

第 42 図 4 は碗の底部である。高台脇と外体面の腰部に圈線が施され、残存する内体面は露胎となっている。17 世紀中頃の資料と思われる。底径は 5.1 cm で、施肥No. 10 出土。

中国産褐釉陶器

第 42 図 5 は褐釉陶器の壺の口縁部である。口縁部断面が方形状に肥厚し、肩部で破損している。口径は 20.2 cm と大型である。施肥No. 31 出土。



第 42 図 桜施肥箇所出土遺物

不明陶器

第 42 図 6 は産地不明の瓶の底部である。高台が破損し、高台内と胴部下半に釉が施される。見込みは露胎となる。施肥 No. 19 より出土し、同箇所では他に沖縄産施釉陶器などが得られている。

沖縄産陶器

第 42 図 7 は沖縄産無釉陶器の鉢の口縁部である。いわゆる「ミジクブサー」と称されるものである。口縁部を外に摘まみ上げたような器形となり、胴部上位に波状沈線が施される。施肥 No. 195 出土。

第 24 表 桜施肥箇所出土遺物観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 42 図 1	青磁	蓮弁	酒会壺	胴部	— —	外体面にやや不明瞭な界線とその下部に幅広の蓮弁文を施す。	施肥 No. 10
第 42 図 2	青磁	Ⅵ類	碗	口縁部	— —	口縁部は直立し、外体面に線描きによる細蓮弁文を施す。内外体面に貫入が顕著で、釉薬は褐色を帯びる。	施肥 No. 218
第 42 図 3	白磁	A 群	碗	口縁部	— —	口禿碗の口縁部で、白色の釉を施釉したあと、口唇部から口縁部内面にかけて釉剥ぎがなされる。	施肥 No. 296
第 42 図 4	染付	肥前 染付	碗	底部	— 5.1	高台脇と外体面の腰部に圈線を施す。内体面は残存する範囲は全て露胎となる。	施肥 No. 10
第 42 図 5	中国産 褐釉陶器	不明	壺	口縁部	20.2 —	口径 20.2 cm の大型壺の口縁部。口縁部断面が方形に肥厚し、肩部で破損している。	施肥 No. 31
第 42 図 6	陶器	不明	瓶	底部	— —	高台が破損している瓶の底部資料。高台内と胴部下半に釉が施釉される。見込みは露胎。産地と時代は不明。	施肥 No. 19
第 42 図 7	沖縄産 無釉陶器	不明	鉢	口縁部	24.1 —	口縁部を外に摘まみ上げたような器形。胴部上位に櫛描きによる波状沈線を施す。	施肥 No. 195

第 3 節 表採資料

表採された遺物については、平成 25（2013）年度に表採された資料と、昭和 54（1979）年度から平成 8（1996）年度までの踏査や工事立会等で回収した表採等資料についても良好な資料が多いため、特徴的な遺物を掲載する。

以下に図化した資料の概要を述べるが、便宜上、表採資料は採集箇所別ではなく遺物の種類別で掲載した。個々の資料の観察は第 25 表～28 表に示す。

(1). 出土遺物

①陶磁器

青磁

第43図1は高麗期の象嵌青磁の胴部片である。器種と器形は不明。二次的火熱を受けた痕跡がみられる。

同図2は皿の底部である。外体面腰部に幅0.3～0.4cmの篋描きによる蓮弁文が施され、見込みに圈線と印花文が施される。全面に施釉がなされる。龍泉窯系V類に該当する。底径は5.8cm。

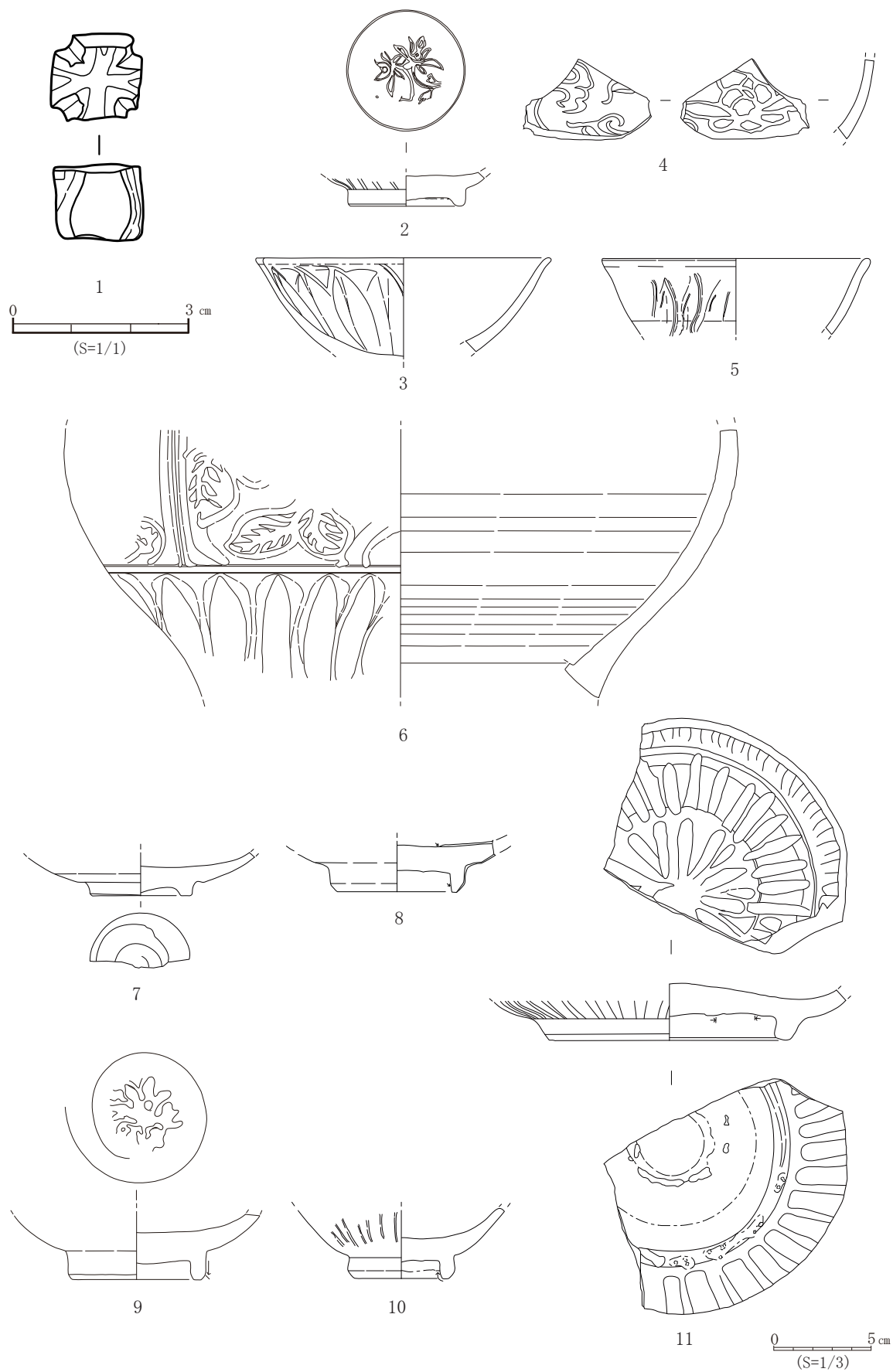
同図3は碗の口縁部である。口縁部は若干外反し、外体面に篋削りによる鎬蓮弁文が施され、鎬は明瞭である。龍泉窯系II類に該当する。口径は15.1cm。同図4は碗の胴部である。内外体面に片切り彫りによる牡丹唐草文が施される。龍泉窯系V類に該当する。同図5は碗の口縁部である。外体面に篋描きによる蓮弁文が施される。龍泉窯系IV類に該当する。口径は13.8cm。

同図6は酒会壺の胴部である。外体面胴部に片切り彫りによる牡丹唐草文が施され、腰部に2条の界線とその下部に弁先の尖る蓮弁文がみられる。クバヌンチャ周辺表採。

同図7～9は碗の底部である。同図7は、高台内の削りは浅い。畳付が平坦であるが、畳付の幅の差が大きい資料である。釉薬は見込みのみに施され、胎土には黒色粒を含んでいる。磁灶窯系の資料と考えられる。底径は5.7cm。同図8は、見込みに印花文が施され、外体面から高台にかけて篋削りがなされ畳付は細くなる。釉薬は見込み外周と高台外側から畳付までで、高台内と見込み中央部は露胎となる。龍泉窯系V類に該当する。底径は6.1cm。同図9は見込みに印花文が施される。釉薬は畳付けまでとなり、高台内は露胎となる。龍泉窯系V類に該当する。底径は6.6cm。

同図10は碗の底部である。外体面に線描きによる細蓮弁文が施される。釉薬は畳付までとなり、高台内は露胎となる。龍泉窯系VI類に該当する。底径は4.8cm。

同図11は盤の底部である。外体面腰部に幅0.4～0.5cmの篋描きによる蓮弁文が施される。見込みの腰部には幅0.6～0.7cmのやや幅広の篋描きによる蓮弁文が施され、さらに内側に圈線が施される。見込み中央にも幅0.6～0.7cmのやや幅広の篋描きによる蓮弁文が施される。釉薬は全面施釉後、高台内を蛇の目状に剥ぎ取っている。底径は12.4cmで、堀切2の周辺表採。



第 43 图 表探 (青磁)

第 25 表 表採（青磁）観察一覧

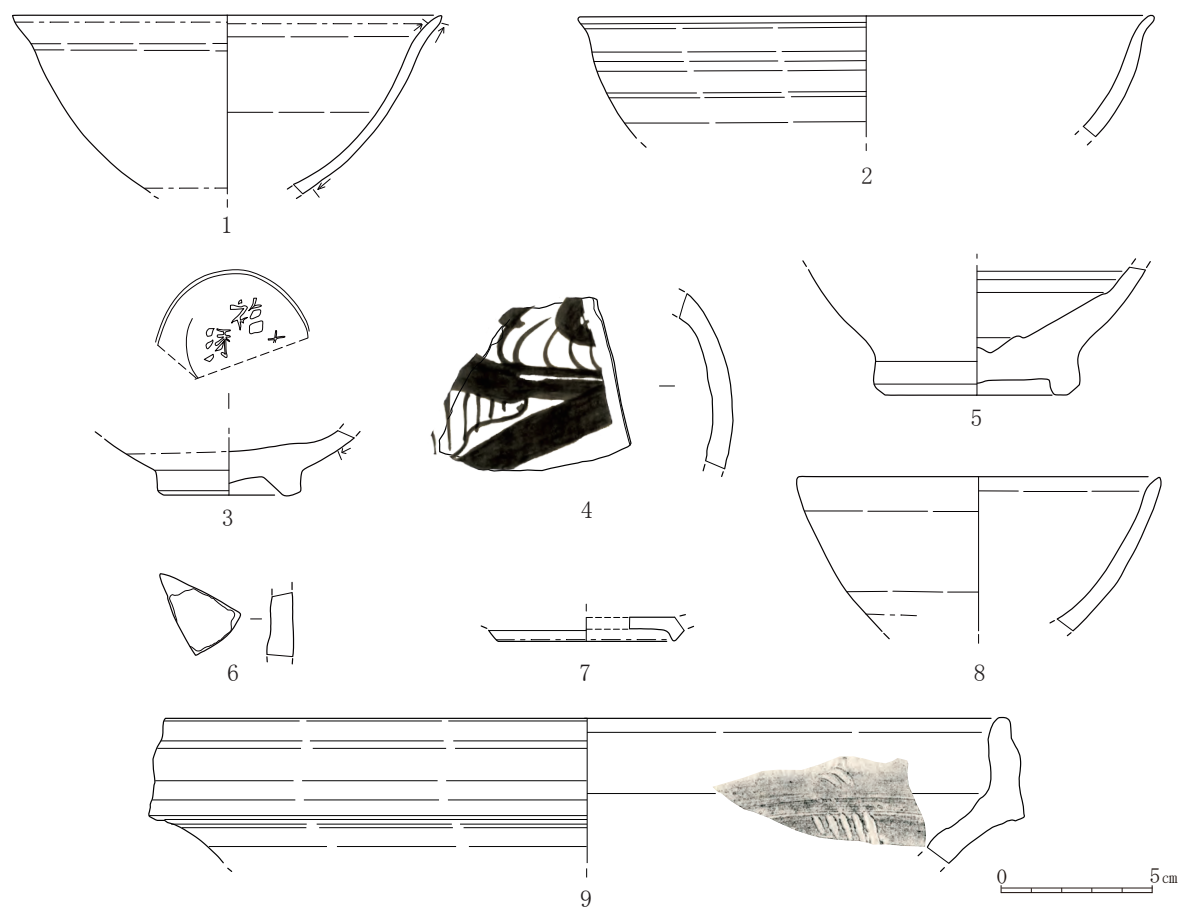
挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 43 図 1	高麗期 青磁	不明	不明	胴部	— —	高麗期の象嵌青磁の小片。器種及び器形は不明。二次的火熱を受けている。13 ～ 14 世紀の資料と推測される。	—
第 43 図 2	青磁	V 類 (蓮弁)	皿	底部	— 5.8	外体面腰部に幅 0.3 ～ 0.4 cm の篋描きによる蓮弁文を施す。見込みに圏線と印花文を施す。釉薬は全面施釉。	神道
第 43 図 3	青磁	II 類	碗	口縁部	15.1 —	口縁部は若干外反し、外体面に篋削りによる鎬蓮弁文を施す。鎬は明瞭である。	—
第 43 図 4	青磁	V 類	碗	胴部	— —	内外体面に片切り彫りによる牡丹唐草文を施す。厚めの釉が施釉される。	神道
第 43 図 5	青磁	IV 類	碗	口縁部	13.8 —	口縁部は外反し、外体面に篋描きによる蓮弁文を施す。内外面ともに施釉される。	—
第 43 図 6	青磁	不明	酒会壺	胴部	— —	外体面胴部に片切り彫りによる牡丹唐草文？を施し、腰部に 2 条の界線とその下部に弁先の尖る蓮弁文を施す。	クバヌシチャ 周辺
第 43 図 7	青磁	磁灶窯系	碗	底部	— 5.7	高台内の削りが浅く、畳付は平坦であるが、畳付の幅の差が大きい。釉薬は見込みのみで胎土に黒色粒を含む。	—
第 43 図 8	青磁	V 類	碗	底部	— 6.1	見込みに印花文を施す。外体面から高台にかけて篋削りがなされ畳付は細い。釉薬は見込み外周と高台外側から畳付までとなる。釉薬は厚く半透明で光沢は鈍い。	—
第 43 図 9	青磁	V 類	碗	底部	— 6.6	見込みに印花文を施す。釉薬は畳付までとなり、高台内は無釉である。	—
第 43 図 10	青磁	VI 類	碗	底部	— 4.8	外体面に線描きによる細蓮弁文を施す。釉薬は畳付までとなり、高台内は無釉である。	—
第 43 図 11	青磁	不明	盤	底部	— 12.4	外体面腰部に幅 0.4 ～ 0.5 cm の蓮弁文を施す。見込みの腰部に幅 0.6 ～ 0.7 cm の蓮弁文、さらに内側に圏線と幅 0.6 ～ 0.7 cm の蓮弁文を施す。	堀切 2 周辺

白磁

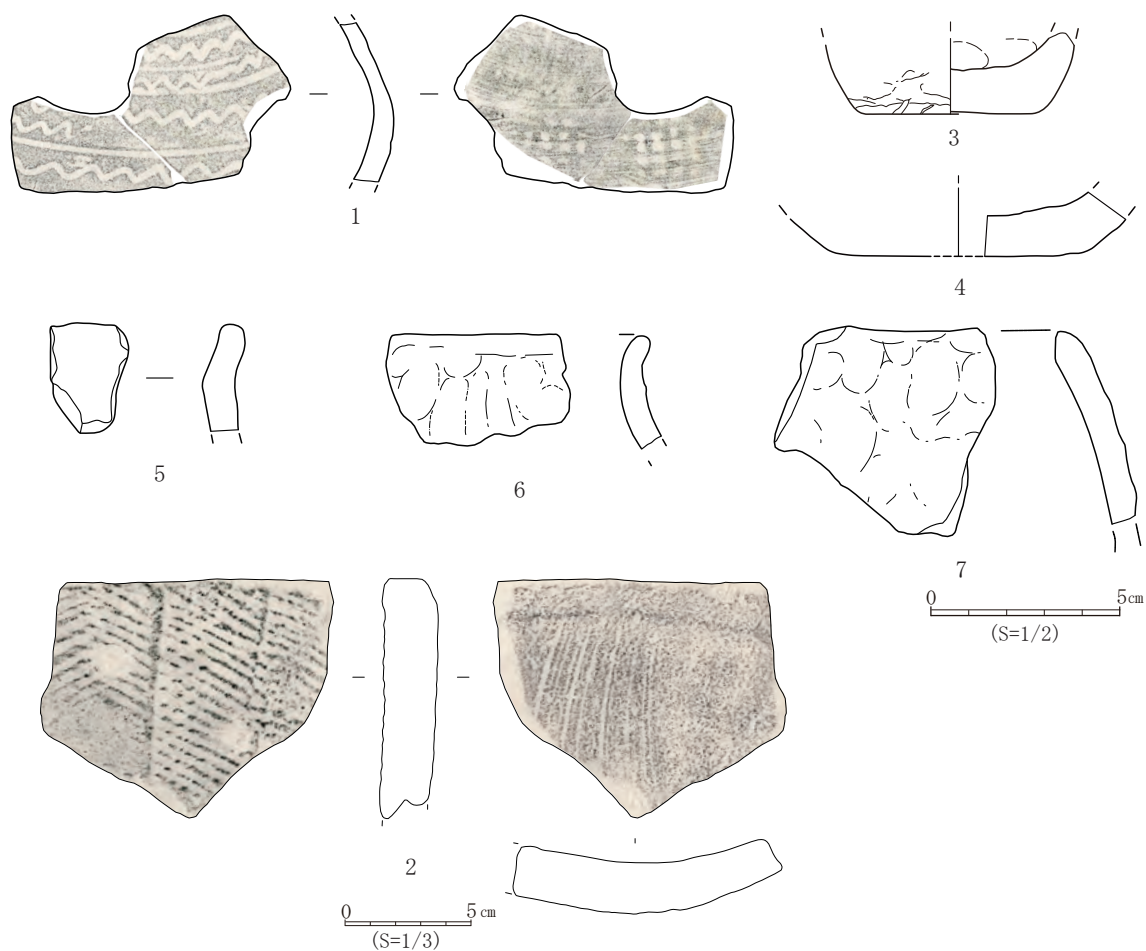
第44図1は碗の口縁部である。灰白色の釉を施釉したあと、口唇部から口縁部内面にかけて釉剥ぎをする。白磁分類A群に該当する。口径は14.2 cm。同図2は碗の口縁部である。無文で口縁部は外反する。灰白色の釉が施釉される。白磁分類C3群に該当する。口径は19 cm。同図3は碗の底部である。高台が「ハ」の字状に開く器形で、高台内中央はやや隆起する。見込みに印花文が施され、「福」と「添」の字が確認できる。高台脇から高台内にかけて露胎となる。白磁分類A群に該当する。底径は4.3 cm。同図5は高台内の削りが浅い壺の底部である。見込み中央はくぼみを有する。外体面から高台内にかけて露胎となり、内体面腰部から見込みは灰白色の釉が施される。福建産で17世紀以降の資料と推測される。底径は6 cm。

翡翠釉陶器

第44図4、6～7は翡翠釉陶器である。同図4は壺または瓶の胴部と考えられる。白化粧地に鉄絵が施されている。その上に翡翠釉が施されたと思われるが、翡翠釉は剥離している。同図6は壺の胴部片と推測され、白化粧地に翡翠釉が施される。同図7は皿の底部である。白化粧地に翡翠釉が施されているが、翡翠釉の色はやや黒色を呈する。底径は5.8 cm。



第44図 表採（白磁・翡翠釉陶器・黒釉陶器・備前陶器）



第45図 表採（カムイヤキ・瓦・土器）

黒釉陶器（天目碗）

第44図8は中国産黒釉陶器碗の口縁部から胴部下位まで残存する資料である。内体面から外体面胴部下位まで黒釉が施され、外体面腰部は露胎となる。口径は11.9 cm。

備前陶器

第44図9は備前陶器の播鉢の口縁部である。内体面に2条の櫛目とその下方に5条の櫛目が確認できる。口径は28 cm。

②カムイヤキ

第45図1はカムイヤキの壺の胴部である。外体面に波状沈線が施される。内体面には叩き調整痕が確認できる。

③高麗系瓦

第45図2は高麗系瓦の平瓦である。端部と考えられ、凸面に羽状文が認められる。胎土は灰色を帯びる。端部の長さは残存部で10.7 cm、厚みは1.2 cmを測る。クバヌシチャ周辺表採。

④土器

第 45 図 3 は貝塚時代後期土器の特徴を有する平底である。器種は不明。調整は外面が工具による横方向のナデ調整がなされる。内面は工具調整後に指ナデ調整が施されるが、指頭圧痕と工具調整痕が明瞭に残る。底径は 4.4 cm。

同図 4 ～ 7 はグスク土器である。同図 4 は平底片である。外面に刷毛目状の工具による調整がなされ、内面は筥状工具によるナデ調整が施される。底径は 6.4 cm と推測される。

同図 5 は甕形の口縁部で、口唇部が平坦に成形され口縁部は直口である。内外面とも工具によるナデ調整がなされる。同図 6 は壺形の口縁部で、口縁部は外反する。外面に指頭圧痕が明瞭に残り、内面は横方向のナデ調整がなされる。同図 7 は鉢形の口縁部で、口縁部は内湾する器形となる。外面は指頭圧痕が明瞭に残り、内面は板状の工具による横方向のナデ調整がなされる。同図 4 と同図 7 は、多孔質な器面が特徴である。

第 26 表 表採（白磁・翡翠陶器・黒釉陶器・備前陶器）観察一覧

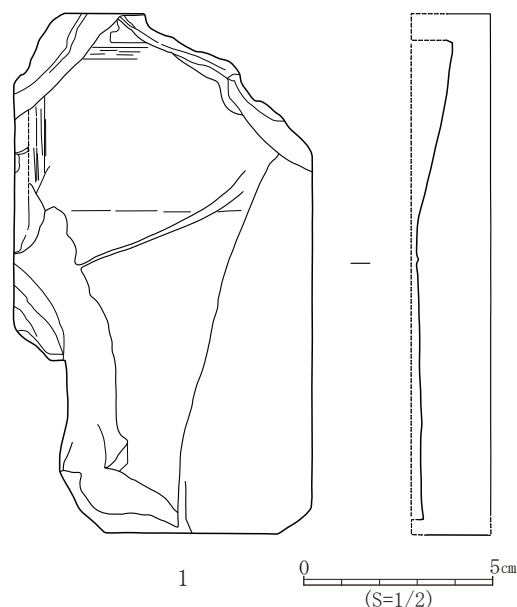
挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 44 図 1	白磁	A 群	碗	口縁部	14.2 —	口禿碗の口縁部で口縁部は外反する。灰白色の釉を施釉後、口唇部から口縁部内面にかけて釉剥ぎをする。	—
第 44 図 2	白磁	C3 群	碗	口縁部	19 —	無文外反碗の口縁部で、灰白色の釉を施釉する。内外体面に貫入がみられる。	—
第 44 図 3	白磁	A 群	碗	底部	— 4.3	高台は「ハ」の字状に開く器形。見込みに印花文が施され、「福」と「添」の文字が確認できる。高台脇から高台にかけては露胎。	—
第 44 図 4	翡翠釉陶器	磁州窯	壺 または 瓶	胴部	— —	壺か瓶の胴部片と思われる。白化粧地に鉄絵を施す。その上に翡翠釉を施したものと考えられるが、釉は剥離して残存しない。14 ～ 15 世紀の資料と考えられる。	—
第 44 図 5	白磁	福建産	壺	底部	— 6	高台内の削りが浅く、見込みはくぼんでいる。外体面腰部から高台内にかけて無釉で、内体面腰部から見込みに施釉。外体面には煤状のものが付着している。	—
第 44 図 6	翡翠釉陶器	磁州窯	壺?	胴部	— —	壺の胴部片と思われる。白化粧地に翡翠釉を施す。14 ～ 15 世紀の資料と考えられる。	—
第 44 図 7	翡翠釉陶器	磁州窯	皿	底部	— 5.8	皿の底部と思われる。白化粧地に翡翠釉を施すが、釉の色は、やや黒ずんでいる。14 ～ 15 世紀の資料と考えられる。	—
第 44 図 8	黒釉陶器 (天目碗)	不明	碗	口縁部	11.9 —	口縁部から胴部下位まで残存する資料。内体面から外体面胴部下位まで黒釉が施される。外体面腰部は無釉である。	—
第 44 図 9	備前陶器	不明	擂鉢	口縁部	28 —	備前焼の擂鉢で、内体面に 2 条の櫛目と、その下方に 5 条の櫛目が確認できる。	—

第 27 表 表採（カムイヤキ・瓦・土器）観察一覧

挿図番号	種別	分類	器種	部位	口径 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	出土地点 層
第 45 図 1	カムイヤキ	不明	壺	胴部	— —	有文の胴部資料で、外体面に波状沈線を施文する。内体面には叩き調整痕が確認できる。	—
第 45 図 2	瓦	高麗系瓦	平瓦	端部	— —	高麗系平瓦の端部。凸面に羽状文が施され、胎土は灰色。端部の長さは残存部で 10.7 cm、厚みは 1.2 cm。	クバヌンチャ 周辺
第 45 図 3	土器	後期土器	不明	底部	— 4.4	貝塚時代後期の平底。外面は工具によるナデ調整がなされる。内面は工具調整後に指ナデ調整がなされるが、指頭圧痕と工具調整痕が明瞭に残る。	—
第 45 図 4	土器	グスク土器	不明	底部	— 6.4	グスク土器の平底。調整は外面が刷毛目状の工具で調整され、内面は篋状の工具で横方向のナデ調整が施される。多孔質な胎土。	—
第 45 図 5	土器	グスク土器	甕	口縁部	— —	グスク土器の甕形の口縁部。口唇部は比較的平坦で、口縁部は直立する器形。内外面ともに工具による横方向のナデ調整が施される。	—
第 45 図 6	土器	グスク土器	壺	口縁部	— —	グスク土器の壺形の口縁部。口縁部は外反する器形。外面は指頭圧痕が明瞭に残り、内面は横方向のナデ調整が施される。	—
第 45 図 7	土器	グスク土器	鉢	口縁部	— —	グスク土器の鉢形の口縁部。口縁部は内湾する器形。外面は指頭圧痕が明瞭に残り、内面は板状工具による横方向のナデ調整が施される。多孔質な胎土。	—

⑤石製品

第 46 図は硯である。破損しているが、上下両端と左右両端に丁寧に研磨された縁辺部をもつ。墨受け部の上方縁辺の一部が残存している。陸（おか）から波止（はと）にかけて斜め方向に擦切ろうとした痕跡がみられる。

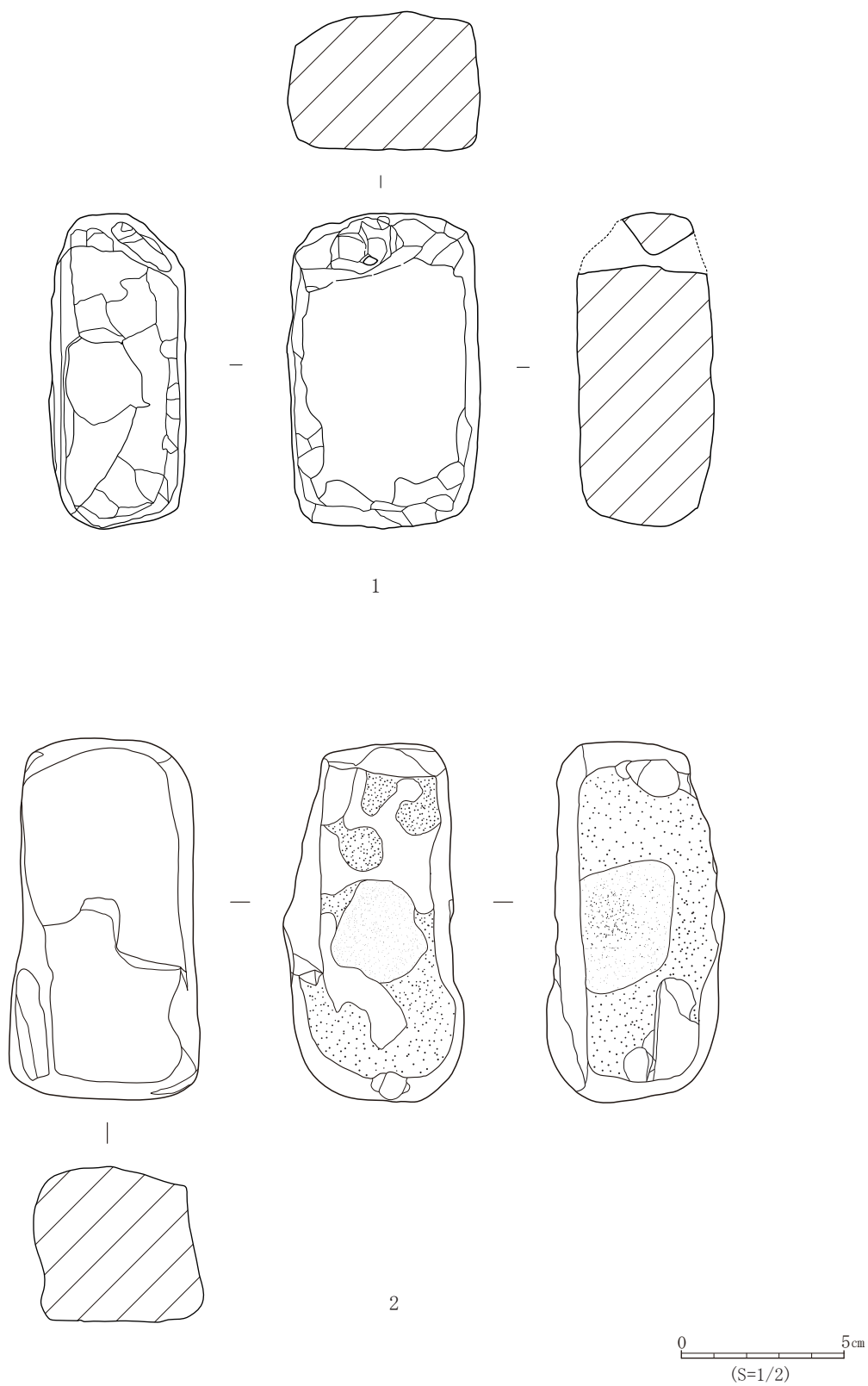


第 46 図 表採（石製品）

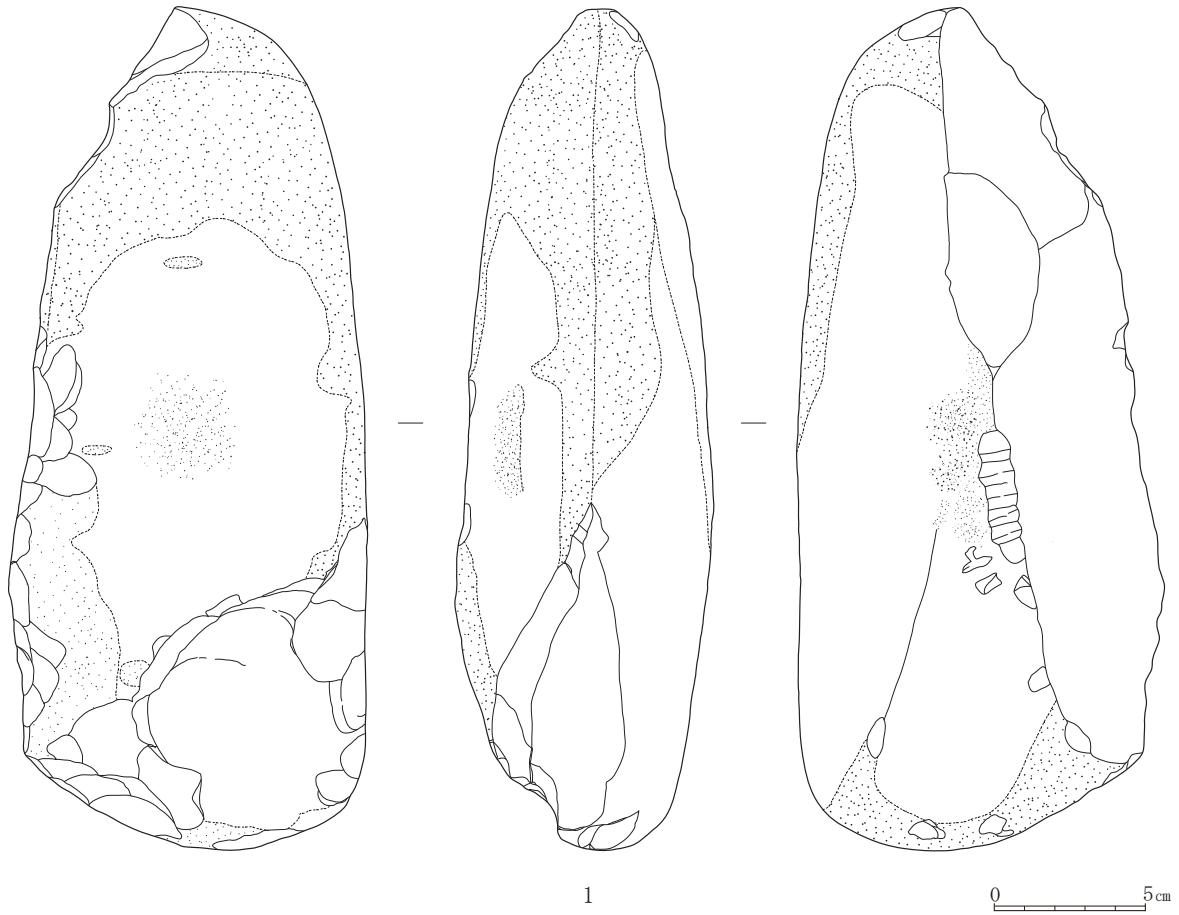
⑥石器

第 47 図 1 は錘である。平面形は隅丸長方形を呈し、上端に小孔を穿つ。表裏面と左右側面に研磨が施されているが、特に表面は丁寧な研磨が施され平滑である。同図 2 はくぼみ石である。平面形は隅丸長方形を呈し、上部と下部の縁辺に敲打痕がみられる。左右側面に研磨面がみられ、特に左側面はほぼ全面に研磨面がみられ、くぼみを有するほど使用されている。

第 48 図は重量のあるくぼみ石である。表裏面と左右側面に研磨面がみられる。表裏面はくぼみを有し、特に表面はくぼみの下位にも敲打痕が多くみられる。



第 47 図 表採 (石器 1)



第 48 図 表採（石器 2）

第 28 表 表採（石製品・石器）観察一覧

挿図番号	種別	器種	縦 (cm)	横 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	器形等の特徴	出土地点 層
第 46 図	石製品	硯	13.9	7.9	2	280.5	硯の破片。破損しているが、上下端と左右端に丁寧に研磨された縁辺部をもつ。墨受け部の上方縁辺の一部が残存している。陸（おか）から波止（はと）にかけて斜め方向に擦切ろうとした痕跡がみられる。	—
第 47 図 1	石器	錘	9.7	5.8	4.1	351.6	平面形は隅丸長方形を呈し、上端に小孔を穿つ。表裏面と左右側面に研磨を施すが、特に表面には丁寧な研磨を施し、平滑である。	—
第 47 図 2	石器	くぼみ石	11.1	5.8	4.95	573.8	平面形は隅丸長方形を呈する。上下の縁辺に敲打痕がみられる。左右側面に研磨面がみられ、特に左側面はほぼ全面に研磨面がみられ、くぼみを有するほど使用されている。	—
第 48 図	石器	くぼみ石	27.8	12	6.9	2800	重量のあるくぼみ石。表裏面と左右側面に研磨面がみられる。表裏面は、くぼみを有し、特に表面はくぼみの下位にも敲打痕が多くみられる。	—

第Ⅴ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

名護城は、沖縄県名護市の名護岳に所在する。本報告では、遺構の利用とその年代観、植物の利用状などに関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、微細物分析、炭化材同定、灰像植物の分析（植物珪酸体分析）、土壌（焼土）薄片作製鑑定、X線回折（粉末法）分析を実施する。

1. 試料

T.P.2 炉跡より採取された土壌を微細物分析、灰像分析（植物珪酸体分析）、材同定、年代測定に供した。材同定は炭化材を3点抽出した。試料を区別するため、任意にNo.1-3の番号を付した。No.1は、放射性炭素年代測定を実施した炭化材と同一個体である。No.2,3は、微細物分析で得られた中から、形状・大きさ等を考慮して選択・抽出した。薄片観察およびX線回折分析に供した試料は、焼成により褐色化したとみられる土壌（試料名：焼土）および未焼成の土壌（試料名：焼土対比試料）の2点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

(2) 微細物分析

土壌試料から炭化種実や炭化材などの遺物を可能な限り壊さず回収するために、試料を水に浸し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約30回)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別に常温乾燥後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実、葉や、主に径4mm以上の炭化材などの遺物を抽出する。

抽出された葉の同定は、現生標本を参考に実施し、個数および重量、最大径を求めて結果を一覧表で示す。炭化材は、重量および最大径を一覧表に示し、分析残渣(炭化材主体、砂礫主体)は、粒径別の重量を一覧表に示す。分析後は、抽出物および残渣等を容器に入れて返却する。

分析後は、種実等を分類群毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸処理を施し保管する。

(3) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やRichter 他(2006)を参考にする。

(4) 灰像分析(植物珪酸体分析)

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1993)。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。今回の調査では、珪化組織片の産状に注目した。

湿重約5g試料について過酸化水素水・塩酸処理などの物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

(5) 土壌（焼土）薄片作製鑑定

薄片観察は、試料を 0.03 mm の厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片の作製に際しては、まず試料をダイヤモンドカッターにより 22 × 30 × 15mm の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、# 180 ～ #800 の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ 0.1mm 以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で # 2500 の研磨剤を用いて正確に 0.03mm の厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用いて下方ポーラーおよび直交ポーラー下において観察する。

(6) X 線回折（粉末法）分析

試料は乾燥機において 60℃ 以下で 12 時間以上乾燥させた後、振動ミル（平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器）を用いて粉碎・混合し、粉末試料（200mesh, 95%pass）とする。微粉碎試料はアルミニウムホルダーに詰め、測定試料とする。作成した X 線回折測定試料について以下の条件で測定する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：C u （K α）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Recieving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2 ～ 40°

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 29 表に、暦年較正結果を第 30 表に示す。T.P.2 炉跡より抽出した炭化材の測定年代（補正年代）は、190 ± 20BP を示す。測定誤差を σ として計算させた結果は calAD1,64-1,950 である。

第29表 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質(種類)	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
TP2炉跡	炭化材(マツ属複雑管束亜属)	190± 20	-26.23±0.29	210± 20	IAAA-133696

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第30表 暦年較正結果

第00表 暦年較正結果											
試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代								相対比	Code No.
TP2 炉跡	192± 22	σ	cal AD 1,664	-	cal AD 1,680	cal BP 286	-	270	0.259	IAAA-133696	
			cal AD 1,763	-	cal AD 1,801	cal BP 187	-	149	0.532		
			cal AD 1,938	-	cal AD 1,950	cal BP 12	-	0	0.209		
		2σ	cal AD 1,659	-	cal AD 1,683	cal BP 291	-	267	0.223		
			cal AD 1,734	-	cal AD 1,806	cal BP 216	-	144	0.596		
			cal AD 1,929	-	cal AD 1,950	cal BP 21	-	0	0.181		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 微細物分析

結果を第31表に示す。土壌試料のほぼ全量(700cc/1101g)を洗い出した結果、炭化した葉の破片が13個(0.003g: 最長1.0cm)と、炭化材が44.7g(最大3.5cm)、不明炭化物が0.2g(最大0.7cm)が検出された。粒径0.5mmの篩内に残った分析残渣は、炭化材主体の微細片が18.8gと、砂礫主体が64.2gを測る。

第31表 微細物分析(土壌洗い出し・分類同定)結果

分類群	状態	T.P.2炉跡	備考
マツ属複維管束亜属 葉炭化・破片		0.003g	乾重,13個,最長1.0cm
不明炭化物		0.2g	乾重,最大0.7cm
炭化材	4mm以上	44.7g	乾重,最大3.5cm
炭化材主体	4-2mm	3.6g	乾重
	2-1mm	7.1g	乾重
	1-0.5mm	8.1g	乾重
砂礫主体	4mm以上	22.6g	乾重
	4-2mm	13.1g	乾重
	2-1mm	16.9g	乾重
	1-0.5mm	11.6g	乾重
分析量		700cc	容積
		1101g	湿重

炭化した葉は、全て常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。マツ属複維管束亜属の葉の写真を図版1に示し、形態的特徴等を以下に述べる。

・マツ属複維管束亜属(Pinus subgen. Diploxyton) マツ科

針葉は炭化しており黒色、短枝から2針葉が伸びる。葉は針形で横断面は半円形を呈し、中心部に2個の維管束がある。出土葉は全て破片で、残存長は1.0cm、最大径は0.7mmを測る。

(3) 炭化材同定

種同定結果を第32表に示す。炭化材は、全て針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

第32表 樹種同定結果

遺構	仮No.	形状	種類	備考
T.P.2 炉跡	1	板目状	マツ属複維管束亜属	年代測定試料
	2	芯持丸木(直径1.5cm)	マツ属複維管束亜属	微細物分析抽出
	3	半裁状(直径2.5cm)	マツ属複維管束亜属	微細物分析抽出

・マツ属複維管束亜属(Pinus subgen. Diploxyton) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

(4) 灰像分析（植物珪酸体分析）

結果を第33表に示す。試料からは、珪化組織片として栽培植物であるイネ属の籾（穎）に形成される穎珪酸体と葉部に形成される短細胞列が検出される。

また単体の植物珪酸体も検出される。しかし、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。検出された分類群は、イネ属、メダケ属を含むタケ亜科、ススキ属などである。この中では、イネ属とタケ亜科の産出が目立つ。これらの検出個数は出現率を求めて検討するには少なく、結果を一覧表に示すにとどめる。

(5) 土壌（焼土）薄片作製鑑定

偏光顕微鏡下において土壌の構成物や組織の観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量（＞50%）、中量（20～50%）、少量（5～20%）、微量（＜5%）およびきわめて微量（＜1%）という基準で目視の判定をした。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

1) 焼土

本試料は粗粒シルト～中礫サイズの碎屑片を中量程度含む礫・砂混じりのシルトである。碎屑片の粒径は不均質であり、淘汰は不良である。鉱物片は少量～中量程度認められ、石英、黒雲母が主体となっており、他に斜長石、白雲母、緑簾石、不透明鉱物などを伴う。岩片は少～中量程度含まれ、粘板岩が卓越し、脈石英、風化岩などが伴われる。その他の碎屑片として、植物珪酸体、植物片、火山ガラスなどを微量程度散含する。

基質は塊状を呈し、多量の細粒～中粒のシルトで埋められ、粘土を微量程度伴う。基質の構成物は、雲母鉱物、水酸化鉄などが主体となっており、石英、炭質物などを伴う。基質には、球状～不定形状を呈する径0.2～2mm程度の孔隙が微量程度散在する。肉眼的に褐色を呈する部分では、基質および岩片中の雲母鉱物や水酸化鉄の赤味が強くなっている傾向が認められる。

2) 焼土対比試料

本試料は粗粒シルト～中礫サイズの碎屑片を中量程度含む礫・砂混じりのシルトである。淘汰が悪く、碎屑片は不均質な粒径組成を示す。鉱物片は少量程度含まれ、石英、黒雲母が多く、斜長石、白雲母、ジルコン、不透明鉱物などを伴う。岩片は少量程度含まれ、粘板岩や脈石英からなり、風化岩を伴う。その他の碎屑片としては、植物珪酸体や植物片が微量含まれる。植物片は径1mm以上のやや大型のものも認められる。

基質は多量の細粒～中粒のシルトおよび微量の粘土で構成され、塊状を呈する。基質の構成物は、雲母鉱物が主体となっており、水酸化鉄、炭質物、石英などを伴う。径0.2～2mm程度の孔隙が微量散在しており、球状～不定形状の形態を示す。

第33表 灰像分析結果（植物珪酸体分析）

分 類 群	T.P.2 炉跡
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	20
メダケ属	9
タケ亜科	27
ススキ属	2
不明	30
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	16
メダケ属	7
タケ亜科	5
不明	10
合 計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	88
イネ科葉身機動細胞珪酸体	38
総検出個数	126
珪化組織片	
イネ属穎珪酸体	*
イネ属短細胞列	*

—:未検出,*:検出

(6) X線回折（粉末法）分析

試験結果の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、JCPDS (Joint Committee on Powder Diffraction Standards) のPDF (Powder Data File) をデータベースとしたX線粉末回折線解析プログラムJADEにより検索し、同定した。量比は、最強回折線の回折強度(cps)から、多量(>5000cps)、中量(2,500～5,000cps)、少量(500～2,500cps)、微量(250～500cps)、および、きわめて微量(<250cps)という基準で判定した(第34表)。

X線回折チャートは第49図に示した。図中の最上段が試料の回折図であり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。以下の文中においては、回折図の同定に使用したPDFデータの鉱物名(英名)は括弧内に記している。なお、X線粉末回折試験では黒雲母、白雲母およびイライトは類似した回折線を示し、回折強度が弱い場合、鉱物種の同定は困難であるため、雲母鉱物として一括表示している。

1) 焼土

不定方位法回折試験により、多量の石英(quartz)、少量の雲母鉱物(muscovite)およびきわめて微量の赤鉄鉱(hematite)が検出される。赤鉄鉱(Fe_2O_3)は、 2.69 \AA ($2\theta: 33.3^\circ$)に最強回折線、 2.51 \AA ($2\theta: 35.7^\circ$)に第二強線が検出されるが、回折強度はきわめて微弱である。

2) 焼土対比試料

不定方位法回折試験により、多量の石英(quartz)、少量の雲母鉱物(muscovite)、微量の7Å型ハロイサイトおよびきわめて微量の針鉄鉱(goethite)が検出される。針鉄鉱($\text{FeO} \cdot \text{OH}$)は、 4.17 \AA ($2\theta: 21.3^\circ$)において微弱でブロードな回折線を示す。

4. 考察

(1) 植物利用と年代

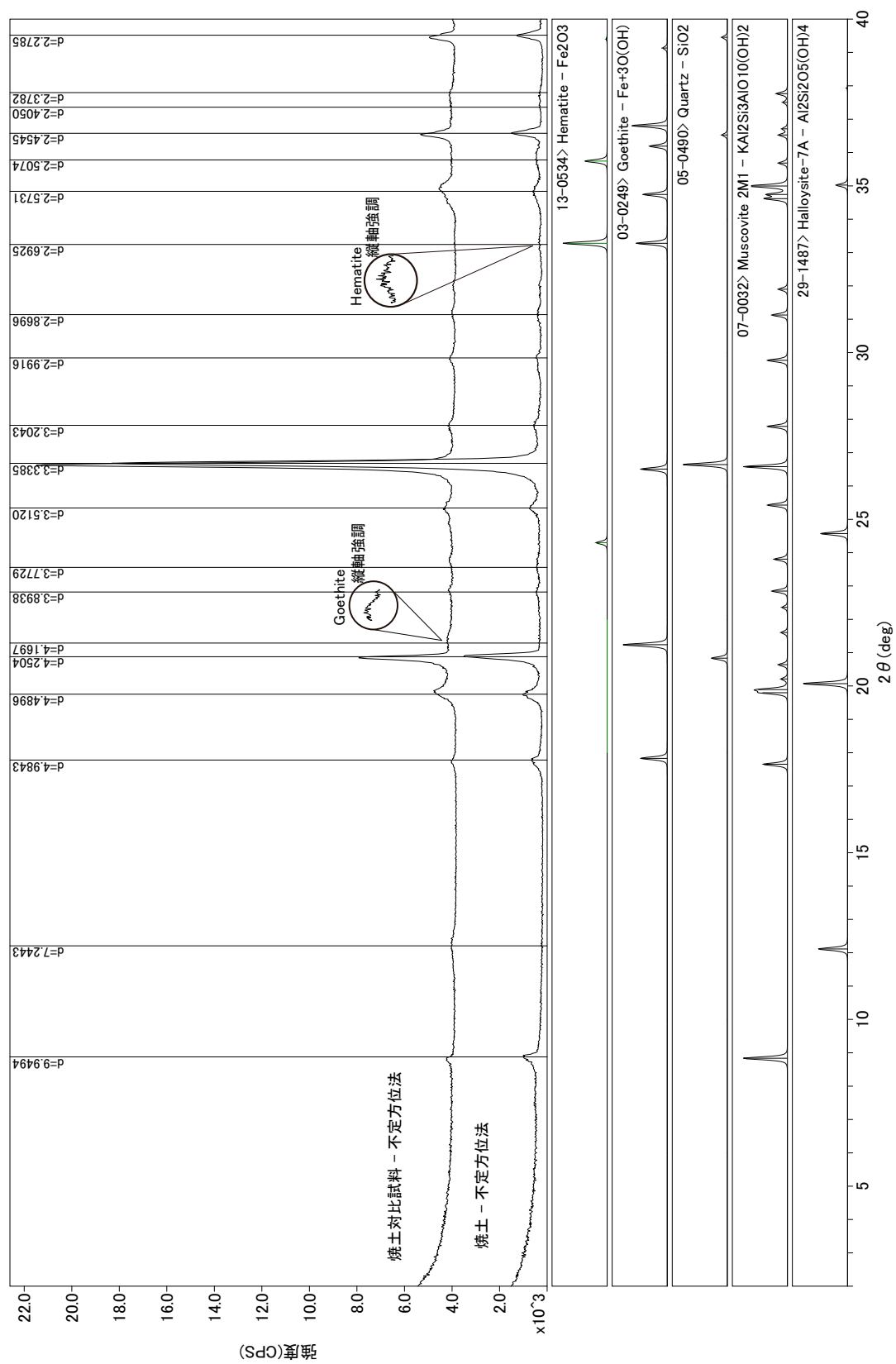
T.P.2 炉跡より採取された土壌試料を洗い出した結果、多量の炭化材と、ごく少量の炭化した葉が確認された。これらは、当時の生活に伴って排出された残滓と示唆され、何らかの人為的行為により火を受けたとみなされる。ただし、炉内で炭化したのか、別の場所で炭化した炭化材や炭化葉が廃棄されたのかについては、分析段階で判断することはできないため、発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。

炭化葉は、高木になる常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。現在の沖縄島に分布する複維管束亜属は、リュウキュウマツ(*P. luchuensis* Mayr)1種のみであることから、出土した葉はリュウキュウマツに由来する可能性が高い。当時の名護城周辺域の森林に生育していたと考

第34表 X線回折分析による検出鉱物

試料名	層位名				
	石英	7 Å型ハロイサイト	雲母鉱物	赤鉄鉱	針鉄鉱
焼土	◎		△	±	
焼土対比試料	◎	+	△		±

量比 ◎:多量(>5000cps), ○:中量(2,500-5,000cps), △:少量(500-2,500cps), +:微量(250-500cps), ±:きわめて微量(
X線チャート上で使用したpdfデータの鉱物名
石英:quartz 7Å型ハロイサイト:halloysite-7A
雲母鉱物:muscovite 赤鉄鉱:hematite 針鉄鉱:goethite



第49図 焼土および焼土対比試料のX線回折チャート

えられ、植栽されていた可能性もある。また、多量の炭化材とともに出土した状況を考え合わせると、燃料材として利用された可能性も考えられる。

T.P.2 炉跡から出土した炭化材は、芯持丸木状、半裁状、板目状などを呈する。このうち、板目状は、中空の筒状に丸くなっていることから、本来は芯持丸木であり、中央部分が抜けた状態と考えられる。これらの炭化材は、全てマツ属複維管束亜属に同定された。日本のマツ属複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの3種があるが、沖縄本島に分布するのはリュウキュウマツ1種のみであることから、今回の資料もリュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツは、二次林や海岸の崖地等に生育する常緑高木であり、とくに石灰岩地域に多く見られる。木材は軽軟で、保存性は比較的高いが、シロアリには弱いとされる。

出土した炭化材をみると、芯持丸木が直径 1.5 cm、半裁状が直径 2.5 cm である。板目状の試料も推定される直径は約 4 cm であり、いずれも小径の木材で構成されることから、枝に由来すると考えられる。これらの炭化材は、科学的なデータは出せないが、比較的保存状態が良好で、硬く焼き締まっている。炉跡からは、マツ属複維管束亜属の葉も検出されており、木材（枝）とともに葉も炭化したことが推定される。炭化材の保存状態や、燃え残り難い葉が同時に残っている状況を考慮すると、高温で蒸し焼きのような状態で炭化した可能性がある。

なお、この試料の測定年代（補正年代）は、 $190 \pm 20\text{BP}$ で近世の中葉の値である。暦年較正年代は calAD1,664-1,950 で 17 世紀中葉から 20 世紀の中葉までの年代幅があった。名護城は 14 世紀までさかのぼることが確認されており、今回の結果から近世以降も何らかの人為的行為が行われていた可能性が示唆される。

T.P.2 炉跡からはイネ属の穎や葉部に由来する珪化組織片が検出された。炉跡から検出されたことを考慮すれば、これらは燃料材のひとつとして利用され、燃焼後の灰が残留していたと考えられる。イネ属の植物体はコメの収穫後に容易に入手できることから、入手しやすい植物のひとつを利用したのであろう。なお、イネ属などイネ科植物は燃えやすいものの、燃焼時間が短く、火力も弱い。恐らく、薪炭材への焚付材として利用された可能性を考えることができる。

また単体の植物珪酸体として検出されたメダケ属を含むタケ亜科やススキ属は集落の周辺に生育する種類を多く含む。遺構に炉周辺の土壌が混入していたとすれば、これらのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。

(2) 焼土の状況と焼成温度

焼土および焼土対比試料に含まれる碎屑片は、石英、黒雲母、粘板岩、脈石英などを主体としており、共に類似した組成となっている。基質は、シルト質で、雲母鉱物を主体としており、両者共に同様な性状を示している。このような碎屑片の組成や基質の性状から、焼土および焼土対比試料は同質な土壌から構成されていると判断できる。

焼土の試料は現地での調査所見により焼成を受けていると推測されており、褐色に変色した部分が多く認められる。褐色化した部分は、鏡下において基質および岩片中の雲母鉱物、水酸化鉄が、焼土対比試料と比較して赤味を増している部分に相当する。また、褐色化した部分は焼土対比試料と比べて、炭質物や植物片が少なくなるという傾向も認められる。鏡下におけるこのような産状から焼土の試料は、焼成を受けたものと判断される。

焼土の試料における基質、岩片中の雲母鉱物、水酸化鉄の赤味が強くなる現象は、被熱によって水酸化鉄が脱水し、赤鉄鉱化したことが原因と推測される。雲母鉱物にみられる赤味の増加は、雲母鉱物の風化によって析出した水酸化鉄の色の変化と考えられる。X線回折分析からは、焼土

対比試料において水酸化鉄の一種である針鉄鉱がきわめて微量検出されている。一方の焼土試料では針鉄鉱は検出されず、赤鉄鉱の回折線が認められている。この変化は、上で述べた水酸化鉄の脱水で赤鉄鉱が生成したということを裏付けていると考えられる。

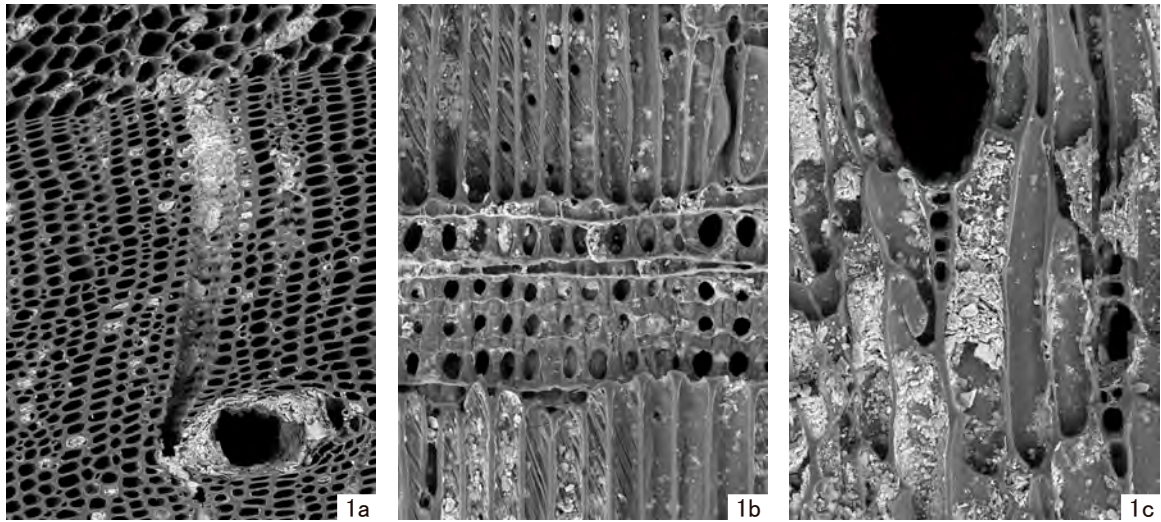
一般に水酸化鉄が焼成されると、270～325℃程度で脱水し、赤鉄鉱へ変化することが知られている（吉木，1959）。これに基づく、焼土の試料はこの程度の焼成を被ったとみられるが、赤鉄鉱の生成が非常に少ないことを考慮すると赤鉄鉱化する下限の温度付近であったと推測される。

引用文献

- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 近藤鍊三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活 (1). 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 吉木文平, 1959, 鉱物工学. 技報堂, 710p.

写真4 炭化材・植物珪酸体・葉遺体

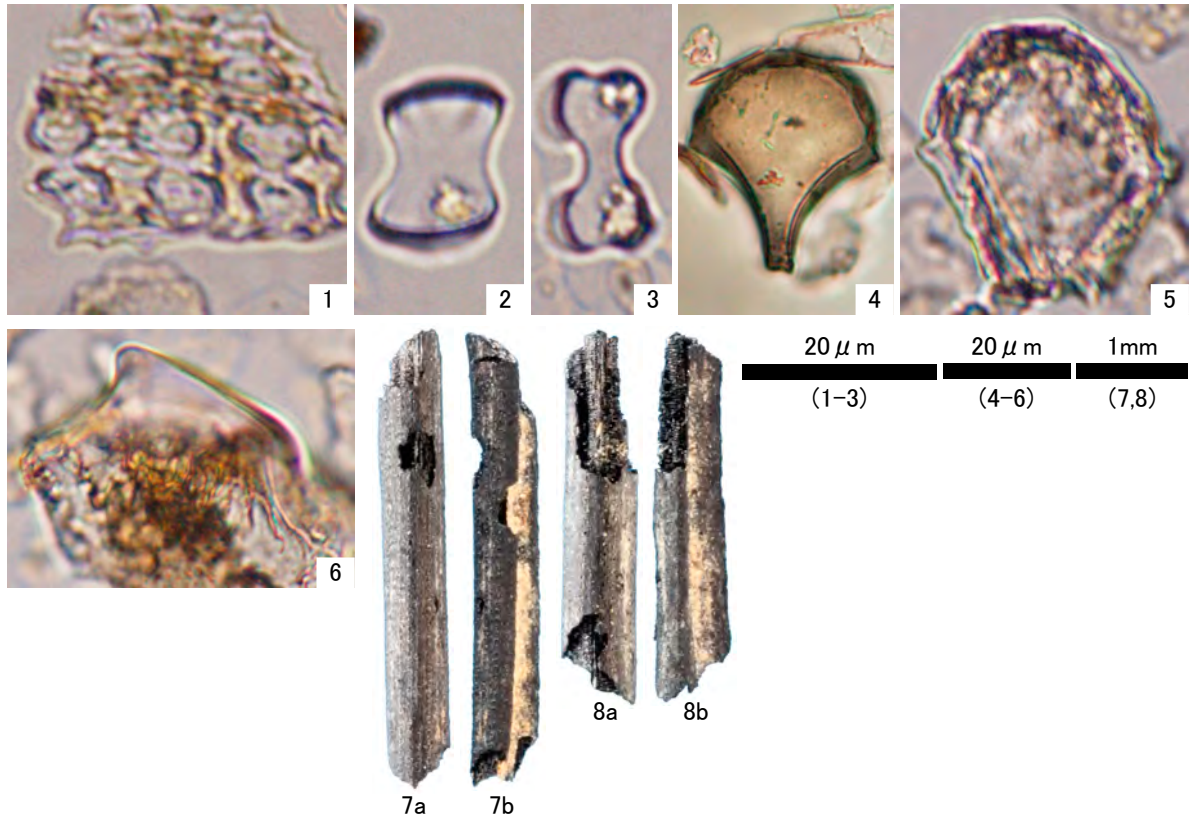
(1) 炭化材



1. マツ属複維管束亜属(T.P.2炉跡;No.1)
a:木口,b:柾目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

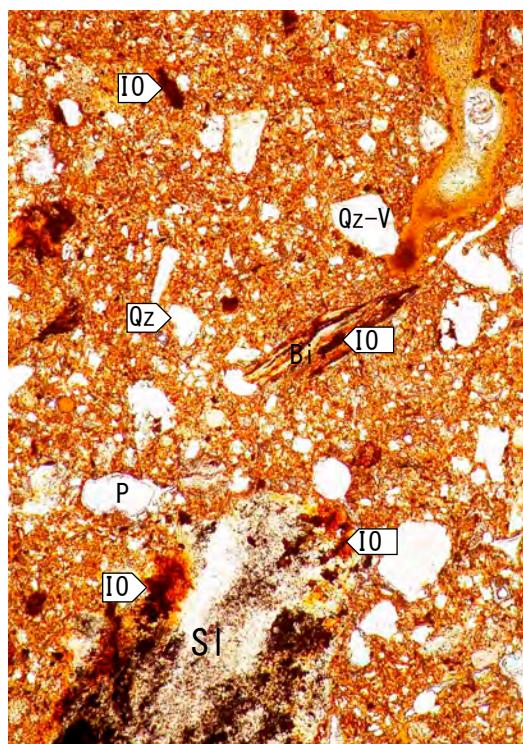
(2) 植物珪酸体・葉遺体



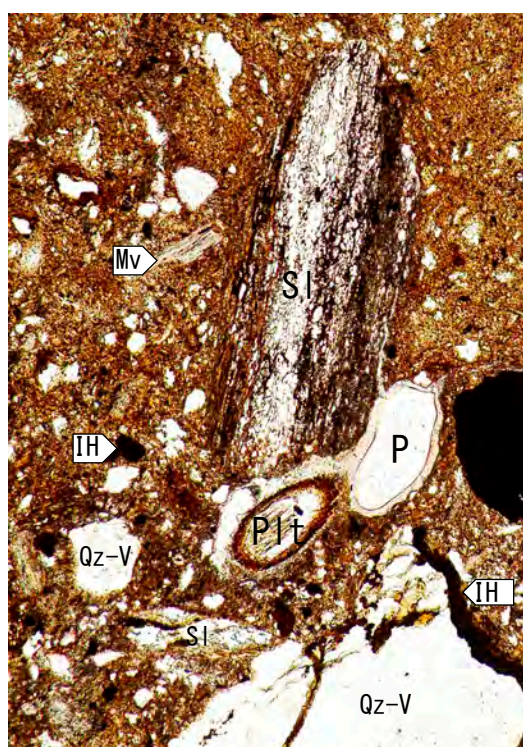
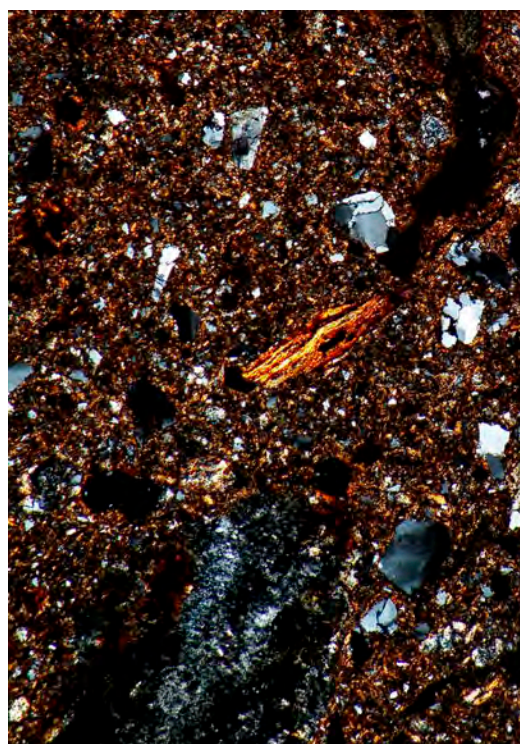
1. イネ属短細胞列(T.P.2炉跡)
2. ススキ属短細胞珪酸体(T.P.2炉跡)
3. メダケ属短細胞珪酸体(T.P.2炉跡)
4. イネ属機動細胞珪酸体(T.P.2炉跡)
5. メダケ属機動細胞珪酸体(T.P.2炉跡)
6. イネ属穎珪酸体(T.P.2炉跡)
7. マツ属複維管束亜属 葉(T.P.2炉跡)

2. メダケ属短細胞珪酸体(T.P.2炉跡)
4. イネ属機動細胞珪酸体(T.P.2炉跡)
6. イネ属穎珪酸体(T.P.2炉跡)
8. マツ属複維管束亜属 葉(T.P.2炉跡)

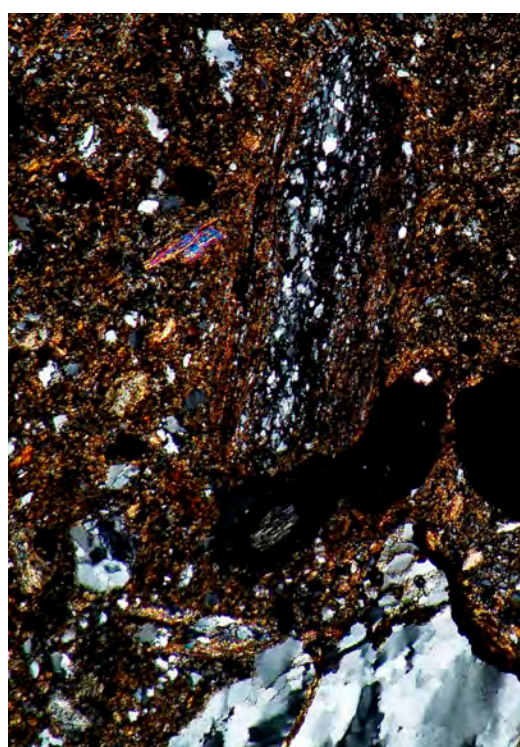
写真5 焼土薄片



1. 焼土



2. 焼土対比試料



Qz: 石英, Mv: 白雲母, Bi: 黒雲母, IO: 酸化鉄 (赤鉄鉱), IH: 水酸化鉄.
Sl: 粘板岩, Qz-V: 脈石英, Plt: 植物片, P: 孔隙.

0.5mm

第Ⅵ章 総括

前章まで平成 25 年度・26 年度範囲確認調査の概要を述べたが、以下、前章までの内容をまとめ総括としたい。

ナングシク遺跡群の堆積層は、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層に大別され、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が遺物包含層、Ⅲ層が地山に概ね比定される。Ⅰ層は礫を含む黒褐色を呈する土壌で、ごく少量であるが、グスク時代の遺物が含まれている。Ⅱ層は礫を含む砂混じりの粘質土壌で、グスク時代～近世までの遺物が含まれている。Ⅲ層は基盤の粘板岩片を含む粘質土壌で、赤褐色か明褐色を呈している。Ⅲ層を掘りこんで遺構が形成されている。

遺構は、ピットが 65 基、炉跡が 1 基、瓦溜まりが 1 基、土坑の可能性のあるものが 3 基検出された。ピットの径は長径短径ともに計測可能なものが 40 点で、平均長径が 26.4 cm、平均短径は 23 cm となる。ピットの平均深度は掘削したピットが少ないが、半截したピットのうち T.P. 1 のピット No. 9 が深度 16 cm、T.P. 2 のピット No. 13 が 29 cm、T.P. 10 のピット No. 1 が 40 cm となっている。

T.P. 2 で検出された炉跡は長径 111 cm、短径 99 cm、深度 45 cm を測り、覆土内からは青磁、青花、中国産及びタイ産褐釉陶器が得られた。覆土内から採取した炭化材を用いた放射性炭素年代測定結果は、 $190 \pm 20\text{BP}$ （補正年代）を示し近世中葉の値が得られた。暦年較正年代は calAD1,664 – 1950 で 17 世紀中葉から 20 世紀中葉までの年代幅がみられた。ナングシク遺跡群はグスク時代の遺物のみならず近世に属する遺物も出土しており、TP2 で検出された炉跡が近世以降の人為的行為の痕跡であることに矛盾はない。

炉跡より採取された土壌の微細物分析では、多量のリュウキュウマツの炭化材と少量の炭化葉が確認されており、これらが燃料材となった可能性がある。また、炭化材の保存状態が比較的良好なことと、燃え残り難い葉が同時に残存している状況から、燃料材の可能性のあるリュウキュウマツは、高温で蒸し焼きのような状態で炭化した可能性が示唆されている。炉跡がどのような用途で使用されたかは不明であるが、用途を考えるうえで貴重な手掛かりとなろう。

出土遺物は、14 世紀～17 世紀頃に生産された陶磁器類を主体に、グスク土器、カムイヤキ、沖縄産陶器、近代陶磁器などが得られた。主な外来の陶磁器では、中国産の青磁、青花、白磁、中国産及びタイ産の褐釉陶器が出土したが、なかでも青磁が圧倒的に多い。青磁は龍泉窯系のものが多数で、特にⅣ－Ⅴ類に該当する無文碗や無文皿が多く得られた。青花は、明代と清代のものが出土し、やや清代のものが多く、元代に属する青花は確認されていない。白磁はほとんどが明代に属するもので、白磁分類 A 群、C 群、D 群が出土し、なかでも D 群に該当するものが僅かに多い。

今回は集計分類を割愛しているが、表採された資料についても良好なものがあり、特徴的な資料を列举すると、高麗期の象嵌青磁小片が 1 点、クバヌシチャ周辺より酒会壺胴部および高麗系瓦が各々 1 点、黒釉陶器 1 点、翡翠釉陶器 3 点、青磁鎬連弁文碗、グスク土器、石器などが確認されている。高麗系瓦は名護市内では屋部川河口古瓦出土地、宇茂佐古島遺跡でも確認されている。本遺跡で高麗系瓦が 1 点のみ採集された理由は不明であるが、高麗系瓦の流通の見地から興味深い資料と思われる。

また、高麗系瓦や象嵌青磁などが表採された地点は、昭和 54 (1979) ～昭和 56 (1981) 年度にかけて行われた名護市遺跡分布調査で B 地点と呼ばれる箇所である。本地点は頂上の主郭部の南側斜面にあり、拝殿から頂上へ通じる神道と呼ばれる小道を含む箇所である。これまでの分布調査で最も遺物が多く得られている。本地点から多様な遺物が表採されていることから、頂上部周辺からの流れ込みを想定したが、今回の調査ではそれを検証することはできなかった。

次に、いくつかの調査地点で遺物と遺構を概観したい。T.P. 1 は青磁 (33 点) が遺物の上位を占め、特にタイ産褐釉陶器 (10 点) は全調査地点のなかでも最も多く出土した。また、ピットも全調査地点のなか最多で 24 基検出されたことから、主郭としての機能を有する構築物があったことを推測させる。

T.P. 2 は青磁 (47 点) と清代青花 (7 点)、中国産褐釉陶器 (7 点) が全調査地点のなかでも多く出土した。その他、A 群と C 群の白磁が他の調査地点より多い傾向にあった。遺構ではピットが T.P. 1 に次いで多く 13 基検出され、炉跡が 1 基検出されている。炉跡は暦年較正年代の結果からは古く捉えても 17 世紀中葉の年代観になるが、人為的活動があったことは明白であり、何らかの構築物があったと考えられる。

T.P. 7 はグスク土器、白磁 A 群皿、近世から近代の陶磁器などの遺物が総数 8 点で少ないが、遺物量に比してピットは比較的多く 9 基検出された。本地点は主郭から西側に向けて最も近い場所であり、ピットの検出数から構築物の存在が推定される。

T.P. 8 は、沖縄産陶器や近代陶磁器が遺物の主体を占めるなか、カムイヤキ、清代青花、肥前陶器、瓦質土器、水晶玉などが少数であるが出土した。ピットは 6 基検出されており、本地点が現在「ウチ神屋」と呼ばれる拝所内敷地である点と、水晶玉が出土していることから、祭祀機能を有した施設が少なくとも近世期から存在したことを裏付ける結果となろうか。

T.P. 11 は、グスク土器 (50 点) とカムイヤキ (7 点) が全ての調査地点のなかでも最も多く出土した。遺構は、ピットが T.P. 2 とほぼ同じく 12 基検出された。本地点は主郭から北側に向けて最も近い場所であり、グスク土器などの出土数とピットの検出数から、T.P. 1・T.P. 2・T.P. 7 と同様に構築物の存在が推定される。

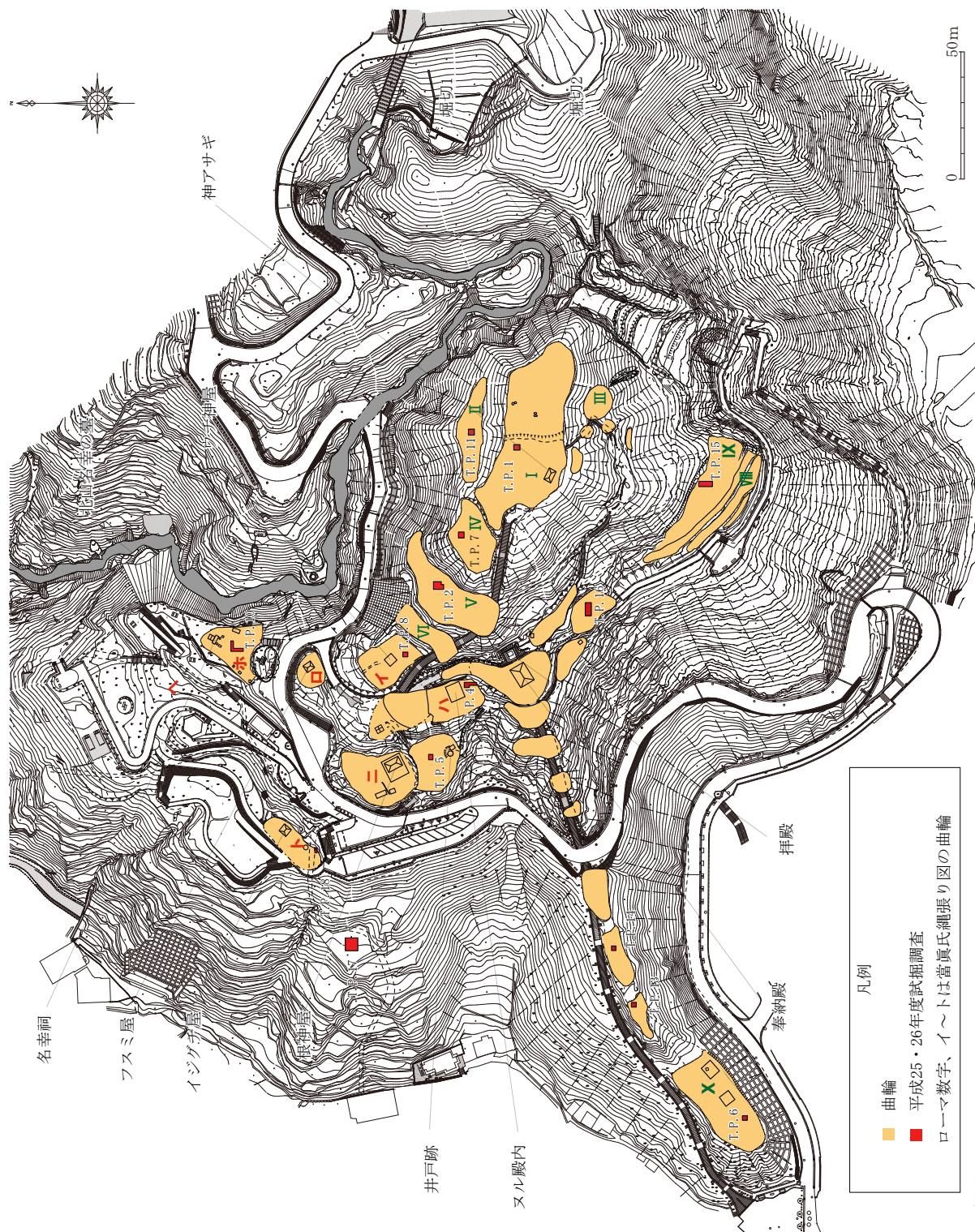
名護城の縄張りについて若干触れたい。當眞嗣一氏の名護城の縄張り調査によると、神アサギのある頂上部の削平地を主郭とし、主郭の東側に続く尾根を大小二つの堀切で遮断することで、敵の侵入を防いでいる。また、北東側から東北東側にかけては主郭の直下にあたる斜面中腹部に細長い曲輪を廻らしているほか、北西から西北西の緩やかな斜面には雛壇状に曲輪を設置することで、敵を迎撃することが可能な構造とされている。さらに、主郭以外にも現在ウチ神屋などの拝所等の施設がある数箇所を、比較的大きな曲輪と位置づけており、当時これらの曲輪に主要な施設が配置されていた可能性を指摘している。これらの曲輪と本調査地点の関連でみると、主郭とされる曲輪内に T.P. 1、主郭直下の斜面中腹部にある細長い曲輪内に T.P. 11、北西から西北西の緩やかな斜面に配置された雛壇状の曲輪内に T.P. 7・T.P. 2 が対応する。比較的大きな曲輪と位置づけた拝所等のある調査地点では、ウチ神屋内に T.P. 8、ヌル殿内範囲内に T.P. 4、名幸祠内に T.P. 10 等が対応する。主要な曲輪と、前述の拝所等のある曲輪から、グスク時代から近世を主体とする遺物とピットなどの遺構が検出されたことは、當眞氏の説を追認するものである。

今回行った調査は、これまで主に伝承と表採遺物などから名護城の年代観などを推定していたなか、包含層と遺構の存在が確認され、名護城の伝承による年代と出土遺物の年代が概ね合致したこと、また当時の人為的活動を伺うことのできる貴重な成果が得られた。

これまでの調査で曲輪の配置状況などがある程度把握できるようになったが、今後の課題として、それぞれの曲輪内で具体的にどのような防御機能が廻らされていたのかという点を確認する必要がある。名護城周辺までを含めた踏査を進めると同時に、本格的な発掘調査を行うことで、より具体的に名護城の全体像が解明されると期待する。

引用・参考文献

- ・球陽研究会（編） 1974 年 『球陽 読み下し編』 角川書店
- ・伊波普猷・東恩納寛惇・横山重（編） 1988 年 『琉球國由来記』 風土記社
- ・比嘉宇太郎 1958 年 『名護六百年史』 沖縄あき書房
- ・新城徳祐 1982 年 『沖縄の城跡』（株）緑と生活社
- ・名護市教育委員会（編） 1982 『名護市の遺跡（2）分布調査報告書』 名護市文化財調査報告書 4 名護市教育委員会
- ・名護市教育委員会（編） 2013 『市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ - 開発に伴う範囲確認調査報告書 - 』 名護市文化財調査報告書 23 名護市教育委員会
- ・名護市史編さん委員会（編） 1988 『わがまち・わがむら』 名護市史・本編 11 名護市役所
- ・名護市史編さん委員会（編） 2003 『民俗Ⅲ 民俗地図』 名護市史・本編 9 名護市役所
- ・名護市教育委員会（編） 2003 『名護市の自然 - 名護市動植物総合調査報告書 1988 ～ 2002 - 』 名護市天然記念物調査シリーズ第 5 集 名護市教育委員会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2013 『首里城跡』 - 淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書 - 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 68 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・瀬戸哲也 2004 「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化考える』世界遺産国際シンポジウム < 東アジアの城郭遺跡を比較して > の記録 今帰仁村教育委員会
- ・瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究 - 14 ～ 16 世紀を中心に - 』『中世窯業の様相～生産技術の展開と編年～』補遺編 シンポジウム実行委員会
- ・具志堅亮 2014 「グスク土器の変遷」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房
- ・森田勉 1982 「14 ～ 15 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁器研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- ・多和田真淳 1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
- ・名護グスク 「名護城遺跡を視察」 - 沖縄考古学会メンバー - 琉球新報 1990 年 1 月 23 日
- ・名護市教育委員会（編） 1992 『宇茂佐古島遺跡』 名護市文化財調査報告 - 10 名護市教育委員会
- ・名護市教育委員会（編） 1999 『宇茂佐古島遺跡』 名護市文化財調査報告書 - 13 名護市教育委員会
- ・當眞嗣一 1993 「グスクの縄張りについて（上）」『沖縄県立博物館紀要』第 18 号 沖縄県立博物館



第50図 名護城の縄張り図



T.P. 1 北壁面



T.P. 1 南壁面



T.P. 1 東壁面



T.P. 2 東壁面

図版 1 壁面 (1)



T. P. 2 南壁面



T. P. 4 南壁面



T. P. 4 拡張部西壁面



T. P. 5 北壁面



T. P. 5 東壁面



T. P. 6 東壁面



T. P. 6 南壁面

図版 3 壁面 (3)



T. P. 7 北壁面



T. P. 7 東壁面



T. P. 8 北壁面



T. P. 8 東壁面

図版 4 壁面 (4)



T. P. 10 北壁面



T. P. 10 西壁面



T. P. 11 北壁面



T. P. 11 東壁面

図版 5 壁面 (5)



T. P. 16 南壁面



T. P. 16 西壁面

图版 6 壁面 (6)



T. P. 17 南壁面 1



T. P. 17 南壁面 2



T. P. 17 西壁面 1



T. P. 17 西壁面 2

图版 7 壁面 (7)



T.P.1 遺構検出状況



T.P.1 ピットNo.9 半截状況

図版8 遺構(1)



T. P. 2 遺構検出状況



T. P. 2 炉跡半截状況

図版 9 遺構 (2)



T. P. 2 ピットNo. 13 検出状況



T. P. 4 遺構検出状況



T. P. 5 遺構検出状況



T. P. 7 遺構検出状況

図版 11 遺構 (4)



T. P. 8 遺構検出状況



T. P. 8 ピットNo. 1 半截状況

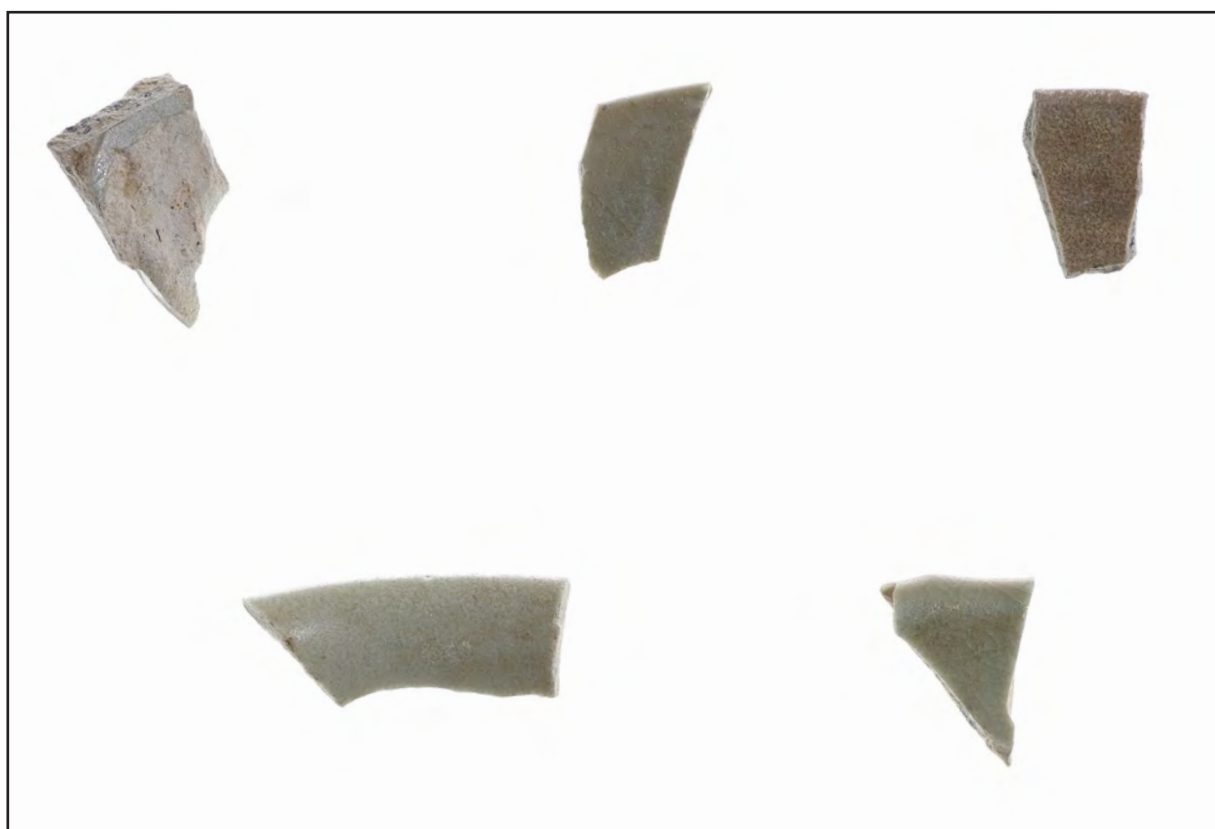
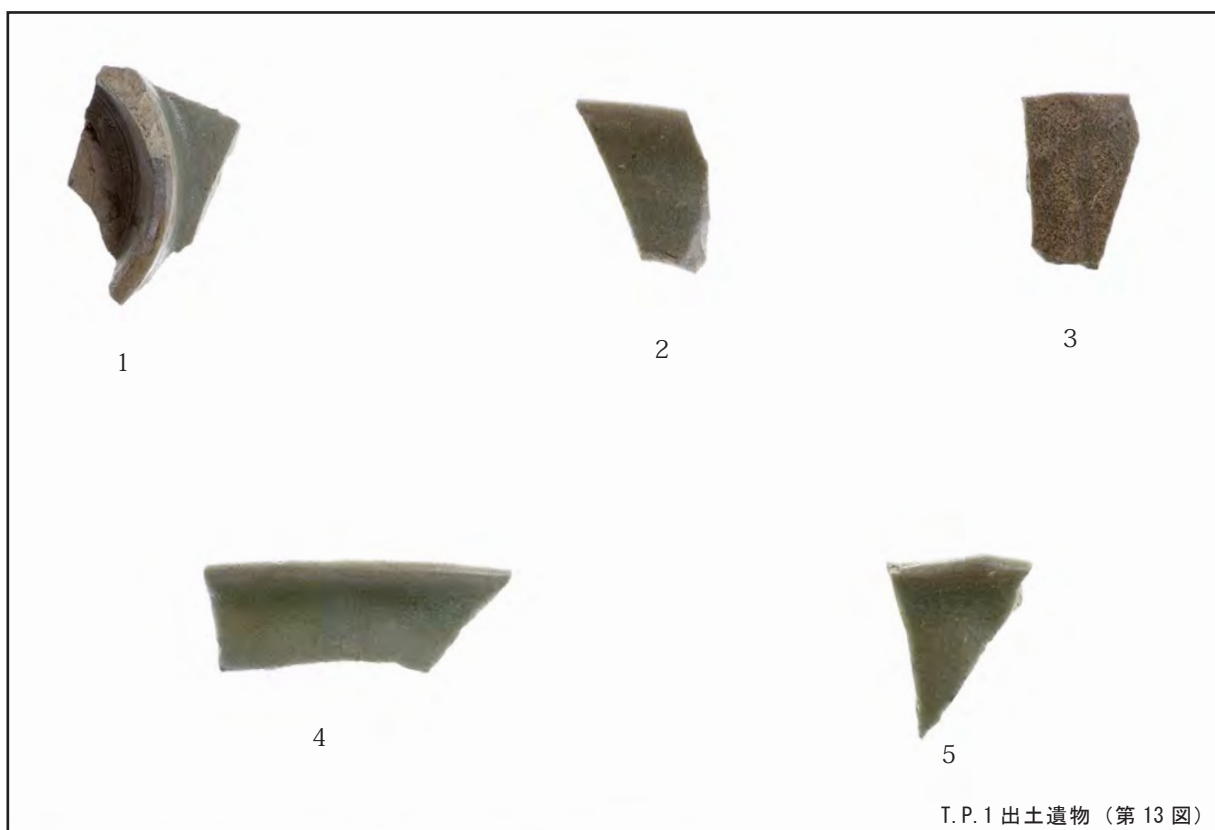


T. P. 10 遺構完掘状況

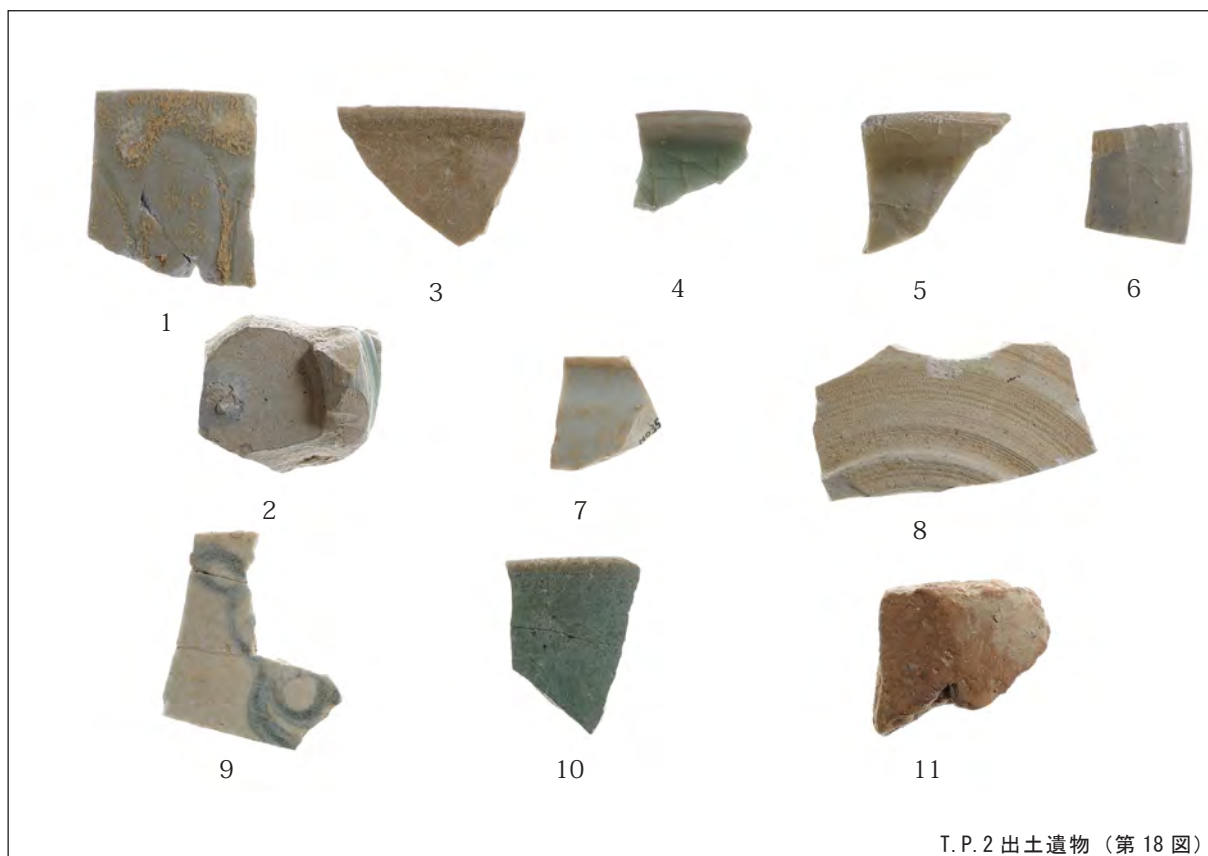


T. P. 11 遺構検出状況

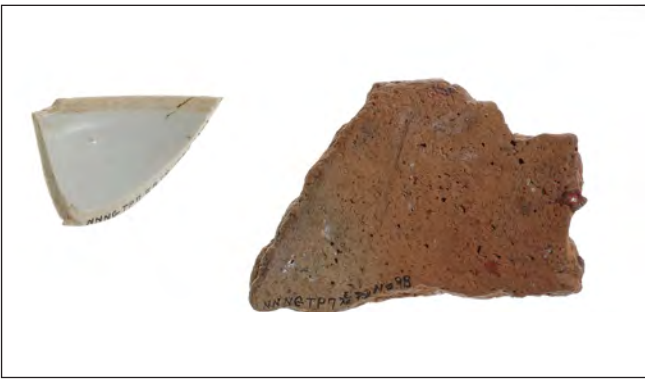
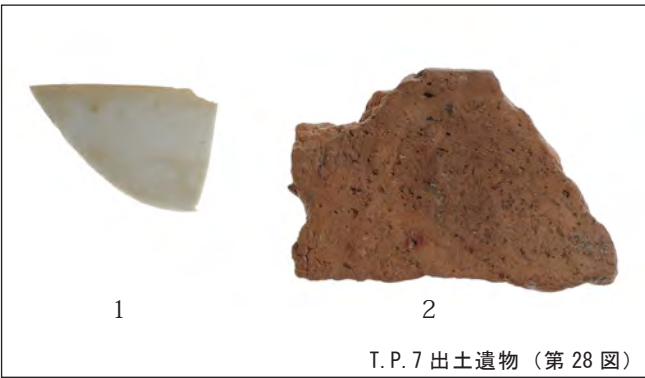
図版 13 遺構 (6)



図版 14



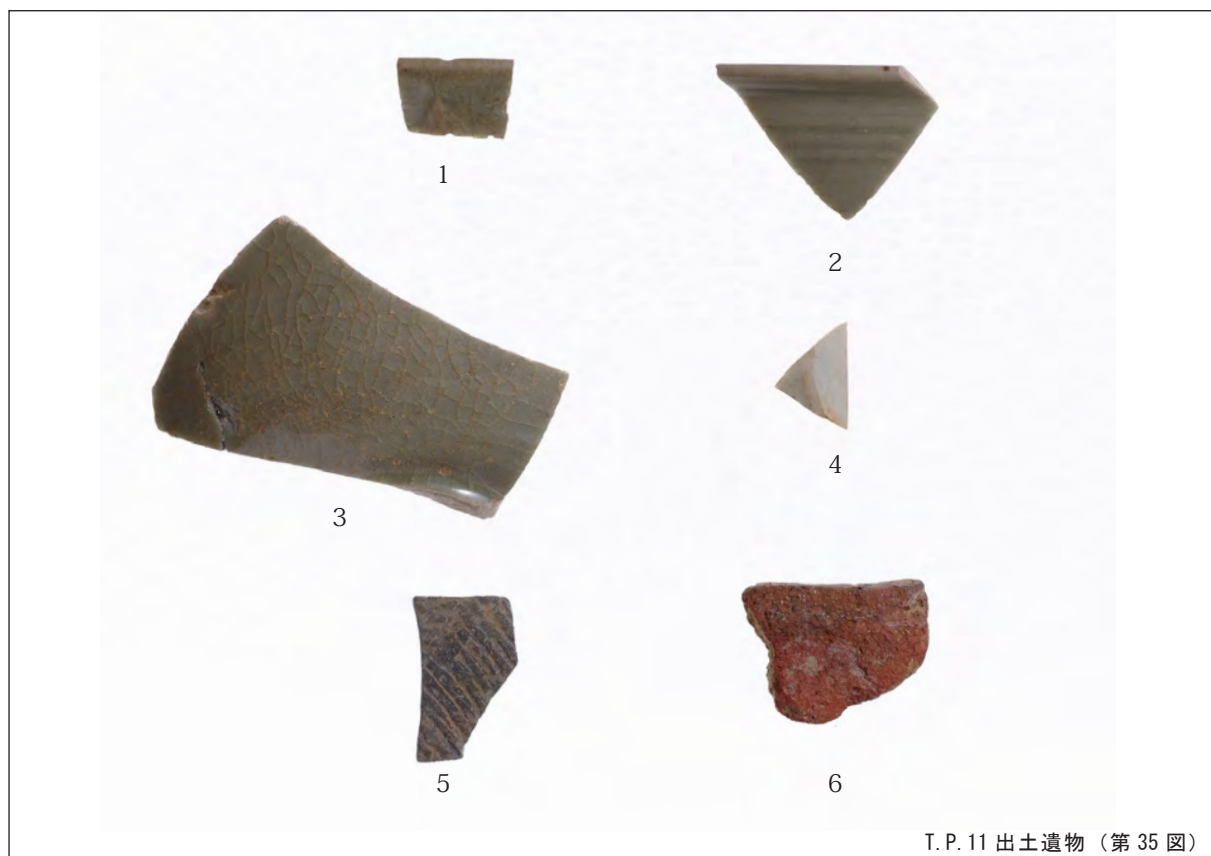
図版 15



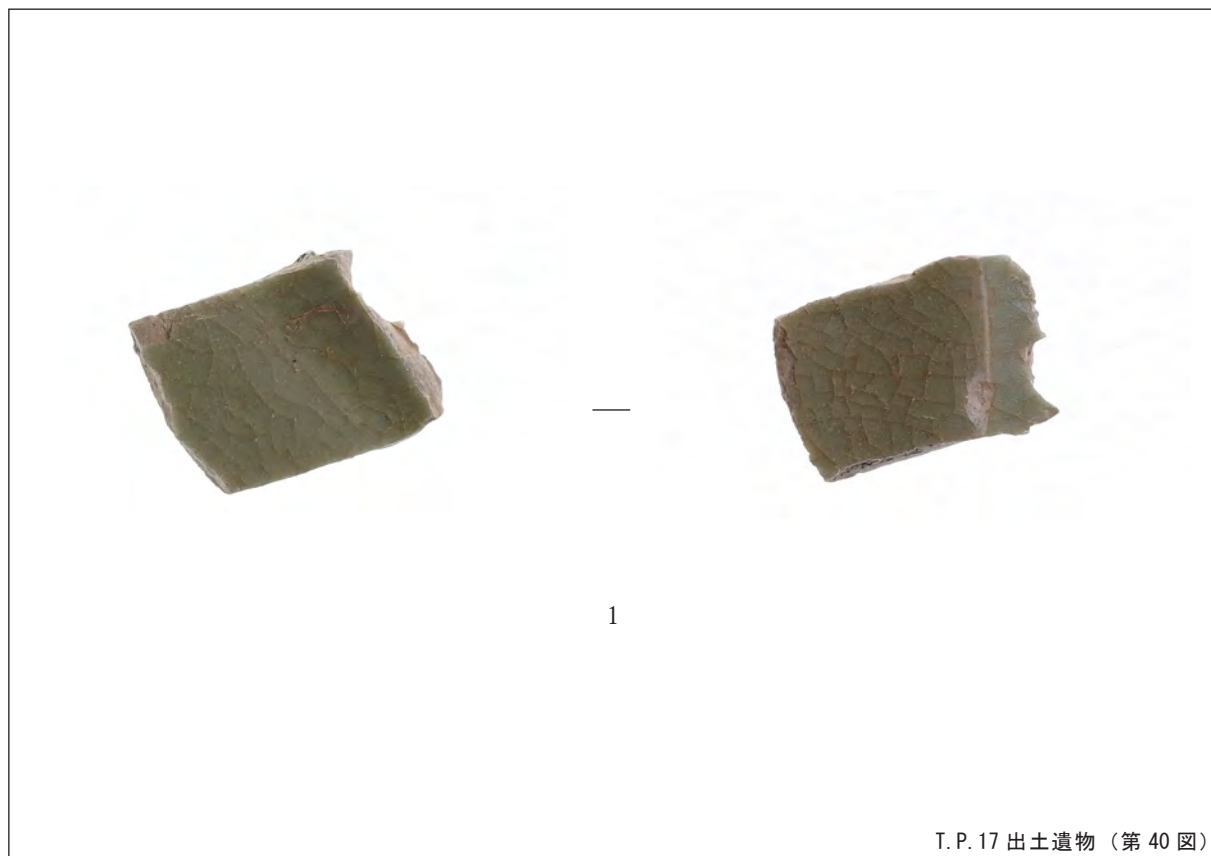
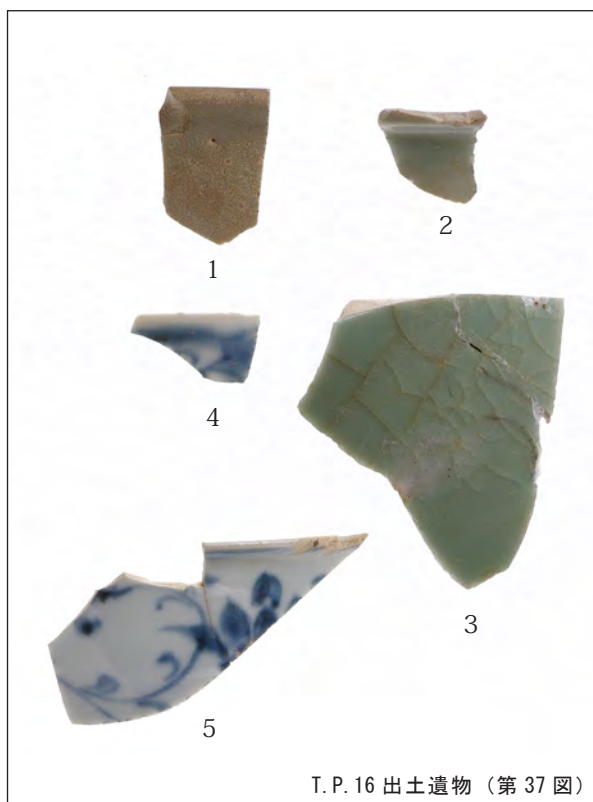


图版 17



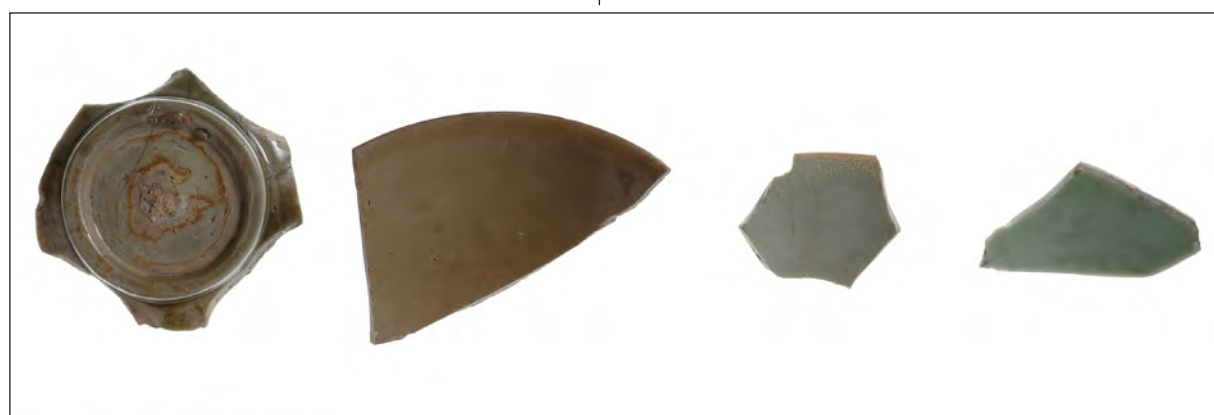
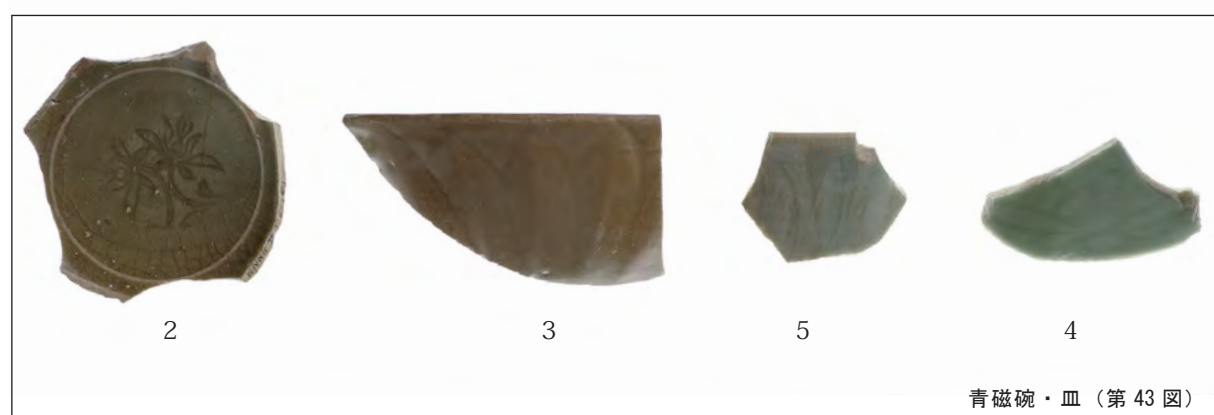


図版 19

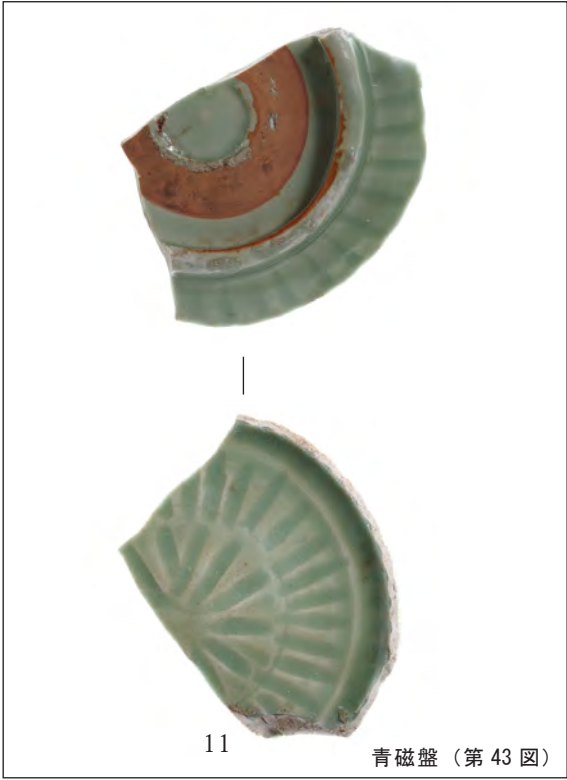




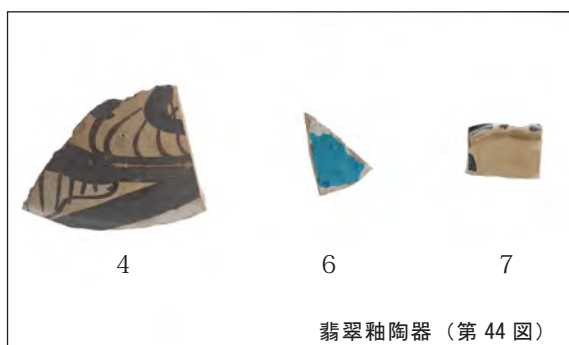
図版 21



図版 22 表採 (1)



图版 23 表探 (2)



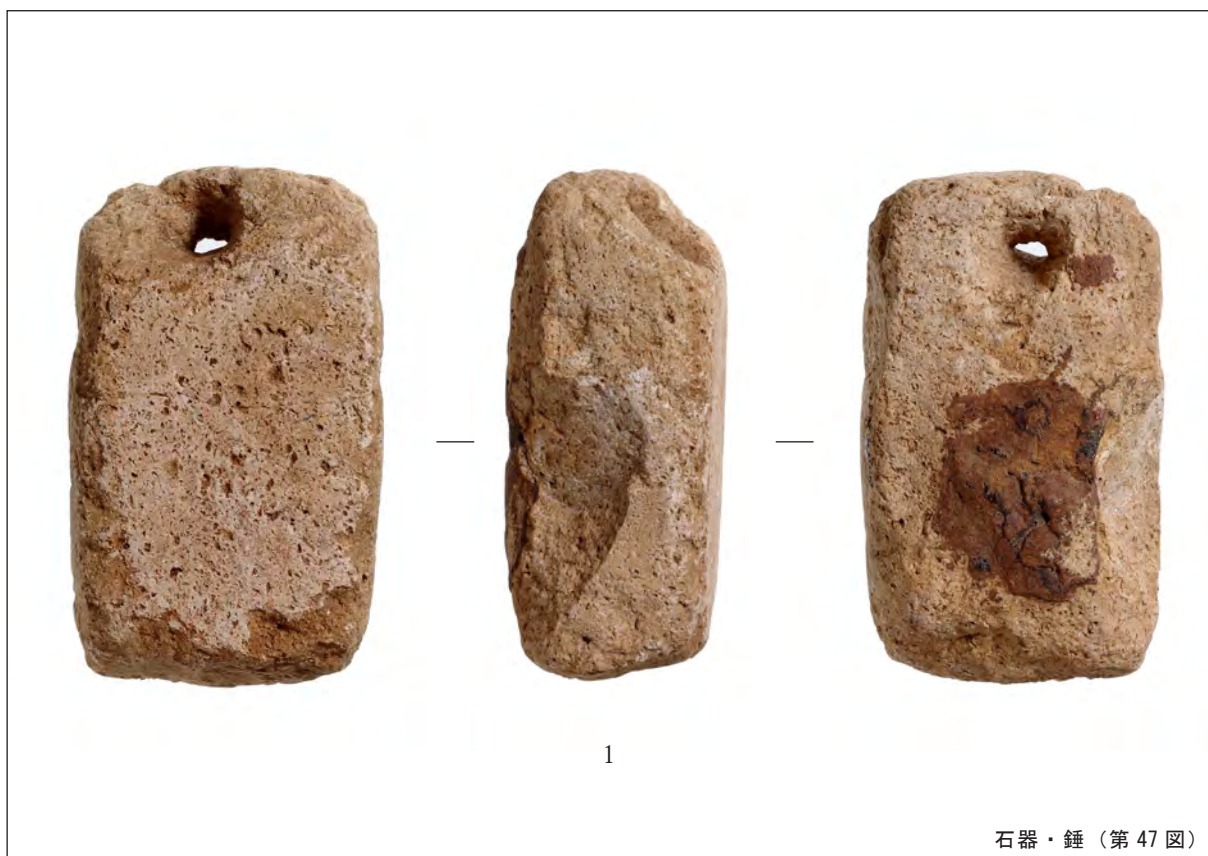
图版 24 表採 (3)



図版 25 表採 (4)



図版 26 表採 (5)



図版 27 表採 (6)



報告書抄録

ふりがな	なんぐしくいせきぐん							
書名	ナングシク遺跡群							
副書名	市内遺跡詳細分布調査報告書							
シリーズ名	名護市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 28 集							
編著者名	真栄田義人 宮城智浩							
発行機関	名護市教育委員会							
所在地	〒905-8540 沖縄県名護市港一丁目 1 番 1 号							
発行年月日	2021（令和 3）年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なんぐしくいせきぐん ナングシク 遺跡群	おきなわけん 沖縄県 なぐし 名護市 あぎなぐすくぼろ 字名護城原 いどよりぼろ 及び以上原	47209		26° 35′ 19″	127° 59′ 36″	2013. 07. 04 ～ 2014. 12. 05	156	市内遺跡 詳細分布 調査
所収遺跡名	種別	主な		主な遺構		主な遺物		特記事項
ナングシク遺跡群	グスク 集落跡	グスク時代～近世		堀切 炉跡 ピット		在地土器、中国産陶磁器、タイ産褐釉陶器、備前陶器、肥前陶磁器、カムイヤキ、沖縄産陶器、高麗系瓦、石器		
要約	文化庁国庫補助事業を受けて、平成 25～26 年度にかけてナングシク遺跡群の発掘調査を実施した。							
	ナングシク遺跡群は、名護市字名護城原に所在するグスク時代から近世にかけての遺跡である。本遺跡は名護市市街地の東側の丘陵に立地し、標高約 106m の丘陵頂部を主郭とし、丘陵中腹あたりを削平して築かれた県内では数少ない石垣をもたない山城形式のグスクである。グスクは名護岳から西側に伸びる舌状台地を利用して築城され、台地の北側及び南側は自然の急斜面となり、特に北側は深い谷間で川が流れている。一方、尾根筋にあたる西側及び東側は緩やかな斜面で、特に東側の名護岳から続く尾根筋はグスク最大の弱点となっている。このため、この尾根筋を遮断する形で幅約 8m の大きな堀切と幅約 2m の小さな堀切を二重に設けて敵の侵入を防いでいる。さらに、北東側から南東側にかけては、主郭のすぐ下にあたる斜面中腹部に侵入防止のための細長い曲輪を廻らしているほか、主郭以外にもグスク内には比較的大きな曲輪が数箇所存在している。							
	発掘調査の結果、ほとんどの調査箇所でグスク時代の包含層が攪乱を受けていたが、なかには包含層が未攪乱の箇所も存在し、グスク時代から近世にかけての遺物や地山を掘りこんだピットなどが確認された。特に T.P. 2 においては、ピットと共に炉跡が検出され、生活の痕跡を伺うことのできる貴重な発見となった。ナングシク遺跡群では、これまで詳細な発掘調査が行われていなかったため、今回の発掘調査で得られた遺物はもとより、ピットや炉跡等が確認できたことはナングシク遺跡群を知るうえで重要な調査となった。							

名護市文化財調査報告書第 28 集
ナングシク遺跡群

—市内遺跡詳細分布調査報告書—

発行年 令和 3（2021）年 3 月

発行 名護市教育委員会

編集 名護市教育委員会 文化課 文化財係

〒 905-0021 沖縄県名護市東江 1-8-11（名護博物館 2F）

TEL 0980-53-3012

印刷 沖縄高速印刷株式会社

〒 901-1111 沖縄県島尻郡南風原町字兼城 577 番地

TEL 098-889-5513
